
この問題、答えられますか？

河道 秒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この問題、答えられますか？

【Zコード】

N67777V

【作者名】

河道 秒

【あらすじ】

特殊な義眼を持った少年、黒木天真是恩師から一人の金髪の美女、シャノン＝フォン＝フォスターを預かることになった。ついでに彼女と同居。何ともいびつな関係が築き上げられたのだ。

幼馴染の天音凜の尻にしかれつつ、悪友のサイカ＝リンクスにはやし立てられつつ、義妹の黒木紅音に手を焼かされつつ、天才奇人少女のリリス＝フォーの破天荒さに苦労を感じつつ、シャノンを交えた日々を過ごしていた。

そんな矢先、黒木の周りで異変が起り始める。彼の住む寮に向か

つて銃弾が撃ち込まれたり、シャノンのことを囮うように黒い服の集団がいたり、巫女服の女性、中松沙雪が突撃してきたり。そして、天真はついに踏み込んではいけないとこままできてしまつて？

清々しい朝(?) (前書き)

まずはプロローグです。

清々しい朝(?)

清々しい初夏の朝のはずだが、高校生の住む学生寮にはなんとも形容しがたい空気が流れていた。

「今日の朝飯は食パン、スクランブルエッグにベーコン、ソーセージ」

寮の小さなテーブルに並べられた料理。それを見て、ゆっくり椅子に腰掛ける腰掛一人の少女に向かつて、俺 黒木天真是にこやかな笑顔を作りながら朝食の献立を言った。

「……まあまあなんじゃないの」

しかし、その笑顔を無かつたかのようにして、少女は仏頂面で切り返した。

少女の名前はシャノン＝フォン＝フォスター。艶やかな金髪は朝であるにもかかわらず、その光沢を失っていない。体は華奢であり身長は女性のなかでも低いほうだろう。さらに女性特有の起伏には乏しい。一見すると中学生ぐらいに見えるのだが、れっきとした高校生である（自称）。そして、青い瞳はサファイアを想像させるかのような美しさを持つている。しかし、正面に座つた俺を見る目は何かを蔑むような目つきである。

「まあ、文句を言わずに食え」

「あたしに命令すんな。痴れ者くせ者無礼者」

「朝なのによくそんな汚い言葉がポンポン出でくるもんだな」

「汚くなんかない。本当のこと言つたままでよ」

「ひどい言われようだ……」

ちなみにここは日本である。さらに付け加えるとすると横浜である。グローバル化する今の社会、外国人がいて、流暢に日本語をしゃべつても何の問題も無いのだが、ここは学生寮。当然、思春期真っ只中の男女が同室にいることはまず今のじ時世では珍妙であろう。「こんなのが毎日、毎朝続くのかよ……。うつ病になつちまこそう

だ…」

「なんか言つた？」

シャノンは高圧的な態度で俺を見つめた。

「何も！」ぞこませんよーだ」

俺は心中で本当に大変なことになりそうだ、と大きくため息をついた。

「くそー……師匠め……。なんでこんな厄介事を……一体今度はいつ来るんだろう……」

シャノンはある俺の恩人から預かっていてほしいと頼まれた人である。断りたかったのだが、断るに断れなかつたのだ。

「何よその見るからに嫌らしそうな顔は。気持ち悪い。ビリにかして」

「あなたはどうして刺々しい言葉をどんどん吐けるんでしょうかねえ！？ 豹変つぶりが恐ろしい！」

「なんて言うのかな……本能的に、かな？」

ひまわりが咲いたような笑みを見せるシャノン。俺はどう反応していいか分からず、

「もう学校あるから、行くな……」

と、その場から退散することを決め込んだのだった。

「ガツコウ……？ ああ、イサオが言つてたあの子供が寄つてたかつて黒板見る場所ね」

「随分、偏つた見方してるな……。学校は単にそういう場所じやないさ」

「じゃあどういう場所よ？」

「お前、学校行つたことないのか？ やつぱりまだ高校生じゃないふがつ！？」

黒木の顔面の中央に右ストレートが炸裂した。顔から火が出るような痛みがした。

「加減を知りなさいっ！ 痛いじゃねえか！」

「注文が多い。某森の中にある料理店じゃないんだから

俺が涙を浮かべて懇願するも、シャノンは氣だるそうな碧眼をしながらでそれを却下した。

「もう諦めよ。……。じゃあ行つてくるからな。外に出て良いけどカギ閉めて行けよ。それと部屋の中のモノだけは壊さないでくれよ」

俺は学生力バンを持ち上げ、玄関に向かう。

シャノンは朝飯をつつきながら、

「分かった。テンシンは何時に帰るの？」

（こういうところは素直なんだな。つーか、やっぱり大人しければ可愛いな……）

と、俺は心の中で呟いた。彼女は西洋人形のように可愛らしい少女なのだが、たまにとんでもないことを言つたり、目線が鋭かつたりとその愛らしさを下げる要素があるのだ。ただそれはいつもではなく、朝が一番ヒドイだけなのだが。

「そう。あれ、少し顔がにやけてるわね、どうしたの？ 隨分気持ち悪いけど」

「一言余計だ……。なんでもねえよ。じゃ、行つてくれるな」

俺がドアノブに手を掛け、部屋を出るとき、

「……行つてらっしゃい」

呟きに近い彼女の声がかすかに聞こえたのだった。

俺が戸惑っているのも無理はない。戸惑つていないうつに見えても内心はものすごく戸惑っている。なぜなら、彼女と会った一日前から奇妙な状況が続いているのだから。

主人公体质の男の子（前書き）

第一部の続きです。

主人公体质の男の子

六月の土曜日の朝を、俺は清々しい気持ちで迎えた。カーテンをさつと開け、初夏の日差しを部屋の中へと招き入れる。

「ちょうど良い暖かさだな。授業中寝ちまわないようにしないと……」

俺の席は一番窓際なので、ちょうど眠気を誘う暖かな日だまりが直撃するので、気をつけないと教師に叩き起こされてしまうのだ。「で、だ。なんでお前はこんな清々しい朝に俺の部屋にいるんだ?」「黒木がさつと後ろを振り返ると、

「…………？」

俺の背後には少女が一人。肩のところで切りそろえられた黒縄のような美しさを持つた黒髪。背は黒木の肩くらい。学校指定の純白のYシャツに、スカートという出で立ち。薄手のYシャツだから、女性特有の二つの隆起したカタマリが強調されるように大きく感じた。

彼女の名前は、リリス＝フォー。学校で知らぬものはいないというぐらいの有名人である。彼女の特徴は、碧眼である。黒髪なのに碧眼、というのは珍しいだろ?。

「…………何故、と言われても…………」

「それに、俺の部屋のロックはどうやって外した? そんな音が一切聞こえなかつたんだけど…………」

「…………即興で作った対犯罪用鍵穴のピッキングセット。既存のピッキングセットとアルミを加工して作りました」「またか…………」

俺はこめかみを押された。どうしてこんなところにその才能を使つてしまつんだろう、と。

ちなみに彼女は一言で言つと、天才、である。今までの校内の定期テストでは一位を記録し、既に外国の大学への推薦入学が決まつ

ており、おまけにさつきのように即興で犯罪道具を作るのもお茶の子さいさいといつたところである。

たまにこうして俺の部屋にもぐりこんで物をたかつたり、彼女のヒマをつぶしにくるのである。他の連中の部屋にももぐりこんでいる、らしい。そして彼女はあまり社交的な性格ではないので、友達は少ない。俺の一つ下の学年だが俺に興味があるらしく、こうしてたまに会つたりするのだ。

「用件はなに?」

「……朝ごはん」

「へ?」

「……朝1はん、まだ食べてないんです
何かを懇願するような田線。

「よつは、俺にお前の朝飯を作れと?」
「うん」

普通の女の子の場合ならいやつほつ、これでウハウハだぜ、となるところなんだろうが、相手は美少女であるが天才の奇人。当然、そういう反応は無いわけで。

「俺だつて今からなんですけど……」

「ダメ?」

女の子の武器、上目遣い。だが、こんなのはある人物に毎回食らつていいので俺はビクともしない。

「ふふふ、この黒木さんの心を動かすような頼み方ができたら良いぞ。チャンスはあと一回だ!」

リリスはむむむ、という声を出しながら考え始めた。

(これだけでも相当クラクラ来てるけどな……)

さすがに天才といえど、思春期真っ盛りの血氣盛んな男子の気持ちをキヤッチするお願いの仕方なんて、色目使う以外には流石にないだろう、と俺は考えていた。が、

「……お兄ちゃん、1はん食べて?」

急に声を甘つたるくし、上目遣い。破壊力は半端ではなかつた。

男子の回避不能な朝の生理的現象をもう一度、復帰させてしまつべ
らいの。

俺は正直な話、彼女を侮つていた。しかし、
「む、無理だ……。た、耐えられないッス……」

「私の勝ちですか？」

きょとんとした顔で言つた。天才は「こんなこともやれるのか、と
俺は心の中で感嘆していた。

「わ、分かった……。朝飯作るから……つてあと十分で身支度済ま
せないと遅刻するぞ！？」

「手伝つたほうが良いですか？」

「いや、お前は良い。大変なことになる……」

「……お腹が空きました」

「あ～もう分かったから！　今すぐ作つてやるから涙田で上目遣い
しないでエエエ！」

俺は慌ただしくサンドイッチを作りながら遅刻を覚悟したのだった。

ちなみに、騒ぎながらも今日の朝のテレビで見た星座占いで俺
かに座は最下位だつた。

人生最悪の厄日にになります。身体と慢心とお金に注意。ラッキー
カラーは金色、自分を見つめなおすと幸運が呼び込めるかも、だそ
うだ。

その後健闘するも、リリスが途中で寝てしまいそれを朝飯を食べ
ながら起こしてしたり、そのピンチを切り抜けダッシュで学校にま
で向かつていてるときに、つい困つていていたおばあさんを助けてしまつ
たりと色々なことをしていたらあえなく学校のホームルーム終了の
チャイムが聞こえたのだった。

「はあ……」

「お、天真くん！ 今日は遅刻かなあ？」

教室に入るなり、男の声が聞こえた。窓際の席のほうからだ。

声の主の少年の名前はサイカ＝リンクス。名の通り、外人だ。金髪の少年で、顔は地方テレビに出てるようなタレントよりもイケメン面である。それでいて女子にモテない理由がある（つていうか何気に俺の学校、個性的な外人が多いよつた気がするんだけど……）

「普段遅刻だけはしない天真くんが今日はなんで遅刻なのかなあ？」
朝の喧騒を聞きながら、俺はカバンを席に置く。

「うるせえ。今日は朝から大変だつたんだよ」

彼は俺の隣の席であり、簡単に言うなれば悪友、である。

「そういう人間はだいたいシアワセ体験をしている！」

サイカは世間一般的に言うとオタクである。それも重度の。

「んなワケないだろ……。お前、ゲームのやりすぎね。つたく、バカお前は」

「で、結局お前は何して遅刻したわけ？ ステキイベントだつたら殺す」

「リリスに忍び込まれて朝飯を作られたのが主な原因であとは人助けだ。ほらどこにもそんなステキイベントなんてあるわけが」

そこまで言つた瞬間、何人かのクラスの男子の目線が俺に向いていた。この朝の喧騒の中、俺たちの会話を聞いていたクラスメイトたちに一瞬恐怖を覚えた。そして同時に第六感で感じた。このままでは危ない、と。

「ほうあの天才美少女リリスちゃんと一緒に朝を過ごしたワケですかほうですか……野郎ども」

「なあ……サイカ。なんでそんなに怒つてるんだ？ いやたまたま今日だけだつたわけでそんな毎日というわけでは……」

「朝、美少女と過ごせるなんて男の夢でしちゃうが！」

「知らねえよ！ おいおい周りの奴ら同調すんなって おい、目

キンコーンカーン

(ああ、この懐かしいような響き……)

一 指定するべきか超えたのね？

とこかで置いたよ二年少女の

寝ぼけた頭で俺は尋ねた。

「放課後の二時。寝てたわよ」

どうやら俺は帰りのホームルームの途中で寝てしまつたらしい。授業中に堪えていた眠気のせいだらうか。自分自身、よくもまあ寝てられるものだと思った。

「んでもって凛はなぜここに……？」

突つ伏していた俺の横には天音凜かいた。目鼻は端正に整つてい
る。首をかしげると茶色に染まつてゐるポニーテールがふわつと揺
れる。彼女は俺の小学校からの仲であり、高校に入つてからも一緒
に帰るくらいの仲である。

んだから

少しそうじなく、モジモジした様子で手をいじりながら言った。
「また癖出でるや。早く直せよな。中学校の時から言つてるだろ？」
その手をいじる癖は彼女の小学校からの何かを言つとときの癖である。

•
•
•
L

「わ、分かつてゐわよ」

「よし、なら良い。帰らうぜ。待たせりまつたな」

「ええ」

一緒に帰る、と言つても俺の寮までの間だけだが。
一人並んで、帰る。他愛のない話をする。それが俺にとって幸せな時間であり、日常である。

「ねえ、ちょっと遊んで行かない？」

凛が唐突に言った。

「良いけど……どこ行くんだ？」

「お昼ごはん、食べに行こう？」

「オーケー。まだ金に余裕はあるしな」

「そう言つて月末に無くなるのがオチでしょ」

「すんません」

近くに、ちょっとしたアーケード街があるので、そこに行くことにした。ふと残金がいくらかを確かめるために財布を開けると、「あ、やべ。下ろすの忘れてた。凛、ちょっとそこで待つてくれ「もう、しっかりしてよ」

近くのATMで金を下ろす。結構人が並んでいたので、時間がかかった。

（少し、遅くなつたな。あいつ、時間にはうるさいからな……）

と、気がつくと、凛が数人の男に囲まれていた。

「なあ、ちょっとでいいから俺たちと遊びに行かねえ？」

「いえ……予定が……」

「そんなの後でいいじゃん、なあ？」

「そういうわけにも……」

凛はぶつちやけて言つと可愛いから、ナンパを受けるのも仕方があるまい。一人や二人のナンパは慣れているという話は聞くが、複数人は彼女にも堪えているらしい。

「ちょっと、アンタたち。やめてあげなよ」

俺は面倒くさそうに話しかける。

「おいおい、お前こいつの男かよ？」

体つきの良い男が言った。

「いいや。友達」

凛が何か言う前に俺がさりとて言つてのけた。俺は喧嘩になつても勝てる自信があつたからだ。

「喧嘩売つてんのかあ！？ 口はさんでんじやねえよー。」

いくらなんでも理不尽すぎるなあ、と俺が思つて片目を瞑る。意識を一点に集中させる。見ることだけを、全てのものを捉えてるかのようなイメージ。自分の中のスイッチが切り替わる。

再び目を開くと、男が不意に殴りかかつてくる。それを俺は最小限の動きでよけた。なぜなら、相手のパンチがスローに見えたからだ。

「やめてくれ。喧嘩は嫌いなんだ。それに……白昼堂々と……恥ずかしくないのか？」

「なめんなよ！ 全員で掛け！」

（困んでなんて汚つたない野郎どもだな……つーか今日はホントに厄日だ……。さつさと片付けよう）

次々と拳や蹴りが放たれるが、悠々と、最小限の動きだけでかわしている。そして、今の俺の右目の色は黒ではなかつた。金色。それが俺の今の右目の色だ。

「なんで当たらねえんだ！？」

「はあ……」

この右目、動体視力を通常の十倍にできるという代物だ。これは魔法とか、超能力とかそういうものじゃない。機械だ。

俺は昔、右目を失明した。そんな時、ある人に助けられ、その失明した右目に実験段階中のこの義眼が埋め込まれたというワケだ。この義眼の原理は、脳に線を通して、それを義眼に繋げるというのだ。義眼はナノマシンの集合体でできているらしい。普通の肉眼と機能は全く変わらない。普通にモノが見えるが、脳に送る電気信号を変化させ、眼球運動を増大、拡張させることによって動体視力を一時的ではあるが、爆発的にあげることができるのだ。ただそ

れは脳の負担を考えると「ごく僅かな時間しか使えない。連續で十五分が限界だ。その動体視力を上げている時だけ目が金色になる、という痛々しいおまけつきだが。金色になる理由は確か、ナノマシンがフル稼働しているからだそうだ。

「もう気は済んだか？」

「この野郎……！」

ゆくりと大きく振りかぶる。十倍の動体視力で見てるのだからものすごく遅く感じた。痛恨の一撃を出そうという気である。俺は能力を使わなければ、喧嘩もさほど強くないし、力も強くはないので、戦略的に、そして確実にここから脱出する手口を選ぶ。それは、

「えいっ！」

男の弱点に わかりやすく言うと足と足の間の空間に 跳りを叩き込んだ。同様にほかの連中にも流れ作業のように股に蹴りを入れていく。動体視力が向上し、パンチの中でもそれをかわしながら、蹴りを叩き込む。

「えいっえいっえいっ！」

「あ……ぎつ……」

男ども、その場で股間を押さえながら悶絶。しばらくは痛みが引くだろう。

「大丈夫、そんなに力入れてないから潰れはしないさ」

凛のもとに行つて、ここから離れるように促すと、なぜか彼女の頬がほんの少し朱に染まっていた。

「あ、ありがとう……」

「おう。じゃあ飯食いに行こうぜ」

「わ、わたしを守つた、つてこと？」

「ううん。どうかな……困っている人は放つておけないしな！ あとは気分だ」

俺が答えると、

「バカ……。今日、天真のおごりね！ わたしを怒らせた罰として」

「ええええええ！？ 俺なんか悪いこと言つたか！？ だとした

「……せんせー、おめでとうござんす！」

「ダメ。今日はおごりだから。あんな人たちに絡まれたのもあんたのせいなんだから」

「わーい！ やったあー！」
「……それを言われると……
分かっただよ！ おいでよー。」

こうして横で喜んでいる姿を見ると、つい笑みがもれるのは凛の

「どうしたの？」何か楽しいことで走ったの？
魅力なんだろうか、と俺は思ったのだつた。
あ、いつもみた

いにえつちな想像してたでしょ」

「そろそろ覚えてなーっス。ほんと吉野一。腹減つたが、ひっ隣へ行
じとつ、とした目で彼女が俺のほうを見てくる。

一九四

「ええ」

近くのアーミレスに行くことにした。毎時というだけあって混んでいた。学生もちらほらと見えている。凛は結構注文の数が多くつた。あまり注文させられると今月がつらい……。

「これ以後、デザイナーなるものを注文されないよう、手釘をしておく」とした。

「これ以上食べると……太る
コフッ」

今の珍妙な音は凛が俺の顎をアッパー・カットした為、出た音である。顎が痛む。凛ってこんな力が強かつたのかと思い知らされる。「なぜ殴られる！？　俺はただ注意してやつただけなのに！　理不

「次も『一度も』きのよくな失礼な」とを言ひて「賢なさい？」
加減はしないわ」

「今のが加減したというんですか！？ どんだけ怪力！？」

「い、今のが全力よオホホホホホ」
「無茶苦茶きこちないしゃべり方になつてゐるぞ。といつかお前、田

頃ちゃんと食つてんのか？ 妙に瘦せてるよつに見えるんだが」「そ、そつ？ でもそりや、食べるわよ。食事には氣を使うけどね」

「ふうん」

俺も少しほは食生活に氣をつけようかな、と呑氣に注文を待つていると、

「つむ？ 天真か。元氣そつで何よりだ」

「え？ 師匠？」

俺の横には師匠 あまみや じとう 雨宮功が立つていた。長身で、肩幅は広い。凜々しい顔つきで、声は渋い。和服でも着たら似合つてそうなのだが、簡素なシャツと、ズボンという組み合わせだ。ちなみに年齢は不詳。趣味は放浪なので一箇所にどどまつて何かしているといつことは少ない。他のことは一切不明。

師匠は俺の義眼をつけてくれた科学者兼医者であり、人生で一番の恩師である。なぜ先生ではなく、師匠と呼んでいるかといふと、そのほうがカッコいいじゃないか、といつ師匠の希望からだ。

「今日はどうしたんすか？ 旅行ですか？ それとも研修会か何かですか？」

「いや、今日はお前に用があつて來た。まさかこんな所で会うとは。好都合で何より」

「用つて？」

「後でいい。それよりこちらのお嬢さんは？」

「天音凜と言います。よろしくお願ひします」

凜はきれいにお辞儀をする。ながら、高級レストランのウエイタレスのようだった。

「私は雨宮功。医者だ。天真がいつも世話をになつていて」「いえいえ、そんなことはありませんよ。つまでも助けてくれましたし」

「うむ？ 彼女を何かから助けたのかね、天真？」

「ええまあ……。ナンパしようとしてた奴らがいたんで……」

「良い心がけだ。では天真お前の寮の前で待つていいぞ。そちらの
お嬢さんもまたよろしく」

と言つて、出て行つたのだった。昔から素つ氣なくて、人付き合
いもそんなには多くない。言いたいことだけ言つてどこかに行く嵐
のような人だ。

「あの人、天真の知り合い？ 師匠、とか言つてたけど」

「あれ、凛会つたことなかつたっけか。俺の義眼をつけてくれた人
だよ。科学者兼医者つていう無茶苦茶な組み合わせだけど」

凛は俺の右目については知つてているのだ。義眼について知つてい
るのは身内の人間と凛ぐらいである。

と、会話をしているうちに目の前のテーブルに料理が並べられる。

「いただきます」

「いただきます」

一人で言つて食べ始める。

この時は何も思わなかつただろつ。この後、本当の人生最大最悪
の災厄が舞いこんでで来るとは思わなかつたのだから。

食事を終わらせ、レストランを出る。代金は当然の」とく、俺に

払わせる凛。怖いものだ。

「じゃあ俺は帰るから。じゃあな、また今度」

「ええ、またね」

凛は帰る方面が反対なのでここでお別れである。

(そういえば師匠が待つてるとか言つてたな……。何の用なんだろ)
ここから寮までは歩いて十分かかる距離にある。師匠に会つ
のは久しぶりだ。三年前似合つたのが最後だつた……。ような。とに
かく久しぶりの再会なのだ。世間話でもしようかな、と考えている
と、

「おお、天真。遅かつたな。ガールフレンドとの食事がそんなに楽

しかったか？まあ、人生一度の青春をそういうふうに謳歌するもの悪くはないだろう

「が、ガールフレンドとかじゃないですよ、凜は。それで俺に用つてなんですか？」

「この子を預かつて欲しい。シャノン」

そう師匠が言うと、彼の後ろおずおずと金髪の少女が出てきた。西洋人形のような端正な顔立ち、白磁のような白い肌、大きなサファイアを連想させる碧眼。首には高級そうなペンダントもかけている。線の細そうな小さな体は触れただけで壊れてしまいそうだ。青いワンピースは初夏に見合った清々しさを感じさせる。

「この子はシャノン＝フォン＝フォスター。少し事情があつてな……。俺が預かることになつてている

「そうなんですか」

「何を他人事のような口調で言つているんだ。俺にはこの子を預かれない事情ができた。だからお前に預けることを決めた」

「は？」

つい、素つ頓狂な声が出てしまつた。あまりにも急で、頭が現実に追いついていけない。

「お前のその義眼、誰が取り付けてやつたんだ？」

師匠には大きな借りがある。俺の義眼をつけてくれたのもそうだし、それを無償でやつてくれたのだ。

「師匠のおかげデス」

「なら、その恩返しとでも思つてくれ。この子を預かつて欲しい」

「マジな話ですか？」

「大マジだ」

「いつぐらこまで？」

「俺がここに引き取りに来るまでだ」

「うわあ……」

シャノン、という女の子は師匠にくつつきっぱなしであつとも離れようとする素振りを見せない。よほどなつていてるようだ見える。

そんな仕事はあまり背負いたくない。食費がかさんでしまう！

「あ、でも師匠それはそれで問題があるんじゃないですか！？」 管理人に見つかったらタダじやすみませんし、他の寮生にも迷惑がかかるんじゅ……

「問題ない。管理人への挨拶は済んである。管理人からもそのことを他の寮生にも伝えるよう、言つておいた」

「……」

ぬかりない人だった。

シャノンの目つきはなんだか鋭い。俺のせいだらうか。
「ではよろしく頼むぞ。それではな」と、言うと師匠は走り去つていった。

「ちよつ、師匠！ はあ……」

それで残されたのは俺の目の前にいる少女と、俺だけ。どう切り出そつかと、俺の少ないヴォキヤブラリーを漁つていてる真つ只中だ。そんな時、ギュルルル、という音が一人の静寂の間に鳴り響いた。

「腹、減つてる……？」

シャノンはこくりと頷いた。

「冷蔵庫の中には……チャーハンぐらいなら作れそうだ。食べる？」
彼女はまたこくりと頷いた。それがとても可愛らしい仕草に見える。

「じゃ、こっち」

彼女は無言で俺のあとをついてくる。少し後ろを振り返つてもしやべる動作の一つすらしない。しかもその顔がムスッとしているのは気のせいだらうか。

俺の部屋は五階にある。そして俺の心はその五階から飛び降りようとしているかのように心臓の鼓動が早い。というか今になつて頭の整理が追いついてきたのだ。

師匠から彼女を シャノンを 預かってほしいと頼まれた。預かって欲しい、ということは同じ屋根の下で寝食を共にするということである。この子だつて女の子だ。そんなことになつたとした

らまともに寝てこられる自信がない。

「ち、どうぞ……。汚いけどな……」

シャノンは何も言わずに入ってくる。ただ、やつぱり感じるのは俺を見るその眼光が以上に鋭い、ということだ。サファイアの髪に綺麗だが、氷のように冷たい視線。

（人見知り……なのか？）

俺は疑問に思いつつも、台所に行く。シャノンはテレビの前にちよこんと座っている。

「テレビ……見たいなら点けても良いぞ……」

彼女はその後もなんだかぼうっとしていた。

俺の包丁とフライパンの音だけが部屋の中に響く。正直な話、すぐ居づらい空間だつた。と、その時、

「兄さん兄さん来たよなんかご飯食べさせてよー！」

矢継ぎ早に言葉を飛ばしてきたのは俺の義理の妹である、黒木紅音である。

ノックもなしに、この部屋に上がりこんだ我が義妹は玄関から声がして一秒立たないうちに、俺の目の前に姿を現していた。仔犬のようなくりくりとした目にツインテール。首の黒いチョーカーが特徴的で、顔立ちもよく、黙つていれば男子からもてはやされること間違いなしながら、

「兄さん兄さん！ あの可愛い子は誰？ 触つても良い？ 抱きついても良い？」

「あ～うるさいな！ 頼むからあつち行つてくれ……。今料理中なんだ。つーか何でお前ここに来た？」

「ご飯」

「え？」

「お昼！」飯食べさせてもらうため

ああ、神様。というか占い師さん。今日は本当に厄日のようです。朝、昼と立て続けに飯を作つてやつたり、おじつてやつたり。わざには奇妙な少女が舞い込んできたり。

「うつ病になっちゃうやつだ……。

「わ、分かった。……とにかく少し待つていてくれ……」

「じゃ、あの子とお話してくるね!」

紅音はまるで犬のようだと昔から黙つていて。少しでも田を離すとどこかに行つてしまいそうな気がするからだ。見ての通り、興味があると、いつもそこへ行つてしまつ。苦労が絶えないのだ。

しかし、そんな性格上からか、興味のあることは極めるようで、博士号を持っているらしい。俺はあまり紅音には干渉しないのではなく分からぬのだ。

（まあ、せめて『お兄ちゃん』、と囁つてくれる妹が欲しいもんだ……）

「お前は？」

「……シャノン」

「シャノンちゃん？ 可愛いね～触りたい抱きつきたい」

シャノンも困り果てたような顔をしている（まゆげに変化があったのがわかる）。俺は彼女に助け舟を出してやるひつじ、わようひできたチャーハンを持って行く。

「ほれ、できたぞ。紅音のじゃないからな」

「えええー……」

「ええと、シャノン？ できたから食つて良いぞ」

「……うん」

今、初めて彼女の声を聞いた気がする。

ぎこちない手つきで食事を始めるシャノン。なんかじっくり見ると、かわいい。ちっちゃい手、碧眼、太陽を照り返すような金色の髪。こんないるなら妹がいいな、と思いふけつていると、

「ねえねえ、兄さん。なんか事情があるの？ 学校の子じゃないみたいだけど……」

「ああ、簡単に事情を説明するどだな……」

今までの経緯をおおざつぱだが紅音に説明した。師匠のこと、これから同棲するかもしれない、とこう一言。

「わあ……」

「どうすればいいと思ひへ？」

「楽しそうー！」

「おー！ 人の話を聞けつ！」

「だつて楽しそうなんだもん。兄さんの周りはいつも女の子だらけ

……妬けちゃうな

「んなわけあるか」

仮にも、そんなハーレムエンドが迎えられたら俺は幸せ者となると同時にサイカたちに指名手配されること間違いなしだが。「で、兄さんはどうするの？」

「師匠に言われたしなあ……。弱つたぜ……。あつ

俺はひらめいた。男子寮にシャノンがいないよつこし、かつ信用できそうな人物。それは、

「紅音。シャノンを預かってくれ

「イヤだ」

あつさつと打ち破られた。素晴らしいと思つたのに。

「となると俺が預かるしかないのか……。シャノン、じばくへりじに暮らすことになるけど……良いか？」

シャノンは少し逡巡し、

「……わかつた」

と、頷いた。こうして、彼女との歪な共同生活が始まった。

なぜ、彼女が頷いたのかは分からない。学生寮に興味を持ったのかもしぬないし、紅音に興味を持ったのかもしぬない。彼女自身が決めたことだ。俺が知る術は無い。そう、思った。もう一つ聞いたい。これなんてエロゲ？

「なあ、紅音。なぜ断つたんだ？ お前、別に不自由するひとは無いだろ？」

「面白そうな展開になりそうだったからー。シャノンちゃんに来てもらひよつ、ここに来てシャノンちゃんと遊ぶほうが楽しいし

「はあ……。ホント厄日だな……」

ぱくぱくとチャーハンを食べるシャノン。おにっこのがおこしれないのがどうちなのだらう。さつきから表情に変化がない。

「つまいか?」

「うん……」

（ふつ……。やつと口利いてくれるよつになつたか……）

「兄さん兄さんシャノンちゃんがチャーハン食べたら一緒に出掛けても良いよね？ 良いよね？」

上田遣い。彼女はいつも俺に頼み事をする時いつもするのだ。さすがに、長じことやられていたから免疫はついた。しかし、まだ少しそれに逆らえなくて、

「シャノンが良いつて言つたらな

「シャノンちゃんー お買い物行こよー 楽しいぞー」

「……わかつた」

「シャノン、紅音。あまつ遅くならなによつにな

「分かつてるよー。」

なんか、妹が一人増えた気分だ。

シャノンはチャーハンを平らげ、紅音に連れて行かれるのだった。

「シャノンを振り回すなよー！」

紅音は片手だけを挙げて、玄関をとててつ、と去つて行くのだった。

「疲れた……」

彼女たちを見送つたらどつと疲れが出てきた。少し畳寝でもするといじゆう。もうじて俺は、まどろみに、意識を、落とした。

……ピン、ローン……。

「ん……あ?」

気付けば空が赤く染まっていた。あの子たちはもう帰つてきているのだろうか。さつきのドアホンはシャノンだろうか。

「はいはい……今行きますよ……」

寝起きで働かない頭と体を起こし、玄関へ向かう。扉を開けると、

「よう、天真。なんだ？ その顔。寝てたのか」

「なんだサイカか……」

「なんだとはなんだ。それとも他に誰か来るのかよ？」

「ん……まあ、な」

なんでこういう時に限つてサイカが来て、凶星を突かれるのだろう。本当に厄日である。

「何か隠し事でもしているのか！？ いや、今の反応だと女の子に違いないいや絶対そうだ！ どんな美少女なんだ吐け！ 吐かなきや殴つてやる」

「やめんか！ 来るのは義理の妹だ！ お前には何も関係ないだろ

……」

シャノンの」とは伏せておく」とにした。バレたら何されるか分かつたものじやない。そして、拳をふるふる震わせるサイカ。そんなに体をわなわなさせる意味がわからない。

「義妹なんて……夢のシチュエーションを味わっているのか！

お前は！」

「お前……思考が残念だな。ゲームの中の女の子みたいに可愛くないぞ？ 犬みたいにすぐどつか行くわ、急に押しかけて飯をたかるわ。世話が焼けるだけだぞ」

「世話してえええええええ！ といつかお前の妹さんはとても可愛いくていい学校のウワサがある。会いたい。会わせて！ お願ひこの通り！」

「ドン！ とコンクリートの地面に地響きまでも立てるサイカのきれいな土下座。こんなことでそこまで土下座ができるなんて、なんて小さい人間なんだろう……」

「待つてれば来るから……こんな玄関先で土下座しないでくれ。変

な目で見られるから

「ありがとう！お前は親友だ！」

サイカは顔を輝かせ、俺の手を取つてくる。なんか目から涙が溢れようとしている。そこまで嬉しいのか。

（紅音は有名人なのか……？ 学年が別だと分かんな）

「それにも遅いな、紅音のやつ……。ちょっと見てくる」

「俺も行つて良いか？」

「別に良いけど。妹見てもあんまはしゃぐなよ」

「おう」

どこに行つたのだろう。中華街にでも行つたのか、あるいは海のほうに行つたのか。紅音が行きそうなところなんて無数にあるわけ

で、わかるわけもないのだ。

「あ、ケータイがあるじゃん」

そう言つたのはサイカだつた。俺は多少なりとも冷静さを失つていたようだ。文明の利器、ケータイ。是非、『ご利用させてもらおう

じや

『電源切れです充電してください』

俺のケータイの液晶画面に映つた無慈悲なる通告。

「おいおい……。俺は不幸体質なんて持つてないんだから……」

これで通信手段はなくなつた。俺は妹のケータイの番号まで覚えてるほど記憶力も良くないし、シスコンではないからサイカにケータイを借りて居場所を聞くこともできない。

「サイカ。見つけるまで少し時間がかかると思うんだが良いか？」

「もちろん！ 美少女と会つためならたとえ火の中水の中」

「アホだ……」

しようがない。街を一通り歩いて見つけられなかつたら寮に戻ろう。いや、もう彼女たちは寮に帰つているかもしれない。

（なんだかんだで俺も過保護なのかな……。直したほうが良いな）

「とにかくだ。探すぞ。シャノンを迷子にさせたら大目玉喰らつちまう……」

「え？ シャノンって言ったか？ いまいち聞こえなかつた」「いや、聞こえなくて良い！ こっちの話だから！」

「ふーん……怪しいなあ」

サイカがこちらをジト目で見てくるので、この話はさっさと切り上げたほうが良さそうだ。

「つるせえ。さっさと行くぞ」

まずは最寄りの駅に行って、その後はデパート周辺で探すとしょう。

特にサイカと田舎しい会話もなく、駅に着いた。周りを見回しても紅音らしき人物は見当たらない。

「ん？ あれリリスじゃないか」

「……？」

俺たちの目の前にいつの間にかリリスが立っていた。気配を消す、とはこのよつなことなのだろうか。

「……わたしの顔に何かついてますか？」

「いや、何も」

「……そちらの金髪でアホ面をしている人は？」

サイカのほうを指さして言った。容赦のない女の子である。天才は思ったことを口に出してしまうのか。

「サイカ＝リンクス。よろしくな、リリス＝フォースン」

糾弾されても、爽やかな顔で言った。人格の変わりようが恐ろしい。女の子を前にすると彼はここまで豹変するのか、と思い知られた。

「……なぜ、わたしの名前を知っているんですか？ ストーカーさん？ それとも変態さん？」

「ああそうだ。こいつは変態さんだ」

「ち、違う！ 僕は変態さんじゃないぜ。あはははは……」

「それよりリリス。俺の妹見なかつたか？ お前、紅音のクラスメイトだろ。顔くらいは知ってるよな」

「……はい。でも見てません。あなたの紅音さんは迷子なんですか

？ それとも家出？

「あなたの、は余計だ。どっちかっていうと迷子に近い、かな……」

「……見つけたら連絡します」

「そうしてくれると助かる。じゃあな」

次は『テパート探しに行くか。

「ほら、サイカ行くぞ。シャノ じゃなくて妹に会いたいんだろ

？ とつとと来い」

「分かつたよ……」

サイカが珍しく、やけに静かだ。

「どうしたんだよ。さっきかららしくないぞ。リリスに惚れたのか

？ あいつは奇人だからな、よしておいたほうがいいぞ」

「なんで……なんでお前はそんなに美少女を呼びめるんだああああああ！」

「そんなことかよ！」

「お前は主人公体質か！ ええ！？」

「そんな体質は持つてないし、持とうと思ったこともないつ。俺は普通で平和な毎日が続けばそれで良いんだ。いくら変わり映えがなぐてもな」

とは言つたもののこれから俺の学生生活に何らかの変化があることは間違いないだろ？ なぜなら、シャノンが同居人になつたからだ。平穀な毎日を願う俺とは裏腹に、シャノンとの生活に期待をしている俺がいた。

「くそう……。俺もお前みたいな美少女引きつけ体質を持つてからカツ『いいセリフを吐きたいもんだぜ』

「お前はまず言動から変える。黙つてれば一匹や二匹……じゃなかつた。女の子の一人や一人すぐに引き付けるだひ」

「最初の一匹二匹の考え方おかしいよね……？」

「気にするな」

俺はサイカを置き去りにし、とつとと歩く。駅から『テパートはさほど離れていないので歩いて行ける。

「どうか天真、いつもこんな妹さん捜索してるので？ それとも今日は何か大事な用事があつたり？」

「い、いや。そんなことないさあははは

いけない。サイカにシャノンのことを勘付かれるといこつをなだめるのに面倒だ。

「これといった用事はないんだけど……。なんか……アレだ、アレ。

そう、気分だ気分」

「俺になんか隠し事してる？ 顔にしきりてあるぞ」

「いや別に……何も……」

デパートの広場の近くらしく、少しうるさくなってきた。

「ま、別に深くは追求しないけども、可愛い女の子が知り合いにいたら紹介するよ。美少女であれば、なんでもオーケー」

「お前は一生画面にハアハアしてろ」

「グ、グサリ……お前は俺の親友だと！ 一緒に寝食をともにした仲じやないか！ どうして裏切るんだああああああ！」

「抱きつくな！ 離れろ！」

そういうえば、一年生のときのルームメイトはここにいた。でも、二年生になつたら家の事情やら何やらで自宅通学になつたのだった。すっかり忘れていた。

ただ、なぜか近くを通つた若い女子グループが「キャー」と黄色い声をあげているのは何故だろう。近くに有名人でもいるのか。そのグループ、少し離れたところで止まってこっちを見てるんですけど……。俺は彼女たちに何もしてないはずだ。

「天真のリア充！ ヒモ男になつてしまえ！」

「はいはい、そうですね。そんなこと言つんだつたらここでお別れしてしまいましょうかね

「すみませんでした！ 美少女に会わせてください！」

「既に美少女と決定してるので？ とかお前のプライドつて低いな……一度ならず一度までも土下座するなんて。大したやつだ

サイカのプライドはさぞのくらくなのだなつ。気にならぬといひで
る。

「そんな公衆の面前で何やつてるの？ 漫才？」

俺の背後で凜の声がしたので、振り返ると、やつぱり凜がいた。

「凜、何してんだこんな所で。買い物の帰りか？ それとも行く途
中か？」

「う、うん……。まあね……。といひでその土下座してゐる人は、サ
イカ君？ 何があつたの？」

サイカは物理学的にありえないスピードで土下座の状態から氣を
つけの状態になり、

「天音さん。朝も夕方も変わらぬすばらしいお姿に俺は見惚れてしま
ります！ それに幼馴染にその世話を焼く点！ 素晴らしいです
っ！」

「え、ええ……あ、ありがと、気持ちだけ受け取つておくれ。サ
イカ君……」

引きついた笑みで返す凜。サイカにさえ笑顔を振りまくとは、変
なところで律儀な人間である。凜はサイカのことは嫌いではないら
しいが、苦手だそうだ、

俺と凜とサイカはクラスメイトなのだ。おそらく凜がナンパを回
避するための術を身につけたのはサイカをほほ毎日あしらつていた
ためだらう。

「そういうば、凜。紅音見なかつたか？ 見たら教えて欲しいんだ
が……」

俺と凜が幼馴染であると同時に、紅音も凜とは幼馴染である。昔
は三人でよく遊んだものだ。

「見かけたわよ。港のほうに向かつていたけど……でもどうしたの
？ 迷子なの？」

「それでは、次は港のほうを探して見るとしよう。まだそこにいる
かもしねない。」

「いや、そういうわけでもないんだが……。サイカ、凜が困つてゐ
る」

ぞ。どうにかしてやれ」

俺は少し面白くなりそうだったため、煽りを入れる。その瞬間、凜から、殺氣が出て、が口だけで、

『コロス』

と言つてゐるのは氣のせいに違ひないだろ？ そうに決まつているんだ。

「わ、わたしあ夕飯の手伝いしなきゃいけないから帰るね！ それじゃあ！」

「天音さん、また明日」

サイカも変なところで律儀である。

「サイカ、いつも思つんだけど、なんで引き留めたりしないの？ 変だぜ」

「しつこい人は嫌いだろ？ それを順守してただけ。それこそリア充への道であり、ハーレムエンドへの道！」

「最後の一言が無ければカツコいいんだけどな……」

やはり、ダメ人はダメってことだ。

「よし、次は港だ。女に釣られてどつか行くなよ。お前まで迷子になつたら困つちまうから」

「お前は保護者か！ 世話焼き天真クン。天音さんの影響なのか、その世話焼きっぷりは」

「俺は世話焼きなんかじゃねえよ」

会話をしながら、港のほうへ向かつて進む。心なしか、塩つ氣のある涼しい風が吹いてきた。

「誰がどう見たつて世話焼きにしか見えないな。最初はなんだかんだ言いながら面倒臭そうにするけど、最後にはやつてるんだよ、お前は」

「うぐ……そつかもしない」

思い返してみるとそうだ。今日の朝のリリスの時だつて、シャノンの時だつて、今の紅音だつて、結局はやることになつてゐるのだ。不思議なものだ。世話焼き、という意識は無いのだが。

「ていうかよくそこまで俺を観察してたな。お前、意外と鋭かつたり?」

「いや。そんなことはない。見てれば誰でも分かるぜ」

「そうか」

だいぶ陽も暮れてきた。少し急いで港まで行かないと夕飯に間に合わない。

「おお……。綺麗だ」

港まで来ると、まさに映画でも見てるかのような景色が目に入つた。目に映る景色はすべてが美しいオレンジ色。夕焼けの太陽が海の水面に照り返され、太陽が二つあるように思わせる幻想的な景色。最近は海の汚染も始まつてはいるが、それを一瞬でも忘れさせてくれるような景色だつた。

「あれ……。あいつ……」

俺の少し先にシャノンが立つていた。彼女の横に立つ。

彼女は美しい景色を見ているのではなかつた。その碧眼はどこを見ているのだろうか分からぬのだ。夕陽を日にするその宝石のような目には一体何が映つてゐるのだろうか。ちょっと、気になつた。サイカのことは気にせず彼女に、

「シャノン。こんなところで何してるんだ? 紅音はどうした? あいつお前をほつたらかしにしてどつか行つたのか」

「ううん……。違う。ここで考え方してた。アカネとはここで別れた」

「へえ……。紅音とは楽しかつたか?」

「うん。この町のことよく教えてくれた。テンシンのことも教えてくれた」

「あいつ、お前に余計なこと吹き込んでないだらうな」

「わからない」

「だよな」

どこか、悲しげで、儂くて、すぐにどこかに消えてしまつそうな。

そんな印象をシャノンの表情から抱いた。

「じゃ、帰るつぜ。陽が暮れちまうからな」

「わかつた」

「どうか俺はなんでこんなに親しげに話してるのだろうか。まだ会つて一日も経つていないとこ。これが、世話焼きと呼ばれる原因なのかもしねえ。」

「おい、天真。なんだそのちつこ可愛い子は？　しかも今帰るつて言つた……？」

やはりこの男、首を突っ込んだきたか。学校でウワサになるのもイヤなので、

「あ、あんなどこに紅音　俺の妹が」

「どこだつ！？」

反応が速すぎる。

「あつちにいるな

あさつての方向を示す俺にサイカは何の疑問も持たず、

「待つててください！　今行きます！」

ぶおおおおお、という人間なら本来立てるこの無いであろう効果音と、ドップラー効果によるサイカの叫びがだんだん低くなつていぐのを背に俺たちは帰路に着いた。

「買い物して帰るか……。シャノンはついてくるか？　それとも寮に戻る？」

「買い物する」

「そうか」

寮の近くのスーパーで買い物を済ませる。シャノンはスーパーの中をきょろきょろしながら興味津々に見ていた。

「なあ、シャノン。買い物来るのって初めてなのか？」

「うん」

少々鋭い目つきをしながら言つ。俺はそんなシャノンの身体を上

から下へと見て、

「少し失礼かもしないけど、シャノンって、中学生？ 小学生？」

「女性に年齢を聞く男はダメな証拠をさらけ出している。そして、年齢を聞かれたらは怒つていいとイサオが言つていた」

「じふつ……！」

シャノンの頭突きが俺の鳩尾に炸裂した。俺はその場であまりの衝撃にうずくまつて悶絶する。そんな小さな身体のどこにこんな力が秘められているのかは謎だ。

「あたしはアカネと同じ年齢」

師匠も変なことを吹き込むものだ。それに紅音とさつきまで一緒に色々なことを話していくらしいので、余計な知識がシャノンの頭の中に入つてしまつたことだらう。まともな教育をするのは大変なのだなど認識させられる。

「え……。ウソだろ……」

紅音よりも身長の低いシャノンが俺の一つ下の年齢。本当にお人形さんみみたいに小さくて、身体つきもさほどグラマラスではないというのに。

俺はようよると立ち上がり、

「わ、悪かったよ……。いきなり歳なんか聞いたりして『じめん……』で、でも今度からは力加減を覚えてくれないか……」

「善処するわ」

この前思つたことを撤回するishyuu。やっぱり、こんな妹はない。危険である。

ただ、シャノンの表情がとても怒つているようには見えなくて、少しだけ違和感を感じた。

「シャノン、ここに来たばつかなんだからそんなに一人で勝手に歩くなよ。迷子になつてもらつちや困るからな」

「むむむ……。分かつた」

少しだけシャノンの表情に変化が出た気がした。困ったような顔

をして言つたのだから。そして、彼女は商品を買い物かごに入れていく俺の横に並び、

「やういえは、テンシン。さつきアカネから聞いたんだけど、テンシンは『お兄ちゃん』と呼ばれるのが好きなの？」

「ふえつ！？ そんなことないさ……あはははははは」

何か口に飲み物を含んでいたら確実にマンガのよつに液体を盛大に噴き出していたであらう。雑念はついたわき消したばかりのはずなのに……！

「気になつただけだから違うなら別にいい」

「あ、そ……」

とんでもないことを言つやつだ。今の発言からしてサイカが好きそうな方面の知識は無さそうだ。

買い物を済ませ、寮へと戻つた。いつもなら味氣ない空間なのが、シャノンがいることで変わつたような気がする、のだが、

「お前は……」

俺は部屋に入るや否や、忌々しげに呴いた。今のはシャノンに対する呴きではない。

「……何か問題でも？」

「……常識知らずの天才黒髪少女に向けて言つたのだ。今日だけで俺の前に三回姿を現してくる。じつにじつとしてこりとこりは無理な注文なのだろうか。

「で、お前は何をしに来たんだ……。まさか朝と同じ、飯を食わせろとか言つんじゃないよな？」

「……話が早くて助かります」

「俺の食費が……。シャノンの分で大変になるつて言つのに……」

シャノンは何が起きたか分かつていらす、俺の横で頭の上にマスクを浮かべている。すると、リリスは、

「……いくら？」

「え？」

「……だから食費はいくら払えればいいんですか？ おにい」

「分かつた！ 飯は食わせてやるから、その先はストップ！」

人の趣味を勝手にばらされてもらつては困るのだ。これからのためにも、シャノンには極力この方面的知識を与えないように注意しないといけない。

「……じゃあ、口止め料に一つ提案があります」

「なんだ？」

他人なら知らないはずであろう、

「あなたの目を研究させてください」

俺は別にリリスの前で義眼の力を使つたりはしていないはずだ。なのに彼女どうして知つてているのだ、という疑問が焦りよりも先に浮かんでくる。俺の心情を分かつたように彼女は、

「あなたの眼球運動に少しだけ違和感がありました。そこから推測すると、義眼であるという事が分かります。……でもその義眼はプラスチックでもガラスでもないから興味が湧いたんです。それに両目とも機能しているようですし」

この推測力と思考力には恐れ入るものだ。さすが天才と呼ばれるだけの所以である。

「け、研究つて、一体何をするおつもりなのでしょうか……」

リリスは俺の一つ下の学年だが、敬語になつた。俺が想像するリリスの本性は、手術台にくくりつけられて動けない俺を目の前にしてメスか何かの刃物を持ち、にやにやしながら俺の目に切り込みを入れる、そんなイメージだ。

「ただし見せて欲しいだけですよ。そのうちかいぞ レポートでも書きます」

「言いかけた言葉がとても恐ろしかったのですがそれは無視して丈夫なのか！？」

リリスの言葉の先が俺の予想しているものではないことを切に願おう。

「大丈夫……なはずです」

「自信無さ氣に言つのをやめてください……。はあ……」

俺は疲労を吐き出したいという願いから大きくため息をつく。

「分かつた。俺の目は今度見せてやる。機会があればな、だから今は飯ができるまでシャノンの相手をしていてくれないか？」

シャノンだつて今日からここに住むのだから知り合いを作つておいても損は無いだろう。リリスは不思議な人間だが、同じ年で女子同士なのだから話は弾むであろう。

俺は渴いた喉を潤すために、冷蔵庫からペットボトルの水を取り出して飲んでいると、

「……この子は誰ですか？　あなたの子ども？　相手は幼馴染の天音先輩ですか？」

「ブブブツ！？」

今度こそ盛大に吹いてしまつた。気管に飲んだ水が少し入り、咳き込んでしまう。

「テンシン、大丈夫？」

「……黒木さん、大丈夫ですか？」

「けほつ、けほつ……。リリス、お前はいきなりなんてことを言つんだ……」

「いえ、思つたことを口にしただけですが」「じゃあ今度から考えてから発言しような」

俺はリリスのお世話係か。シャノンとリリス二人合わせて何が悪いのか分からず、頭の上に？マークを浮かべている。

「もう大丈夫だ……。あつちに行つてて休んでていいぜ。あ、手伝いとかいらないからな」

「分かつた」

「……了解」

本当に厄日というか疲れる日というか……イヤになつてしまつた。こんなときは料理作つて、気を紛らわそつ。

「今日はハンバーグだ」

「はんぱーぐ？」

向こうにいたシャノンが聞いてくる。

「なんだ、お前ハンバーグ食つたことないのか」

「くぐりと頷く。俺は彼女がまともな食生活を送つてているのか気になつた。師匠は一体何を食べさせていたのだろうか……。

「うーん……上手く説明できなきけど、まあ食べてみれば分かる」「そりなんだ。じゃ、待ってるね」

期待には答へなけりゃいけない。肉はお金の問題でどうすることもできない。ならば、ソースで勝負するしかない。材料には、赤ワインと、ケチャップをハンバーグを焼いた後のフライパンに入れて作る。

なぜ学生寮なのに赤ワインがあるのかは聞かないで欲しい。そうぞ、料理のためだ。そういうことにしよう。

まもなくして、

「できた……」

付けあわせを作るのに少し手間取つてしまつたから、時間がかかつた。

「……わたしは空腹なので……いただきます」

「早つ！ いつの間に座つたんだ！？ それに勝手に食べるな。みんなで食べたほうが美味しいだろ」

「……あなたの言う事にも一理ありますね。わかりました」

「シャノン、早く食べよづぜ。冷めると飯が不味くなる」

「これがハンバーグ……」

皿を輝かせながら、感嘆の声をあげるシャノン。本当にはじめて見たようだ。

「それじゃ、いただきます」

「い、いただきます」

「……いただきます」

三人で食べ始める。これが普通の女の子一人に挟まれて食べていたらもう昇天できるものの、天才奇人に詳細不明の少女なのでそん

なに嬉しくはないが、

（なんか……少し変わつてて楽しいな……）

今までは一人だった空間が人が増えただけで、これだけ変わるものかと実感させられた。

「どうだ、シャノン、リリス。うまいか？ 口に合つてれば嬉しいんだけど……」

シャノンは俺の言葉を無視して、フォークを不器用に扱つてハンバーグにかぶりついている。あとでちゃんととした食べ方を教えないといけないな。

「……おいしいです。黒木さんの料理は意外にもおいしいです」

「意外にもつていうワードが気になつたけど、まあ喜んでくれればそれで良いや……おい、リリス。口にソースがついてるぞ」

ティッシュでリリスの口についたソースを拭いてやると、彼女の頬が赤くなつた。どうしてだ。俺は怒らせるようなことはしてないはずなのだが……。

「リリス、俺なんか悪いことしたか？ したなら謝るんだけど……」

「……もういいですっ」

ふいつと横を向くリリス。乙女心は複雑なんだよ、と凜が昔言つてたのだが、そのようだ。リリスが怒つた理由が分からぬ。

「おい、シャノン。お前食い方が違うぞ。こつ食べるんだ」

「イヤだ。あたしはこれで食べるのっ！」

「ダメだ。これから一緒に暮らすんだからちゃんと食事のマナーは覚えないとダメだぞ」

「イヤだつたらイヤだ！」

誰に似たんだこの強情さは。おそらく師匠だろ。師匠はクールに見えても案外強情だつたりするのだ。師匠と一緒にいることでの強情さが伝染してしまつたようだ。

「ダメだつたらダメだ！ くそつ、俺が直々に教えてやる」

フォークを左手で持たせ、ナイフを右手に持たせる。じかに彼女の肌に触ると、とてもすべすべしていて、手は小さい。こつして手

を握っているとやはり女の子なのだ、と意識してしまつ。

「これで、良い。次からはこうやって食べるんだぞ、分かったか？」

「うん」

シャノンはしきりにナイフばかりを見つめていた。ナイフも初めて見るのだろうか。それともただ食用ナイフに興味があるからなのかは分からなかつた。

「どうした、シャノン？ なんかボーッとしてるぞ」

「ううん、何でもない」

順調に食べ進めるシャノン。飲み込みが速くて助かる。

「……黒木さん、あなたの鼻の下が少し伸びてゐるようを感じるのはわたしの気のせいですか？」

「そ、そんなことないぞ！」

「……それに一緒に暮らすといつのばどうにづくことですか？」 天音先輩が怒りますよ？ 不倫ですか？」

「どれも違う！ お前、凜とはただの幼馴染みなんだ、勘違いするなよ……」

「……あなたはある意味においてとてもすこい感性の持ち主ですよ」「よく分からんが……。シャノンは事情があつて預かつてただけだ」なんかすごいジト目で見られてるが気にしないでおこい。後輩にこんな目をされる先輩というのもおかしな光景である。

「……ごちそうさまでした。わたしはではこれにて。それと黒木さん……襲つてはいけませんよ？」

「信用ないッスね、俺！ 襲うワケないだろうが！」

「……まあ良いです。それではさよなら」

「ああ……。またな、リリス」

彼女はそう言つと気配を消したのだった。気が付くとシャノンが後ろに立つていた。

「ねえ、テンシン。あの人との会話で一体何を話していたの？ 分からなかつたんだけど、襲つてどういうこと？」

「い、いいや！ 知らなくていい、知らないならいいんだ！」

「ふうん……」

そんな純粋な少女を不純な知識から「こまかすために俺は台所へ向かい、洗い物をはじめるのだった。これから大変なことになりそうだ。

「ふう……。つてあれ？」

いつの間にかシャノンはソファで規則正しい寝息を立てていた。うずくまるように横になつていて、ソファの半分も占めていない。とても小さくて、不思議な雰囲気を持つシャノン。

「まったく……。しようがないやつだな」

彼女をこうして見ていると自然と笑みがこぼれてしまつ。俺は彼女に布団をかけてやり、眠らせておくことにした。

「そういえば……シャノンの着替えってどうじよつ……」

男が女性の下着を買いに行くという絶対にレジで気まずくなつてしまつような選択肢はできるだけ避けたい。否、避けなければいけない。となると、どうしたものか、と思案していると、ドン！と玄関のほうで大きな物音がした。

「なんだ……？」

扉を開けると、ピンク色の可愛らしいスーツケースが俺の玄関の前に置かれていた。

『雨宮 功 より』

スーツケースにはそう書かれていた。おそらくシャノンの着替えやら何やらが入つているのだろう。見透かしたかのようなタイミングで置いてってくれる人だ。

「問題は解決、と」

スーツを部屋の中に入れ、俺は一安心すると、一日の田課になつていることをするためにもう一度外に出る。

「すう……。はあ……」

まず、大きく深呼吸。目を瞑り、右目に意識を集中させる。見ることだけを。全てのものを捉えるかのようなイメージ。そうして、再び、目をゆっくりと開く。

「ん……」

ひとまず成功したようだ。義眼を動体視力を上げるモードにするためには意識しなければできない。それはとても難しいことなのだ。つけてから半年はこのモードに移行できなかつた。故に、毎日一回、こうしてモードを切り替える練習をしているのだ。

「少し、試してみるか……」

ナノマシンは眼球運動を増幅、拡張させるものだ。視力とて例外ではないというのが俺の推理である。そして、俺が実践しようとしているのは視力の強化だ。現状では最高で3・0まで上がる。

目を瞑る。意識を集中ではなく、拡大する。そしてイメージするのは望遠鏡。どこまでもどこまでも見えるような一枚のレンズを頭の中で作り上げる。そのレンズは俺の義眼。

「くつ……」

再び目を開ける。あまり進歩はしてないようだつた。

「はあ……。しょうがないか。今度この理論が正しいかどうか師匠に聞かなきやな……」

俺は少し鬱になる。そんな時に、向こうのビルから俺の頭に亞音速で向かってくる物体

(銃弾!?)

動体視力は上がつても運動能力が上がつたわけではないので、全力で伏せる。すると、さつきまで俺の頭があつた場所に銃弾が通り過ぎていつた。動体視力を上げていなかつたらまず死んでいただろう。

「はあ、はあ……。なんだつていうんだ……！」

壁には銃弾がめり込んでいた。あれを頭に受けたら、ここで俺は血と脳みそをぶちまけて倒れているところだつた。でもなんで俺が殺されかけなきやいけないんだ。漫画の世界ではないのだし、日本

でライフルの一つや一つをぶつ放したらそこへすぐで警察が来ておかしくはない。

俺はそう思つて、部屋に戻ろうとしたが、足がすくんでしばらくは動けそうになかった。今日はいろんな意味で疲れなさそうだ。

ボーイミーツガール(ズ)

チユン……チユン……。

「あ……「つ……」

スズメの声で起きられるなんてなんと清々しいことだらうか。いや、実際寝たのは一時間前だが。睡眠時間一時間のせいで思考がかしくなっているのかもしれないな。とにかく布団から脱出して、朝飯を作らないと。

寝られなかつた理由は二つ。第一にシャノンが同じ部屋にいること。相手は女の子なので、思春期真っ盛りの男が意識してしまうのもしょうがないことだ。第二に昨日の夜のこと。いきなり、銃で狙撃されて安心して眠れるわけもないからだ。

昨日は限界時間まで義眼の能力を使つていて、頭がズキズキと痛む。フィードバックは抑えられないものなのか。

「うう……。頭痛え……。シャノンはまだ起きてないか」

彼女は寝相が悪いようだが、ソファからずり落ちたりはしない。大の字になつて、顔が半分ずり落ちてるが、足をソファの背もたれ部分にかけて器用に落ちないようにしているのだが

(やべえ……。このままだと見える、な)

彼女の服装はワンピースなので、足を盛大に開くと見えてしまう。
(落ち着け俺……！ 昨日は何もなかつたじゃないか……。平常心だ平常心、諸行無常有為転変、羊がそこに約一匹ほど……。よし。落ち着いてきたな)

なんとか無防備なシャノンという難関をぐぐり抜け、台所へ移動する。今日の朝飯はハムの賞味期限が明日なのでサンドイッチにすることを決めた。

俺は朝の占いだけは欠かさず見ている。田曜日である「つ」とあのテレビの占いはやるのだ。占いを全て信じてるわけではないが、小さい頃によくそのコーナーを見ていたので習慣になってしまったのだ。

テレビをつけると女子アナウンサーの声がして、

『八位は、かに座のあなた！ 今日は新しい出会いがあるかも。でも周りに注意。ラッキーアイテムは巫女服、誰かに親切に接すると幸せな出来事が起ころるかも！』

昨日よりはマシな順位だ。昨日は本当に当たつてたからな。飯をたかられるわ、女の子を預かれと命令されるわ、銃弾でねらわれるわ、と本当に災厄が降りかかってきたのだから。でも、巫女服つて……。

「きやう……ん？」

今的小動物が発するような声はなんだ。びっくりして、包丁がずれそうになつたぢやないか。

「シャノン、起きたのか？ おはよつ。朝飯なうむすべができるが

「ふえ？」

寝ぼけてるような声。

「朝飯だ、朝飯。今日はハムサンドだからな。手抜きとか言わないでくれよ」

「あた……」

「そうだ、朝の八時だ。俺は今日寝不足だからあんま苦労かけさせるな……つてシャノン？ そつちには何もない」

「ドスン！ 僕の声も届かず、シャノンはそのまま壁に激突。寝ぼけてソファからそのまま前進したからだ。

「痛い……」

「おいおい、大丈夫か？ 怪我とかしてないか？ 痛みが引いたらすぐに言つんだぞ」

「……わかつた」

痛いからなのか、彼女は若干仏頂面である。朝は苦手なのだろうか。

「ああそうだ、シャノン。師匠からお前の荷物とかが届いたぞ。玄関先においてあるステッケースがそれだから、取つてきてくれないか？』

「あア？」

今の声の主はシャノン、なんだよな？ ものすゞし凄んだ声だつたが、大丈夫なのだろうか。

「シャノン、喉も打つたんじゃないのか？ 声がおかしいぞ」「ど】もおかしくなんてない。触らないで。痴れ者くせ者無礼者」

「…………シャノン？ すぐく怖いんですけど……大丈夫か？」

「一体なんだ……！？」この人格の変わりよつは… シャノンって多重人格者なのか！？ 僕がそう唖然していると、

「何よ、その文句がありそうな目は」

「い、いやいや、何でもないッス」

「そう」

彼女の周りに何とも言わせないオーラが漂つてゐる。まさか、シャノンは朝だから不機嫌なのか……。

「シャノン？ なんでそんなに不機嫌なんだ？」

「ん？ 昨日は様子見よ、様子見。でまあ、普通の人間だったから警戒する必要もないかな、と思つてね」

「こ、怖え……」

「イサオに言われたの。人間を判断しなさいって。だからそうしてみたの……というか荷物とつて来なきや」

「今、ハムサンドができるからもう少し待つてろ。師匠……シャノンにいつたい何を教えるつもりなんだ？」

すゞく謎である。本当にあの人の考えることはわからないのだ。考えながらも、今日の朝飯が出来た。休日はゆっくりできて実にいい。

「今日はこ】の後近くの交番にでも行くか……シャノンはど】つする？」

「その声はどこから出でているんだ。不思議すぎる声だ。

「…………一応ついて行く。それと今日の夕食はハンバーグが良い」

「そんなに気に入ったのかよ、ハンバーグ……今日は別のものだ」するとシャノンは、ムスッ。頬をリストのように膨らませてむくれ

ていた。実際に微笑ましい光景である。

「でもテンシンなぜ交番に行くの？ 落し物とかしたの？」

「ん？ えつと……」

昨日の夜のことをシャノンに聞かせて不安にさせでは彼女が安心して夜に眠れなくなってしまう。あの寝顔を壊すわけにはいかない。そう思い、

「ああ、落し物をしたんだ。昨日犬に取られちゃっても……まったくあの犬どこに行つたんだろうな」

「ふうん」

彼女はあまり興味がなさそうに聞き流した。俺が交番に行く理由は当然昨日の夜の件のことについてだ。

やはり、このままといつのも安心しきれず、結局聞きに行くことにしたのだ。

「食い終わつたし、さつさと行くが」

そう呟いて、俺は玄関を抜けた。

抜けた玄関先に銃弾がめり込んだ跡はあつたのだが、銃弾はどこにも、なかつた。

「え？ それは本ですか？」

「ええ、近頃そんな事件は起きていませんが……でもただこの頃行方不明の捜索届けが多いことはありますか……」

「分かりました……手間を取らせて申し訳ありません」

昨日の夜に発砲事件などがないか聞いてみたが、警笛にはない、と言われてしまった。

「一体どうなつてるんだ……」

行方不明事件か。シャノンがそういうことあわないようにしてやらないといけないな。

俺は交番から出て、外に待たせていたシャノンと帰るつもりだつ

たのだが、

「うおつ」

「きやつ……すいません」

人とぶつかつてしまつたらしい。しかも相手は女の子だ。顔から見て、歳は俺とさほど変わらないように見える。そして俺は違和感を感じた。

「あいたたた……」

「大丈夫？」

俺はその少女に手を差し伸べる。彼女の髪はストレートで毛先に少しパー、マがかかつている。そして彼女の服装が、巫女服だったのだ。占いのラッキーアイテムなのだが……なぜ巫女服を着ているんだ？

「あ、ありがとうございます……」

「どういたしまして」

その少女は何だかモジモジして、この場から離れようとしない。その空気に乗せられたかのように俺もその場から離れられなかつた。しかしながら、巫女服なんだ？ コスプレというやつか。サイカが見たら狂喜乱舞して踊り狂つてしまいそうなのが。

「あ！ そうだ！ そのお一人さん、一つお尋ねしたいことがあります」

「シャノン」と俺はそろつては首をかしげた。

「な、なんでしょうか？」

「ずい、と顔を近づけられる。香水をつけているのか、甘い香りがした。

「ここはどこ？」

「え？」

「いやー、新横浜に行こうとしたらいでここにも新横浜、つていう地名がなくて困つてたの。だからどうやつて行けばいいか教えてくれると嬉しいなあって」

巫女服で新横浜。一体何の用があるんだ。気になるが、触れない

でおいづ。

「えと、ここは横浜ですよ？ 新横浜はもつと遠く……」

「うんうんそうなのかー……つづええー？ ところどはわたし間違つてたのー？」

ノリツツ「ミが炸裂した。しかも手をばたつかせてあたふたしている。

「電車で行けば良いんじや……」

別に巫女服で電車に乗つても犯罪といつわけでも無いしそうだが。

「そうだ！ その手があつた！ ジャ、君ありがとうね！」

ジューーン、という効果音が出そうな走り方で俺の目の前から立ち去つていつた。嵐のような人だった。そういう点では師匠と似てるかもしねれない。

「ねえ、テンシン……今何？」

「俺にも分かんねえや」

シャノンはいぶかしげな表情で俺に聞くのだった。

「シャノン、どつか行きたい」というがあるなら連れて行つてやるけど……ってあれ？」

謎の女性が通り過ぎて行つたあと、俺たちは適当に街をぶらついていたわけなのだが、さつきまで横にいたはずのシャノンがいなくなつていて。

「うわあ……一日連続で迷子捜索かよ……せいでここに行つたのか」さほど遠くに入つていないはずだからすぐに見つけられるとと思うのだが、彼女はいくアテもなく歩いてそのままで探しにくい。さらに近所では行方不明事件が多いつて聞いてしまつたのですこし不安になる。俺がそう途方にくれていると、

「あー！ さつきの子だあ！」

「の声は……」

「あ、新横浜に行つとしてた……」

「ゴメン、名乗ってなかつたね。わたし、中松沙雪。なかまつ さゆき 職業は巫女で
えす」

今は着替えているようで、どこで着替えたんだという疑問は無視して、デニムに黒のジャケット、足の露出の多いファッショ。モodel勝りの足の長さだ。気になつたのは右肩に包帯らしき白い布が巻いてあつたことだ。包帯じゃなくてさらし巻きなのだろうか。

まあ、仕事を持つているということは少なくとも俺よりは年上なのか。と、いうか職業のことは最初から分かっている。

「は、はあ……。俺は黒木天真」

この人、見る限り最寄りの駅にたどり着けなかつたようだ。なぜならここは駅とは反対方向にある場所なのだから。

「そういえばさつさつきの横にいたお人形さんみたいな子、いたよ？」迷子なの？」

「え、どこですか？」

「こつちこつち。わたしの勤め先の神社の近くにいたの」こんな所に神社なんかあつたか？ 俺は覚えていないが、中松さんが言うにはあるのだろう。と、いうかここのこと知つてたんだな。「あ、シャノン……ツ！？」

鳥居にシャノンはもたれかかっているのだが、周りにいる人間がおかしい。黒ずくめのスーツにサングラス。夏にスーツを着ているという点とさらに身体つきがいいという点。そして、シャノンを囲むようにその黒ずくめたちが立つてているのだ。数は七人。

「中松さん、ここで待つててください。なんだか妙です」「え……う、うん」

目を瞑り、動体視力を十倍に上げる。黒ずくめに接触するのは危険だ。行方不明事件に関与しているのかも知れない。シャノンを連れてさつさと帰るほうが無難である。ついでに、

「シャノン」

「あ、テンシン。迷子にならないでよ……あたしが探しちゃつたじゃない」

シャノンの認識だと、自分は迷子になつていなければいい。

「さ、帰らうぜ。もうすぐ昼飯の時間だからな」

「うん」

周りの黒ずくめたちは……微動だにしていない。動体視力だけではなく、意識しないでも視力が上がるようだ。一人の黒ずくめが目だけでこちらを見ているのが分かつたのだから。

「じゃ、行くか」

シャノンの手を引いて、神社から立ち去つた。

「ねえ、テンシン……」

「ああ、分かつてる」

なぜシャノンが俺に聞いたのか理由はただ一つ。

「うーん……」

俺のとなりにいる中松さんである。

「あの……中松さん？」

「あー、中松さんなんて堅苦しげに呼び方じやなくて沙雪さんで良いよ、少年」

「えーと……沙雪さん？ 何で俺たちのあとをつけてくるんでしょうか？」

「だつて！ 君が電車に乗れば、新横浜に行けるつに行つたんじやない！ 結局駅なんてなかつたんだから、責任どつてよー！」

「ええええ……」

なんと理不尽な。まあそれはそうだろう。沙雪さんは駅と反対方向を歩いていたのだから、たどり着くはずもない。彼女はよくある方向音痴の持ち主なのだろうか。

「それにしても……その子、可愛いねえ……抱きしめて持つて帰りたくなつちゃう」

「うう……」

シャノンが怯えている。沙雪さんみたいな人は苦手なのだろうか。

「でも、黒木くん。駅はどっち？　わたし的にはあつちだと思つんだ！」

「どうか沙雪さん、あの神社の巫女さんなんですね？　だつたら道も」

「え！？　キミ、もしかしてオタク、つていう子？　巫女服なら今すぐ見せてあげるよ！」

「人の話を最後まで聞いてください」

「どうしてキミまでの人と同じこと言つかな……。わたし人の話はちゃんと聞くようにしてるよ……」

だとしたらこの人には常識というものを教えたほうが良さそうなのだが、手間は取りたくないのでもうさと駅の場所を教えようとし

て、「ここから真っすぐ行くと大きな通りに出ます。出たら右に道なりに進めば駅に着きます」

「はあい」

本当に分かつたのだろうか、と心配してしまつ。なんだか、……紅音の世話をしているみたいに思えてくるのだ。

「なんなら一緒に歩いて行きましょうか？」

「ありがと。じゃあ途中まで良いよ」

「分かりました」

結局、途中までついて行くこととなつた。

「ねえ、テンシン」

「なんだ？」

「テンシンて女たらし、という人種だつたりするの？」

「なんでそんなこと知つてるのかな……俺は女たらしといえるほどモテないし、妹系な女の子は寄り付いて来ないんだ」

「妹系……？　それでも、昨日から見て友達に女が多いような気がする。男で親しそうなのはあの金髪だけだつた」

つい口が滑つてしまつた。余談だが、中学生の時にも凜に同じことを言われたような気がする。『八方美人とはまさに天真のことよ

ね！ 女の子連れまわしてそんなに気持ちいいのかしら！ 少しは直したら？』と、罵倒を浴びせられた。

サイカはなんとなく気が合うから友達なわけなのだ。

「これもイサオが教えてくれた」

「師匠に今度会つたら、少し説教しておこう。シャノンに余計な知識を増やすのはやめろって」

「でもイサオは、これは一般常識だぞ、つて教えてくれたよ？」

「ぐぬぬぬ……つてあれ？ 沙雪さん？」

いない。ついさっきまで俺の横にいたのに。どうしてこう人がいなくなるんだ。

「天真？ 何してるの？」

「凛！ ちょうどいいところに… 『の子をしばらく見ていてくれ！」

すぐにでも探さないと、あの人すぐ駅から離れてしまいそうだつたので、走つて探す。明らかに怪しい建物と建物のあいだに小さな通りがあつたので、そこに入つたのだろう。

「ちよつ、天真！ 待つてよ！ つてもう行っちゃつたし……しょうがない、か」

「……？」

「『の子かしら……』

入つた裏通り文字通り太陽の当たつていない地球の裏側がごとく、太陽光が建物に隠れて薄暗くどこか不気味さを感じさせる空間だつた。

「ホントに沙雪さん、どこに行つたんだ……探すのは面倒だつていうのに」

さつきから走つてゐるが、こんなにこの建物つて長かつたのか？

裏通りってこと意外と短いイメージがあるんだが……

「あわわわわ……」

薄暗くてよく見えないが、あれはおやりく沙雪さんだらう。声と

雰囲気で彼女だと分かる。

「沙雪さん」

「つきやー!?」

「そんな子ザルみたいな声出せなこで下やこむ……離れたらダメで

しう、あなた方向音痴なんですから」

「ちひ、違うもん! わたし方向音痴じやないもん! 楽しそうだ
つたからここに入つただけだもん」

子供ですか、あなたは。まあ、無事に越したことはないのでもつ
さとこの人を連れ戻してシャノンと合流しなければいけないし、凜

に何を言われても大丈夫なように心の準備をしておかなければ。

「せつせと、行きましょつ。シャノンたちも待つてるんですから」

「黒木くん」

「はー?」

「手、つないで」

「別にいいんですけど……なんですか? 子供じゃあるまいし」

「理由なんかはどうでもいいでしょつ。あ、でも、暗い道が怖いわ
けなんてないんだよ?」

薄暗いから沙雪さんの表情はあまり見えないが、今の表情を見れ
たら良いな、と俺は反射的に思つてしまつたのである。

なんだかおかしくて自然に笑いがこみあげてきたので、少し笑つ
て俺はうなずいた。素直にそう言えぱいいものを、と女の子りしさ
を見せた沙雪さんへ心の中でぼやいた。

つないだ手の感触は懐かしさを感じさせ、柔らかい肌のすべすべ
した感触に俺は不覚にもドキッとしたのであった。
手をつないだまましばらく歩くともとの通りに出た。

「あーら? 天真。おかえりなさい」

「げつ、凜……」

「人を見た瞬間にげつ、つてどれだけ失礼なの！ 勝手にシャノンちゃんをわたしに押し付けて！ 拳句の果てには女の子と手つないで帰つてくる！」

「「」、これには深いワケがありましてですね……」

「問答無用言語道断！ シャノンちゃん、じつじつ男にだけはついて行つちゃダメよ？」

「分かつた。ありがと、リン」

凛とシャノンはすでに仲良くなつていたようだとしても良いことなのだが、田の前の凛をどうにかしないと俺の命までもが脅かされるハメになつてしまつ。

「いやあ……シャノンと仲が良さそりで何よつだ」

「ふん！ 天真なんかもつ知らない！ シャノンちゃん、行きましょ」

シャノンは凛に手なずけられたかのように彼女のあとをついて行つたのだった。なんともむなしい気持ちになる。俺の横には方向音痴のジッ子っぽい沙雪さんがいるだけだ。こつなつたら最後までついて行くことにしようか。

「あらら。フラれちやつたねえ……まあ、そんなこともあるよつ……」

青春なんてまだまだこれからさ、少年！」

「年上からの教訓、ありがたく頂戴します……」

「どうするの？ あの子たち追いかけて行つたまうがいいんじゃない？ わたしなら大丈夫！」

「あなたはあきらかに大丈夫じゃないです。まあ、シャノンの面倒は凜がしばらくは見てくれそうだし、沙雪さんについていきますよ」

「おおひー、さすが女たらしー。」

「違えよー。」

「」の人と会話すると疲れる。ある意味、リリスと共通する点があるようにも感じられる。

「えと、駅まででしたよね？ ジやあ、そこまで案内しますよ。沙雪さん、三歳児同然ですから、田が離せないんです」

「」

「わたしってそういう認識されてたの……？」

紅音が犬だとすれば、沙雪さんはさつき言つたように二歳児から幼稚園児のどれかではないだらうか。その時期の子どもはたいていどこかを駆けずり回つてゐるものだ。公園とかによくいる子どもたちの中に混じれそうな気がする。

「「」ひちですよ」

両手を横に広げて、とてててと近づいてくる。

「ちょっと唐突なこと聞くけどいいかな?」

「なんですか?」

「雨宮功博士って知つてる? 知つてる人は知つてるんだけど……

知つてたら教えて欲しいな」

「師匠? 沙雪さん、師匠のこと知つてるんですか……あの人一体何してるんだ……」

「知らないんなら良いの。わたしと雨宮博士は私が学生時代のときに一時期、一緒に研究をしたことがあるの。人間について、ね」そこで彼女は俺に始めて不敵な微笑を向けた。

「難しいことはよく分からんだけど……師匠ってす」「」ひんですか? 俺、あの人のことあんまり知らなくて」

「そうよねー。雨宮博士ってばいつもはぐらかしてばかりなんだもん! そんなとこ無きゃカッコいい人なんだけどね、それに頭の中で何考えてるか分からんだけもん」

彼女との意外な共通点が見つかった。師匠の知り合いだとは、巫女さんでも学生時代はそんなこともしていたのか。

「そりいえば、巫女さんの仕事してるだけで食つていけるもんなんですか?」

「そんなんわけないよ。アルバイトしてるね。占い師とか、コンビ二だつたりするな。でも一番きついのは占い師だね、朝早すぎだか

ら

俺にはただ一つ、もしかして、という疑問と期待が浮かんだ。

「もしかして、朝八時くらいにやつてる星座占いって……」

「あ、それたぶんわたしのだ」

「うわあ……」

なんかすごく妙な縁だ。それにしても、巫女さんって占いもできるのか。万能だな。俺の知識だと巫女はお祓い棒みたいなものを持って舞踊するだけかと思っていたのだ。

そうこうしているうちに駅の前に着いた。ここまで来れば大丈夫だろ？

「じゃあ、俺はこれで」

「うん、ありがとうね！ 黒木くんつ、まだどこかで！」

そう言い残して彼女はまた嵐のよつに去つて行ったのだ。

台風一過。嵐が過ぎればしばらくは晴れといつも幸運が続くものだと俺は今このときまで勘違いしていた。沙雪さんという嵐の後はさらに別の嵐が俺に舞い降りたのだ。俺は今寮の自分の部屋に帰つているのだが、背筋をぴんと立てて正座中なのである。

「天真？ 聞いてる！？」 聞いてなかつたでしょ？

「そ、そんなことないですよ！ 聞いてました！」

シャノンが日本茶をすすつて横で俺は説教といつも言葉の嵐を凜にぶつけられていた。

「ウソね。顔にそう書いてあるもの。昔からそうだったわよね！ 他の女の子の話は聞いてもわたしの話は聞かなかつたことだつたあらし！」

「俺は聖徳太子じゃないんだ……限度があるだろ？」

「そのときの状況説明をしたほうが良いかしら？」

怪しげな笑み。そこには俺に対する憎悪の念がこめられてくるような気がした。

「いえ、遠慮します」

「どうか、一日連続で押し付けしてゐるじゃない！ 昨日はサイカくんを押し付けようとしたし！」

あれは面白半分だつたな。なんか俺、糾弾されすぎなよつた気がする。

「でも、凜。いつそのこと俺のことをそんなに気にかけなくて良いんじゃないのか？」無視しろ、ってことじゃなくてさ」

そう言つたあと凜は癖の手いじりをおどおどした様子で始めた。俺が未だに分かっていないのがこの癖が発動するタイミングだ。「で、でも、そういうわけには、いかないし？ ほら、やつぱり天真つてさ、放つておくと、その、色々と……」

「お前は世話焼き女房かつてんだ」

「によ、女房つ！？」

彼女は瞬間で顔を真つ赤にし、とつさに掴んだイスがへこんだ。これ、ある一種の芸じゃないか？ 並みのバーべル上げの選手よりは力があると思われる。

「リン、顔が赤いよ？ 日本茶が熱かつたの？」

「そ、そういうわけじゃないの！ オホホホホ」

「その笑顔、なんだかとても不自然で逆に怖いんだがな……」

「リンの顔が赤い理由が分からぬの。テンシン、教えて」

「いや、俺も分からぬ。なあ凜、なんでそんなに顔赤いんだ？ お前まさか熱でもあるんじや……」

凜のおでこに手をつけると至つて普通の体温だ。熱は無いらしいが……。

「……！」

「どうしたんだ凜？ さつきから大人しいけど……」

「あわわわ！ な、なんでもないつ！ は、話が逸れてるじゃない！」

！」

ぽかぽか、という効果音が一番しつくり来るような強さで俺の胸を殴りつけてくる凜。どうしたんだ、凜はたしか結構な怪力だつたのはずなのにどうしてこんな弱体化しているんだ？ 弱体化させる方法があるなら教えて欲しいものだ。

「このつ、バカ」

女の子最大の武器、上田遣い。不覚にも俺の心臓がドクン、と大きく波打ってしまった。

「ま、まあ、そのなんだ……もつ説教はこれくらいで良いだろ？ 凜の休みをこれ以上つぶすのも気が引けるというかなんといつか……」

「そうねっ、しょうがないわね。あ、でも帰る前にシャノンちゃんに渡したいものがあるんだけど……天真は出でてくれない？」

シャノンと凛は意気投合しているようだし、ガールズトークみたいな時間を取らせてやつたほうが良いだろ？ シャノンに少しでも早くここに慣れてもらうことにもなる。

「まあ、良いけどさ。俺が戻つてくるまでは家にいてくれないか？ 俺、少し買い物あるし」

「オッケー。じゃ行つてらっしゃい」

凛がシャノンに秘密で渡したいものって何なのだろうと密かに考えながら俺は外へと出た。

俺はスーパーのある駅周辺とは反対方向へと足を向けた。買い物、といふのはウソで、俺の本当の目的はもう一度あの神社に行くことだつた。

目的はあそこに常時黒ずくめのスーツの人間がいるのかどうかを確かめるためだ。あの光景は奇妙だつた。まるでシャノンを監視しているように見えて、それを払拭したかつたのだ。

「やつぱりいないか……」

神社の周りをざつと見ても黒ずくめのスーツの人間など一人もいなかつた。この見解は俺の自意識過剰か？ たまたま黒いスーツの人が休んでいたからかもしれない。銃弾なんかが飛んできたから少しおかしくなつていたのだろう。

俺は目頭を押さえる。

「帰るか……」

帰り道、リリスと会つた。実験合図をせられた。
唐突だが、事実である。こんな感じの会話だつた。

「あ、黒木さん。ちょいどいい所に」

「ん？ リリスか」

「これを受け取つてください」

この言葉は別のシチュエーションで言われたいたいものだな、と思いつつリリスに渡された箱を受け取る。

「開けていいのか？」

「どうぞ」

中から出てきたのは革製のよつた黒い手袋だった。

「これは？」

「試作品の筋力増大装置です。手にはめなくてもいいですからとにかく常に身に着けてください。あなたは実験どうぶ……いえ、実験台なんですから」

そう告げると俺の目の前からいつの間にか消えていた。

といつことなのだ。説明不足ではないかと言われるかもしぬないが事実なのだからしようがない。これ以上でもこれ以下でもないのだ。天才奇人には困まらされるばかりである。

ひとまずこの正体不明の黒手袋をポケットの中にねじ込み、寮へと帰つてゐるわけなのだ。それにしても俺つてよく試作品を掴まされるな……試作品ロボットとでも思われてゐるのだろうか。

「なあ、そこの兄ちゃん」

ふと横から声をかけられた。声の主はスキンヘッドで、少し浅黒い肌に師匠以上の身体つきの まあ一言で言つてしまつて「ロッシ」男だつた。

彼からは強者のオーラが出てゐるよつた感じがする。俺はその雰囲気に押されながらも答える。

「な、なんですか？」

「ちょっとこっち来てくんねえ？ 聞きてえことがあんだよ」
来なかつたら脅されると思ったので、彼の言つことに一応従つた。
体勢を作つていない状態で殴り合ひをするには分が悪いからだ。彼
に案内されるたのは沙雪さんと通つたところに似てる、裏通りだつ
た。唯一違うのはそれほど暗くないといつ点だ。

「こ、こんなところで一体何を……」

「まあ、そんな警戒すんなつて。俺は来栖だ。^{くわす}聞きたいことはまだな
……お前さん、雨宮功つて男を知つてるよな？ 今、そいつはどこ
だ？」

「知らないつす。俺はあの人のことあまり知りませんから」

そう答えた瞬間、来栖の手つきが鋭くなつた。俺は危険を感じ、
右目を瞑る。

「いやさ、あんま強引な手は使いたくねえんだ……だから 答え
てくれんねえかな？」

「ホントに知らないんですつてば」

瞬間、来栖の巨体からフックが放たれたが、俺はそれを最低限の
動きでかわした。ただ、普通の人間より拳の速度が速い ！

「上から半殺しにしてでも聞き出せつて言われてんのよ。だからさ
あ……加減できねえんだ」

「上つてなんだよ！？ 一体俺が何したつてんだ！ 俺に何の用が
ある！？」

再度、フック。俺の鼻の数センチ先で強靭な拳がビュン、という
音を立てて空を裂く。俺はバックステップで来栖と距離をとる。殴
り合いは慣れているが相手の格が違いますぎる。一発でも喰らつたら
即アウトだらう。

しかし、なぜ殴打なのだ？ 俺から苦痛によつて師匠のことを聞
きたければ凶器でも使えばいいのに。

「まあ、理解し始めてるだらうけどよ、あんま騒ぎを起こしたく
ねえんだ。外傷も目立たないようにじろつて」

確かに殴打なら服の内側に青アザを作れるから立ちはしない。

「でもさ、俺が警察に通報するとしたら？」

「あそこに捕まるほど俺たちはへマしねえよ」

「俺、たち ？ 複数人いるってことか？ 一体何の目的で？」

「師匠に何が？」

数々の疑問が頭の中で駆け巡る。こんなときでも頭がこんなに早く回るなんて自分でも驚きた。しかし、この来栖とかいう男、よくしゃべるな。探しを入れるのにはもつてこいの人物なのかもしれない。

「はあっ……はあっ……！」 师匠に何の用があるんだ？

「ちよいとあいつは上ともめたらしくてな、抜けたんだよ。『研究者』を

「抜けた？ 『研究者』？」

「おつとましい。これ以上しゃべる義理はねえ」

右アッパーが放たれるが、かわす。かわせたのだが拳速がどんどん速くなっているのだ。さすがに最低限の動きで回避を図るのは難しくなってきた。

下手に攻めたらカウンターを喰らひしき、この義眼の駆動時間以内に倒さなければ半殺し確定なのだ。どうする。ギリギリの活路を考える。次々と来栖の巨体から放たれる拳を回避しながら、考える。防戦一方では時間と体力だけを削るだけなのだ。

わらにもすがる思いで、俺は手袋を左手にはめた。ウェットスースのように肌にぴったりする構造のものだった。来栖はそれをはめたことスキを突いて蹴りを放つ。これは回避しきれない ！

「とつた！」

「ツー？」

「ドスツ！ 鈍い音が鳴る。かろうじてガードはできたものの、代償にした右腕が軋み、悲鳴を上げる。蹴りは拳よりはるかに威力が高いというが、こんなものを正面から受けたら最悪一発で気絶するほどの威力だつた。

体勢が崩れた俺に追撃を加えるべく、来栖が距離を詰める。おそらくこの動きはボクシングで培われたものだ。

それは暴力の嵐だった。殴りに殴りに苦手のか拳で俺の力でして両手を打つ。このままで腕が持たなくなる。ただでさえ蹴りによるダメージが大きいのだ。

「がんばつてんじやねえか！」あ

「物語の世界」

絶体絶命。その言葉が粗心し、状況だった。

をはめた左の拳を来栖の拳に叩きつける

来栖の表情が苦痛の色に歪んだ。俺はそんなに身体を鍛えてるわけじゃない。せいぜい高校生の筋肉より少しだけ筋肉がついているような身体だ。どうやらこの手袋はホントに俺の筋肉を増大させてくれるらしい。そして、俺の左手には反動があまり無い。

あとでリリスにご褒美をあげなければいけなくなつたな。

（いじるせ！この手袋！これならギリギリの活路を見出せる！）

体制をとりつつ、左手でほんの少しのスキを突いて攻撃するのが得策だ。

「良い拳じゃねえかよオ……俄然やる氣が出るつてもんだな。」
「いつも本氣でやらせてもらおうか」

来栖がそう言つた瞬間、彼の全身の筋肉が一回り太くなつた。その太さはまるで丸太くらいにまで膨れていつた。どういう原理なんだ？ 筋力を増大させる器具なんて聞いたことが無い。まあ、俺のはめてる手袋はそれらしいのだが。

（くそ！ あと駆動時間はあと何分残つてやがる！？ 時間はかけ
ていられないんだ！）

「ハアッ！」

来栖のまるで「コリラ」のようにまでなつた肉体が俺に襲い掛かる。転がるよつにかわすと、彼は俺の後ろにあつたコンクリートの壁に

小さな亀裂を入れた。速すぎて、この義眼でも少しブレが生じた。

「なんなんだよ！ お前は！」

「昨日の一番が今日の一番だとは限らねえ。科学においても同じことが言えんだよ」

「何が言いたい！？」

「それが分からぬならお前はここで情報だけ吐いて消えちまいな！」

スキができなくなつた。さつきまでは五発に一発は大きく振りかぶつていたのに……！ スキ 相手が大きい力を出す瞬間を狙えれば！

「よく持ちこたえるなあ！ 久しぶりに楽しいぜえ！」

高速の拳を回避しつつ、俺は頭を巡らせてそして、たつた一つの回答にたどり着いた。

「オラア！ もらつた！」

「ぐッ！？」

回避しきれない拳を受けきれず、体勢を崩す。

「終わりだ！」

そこで来栖は俺との決着をつけるべく、大きく右腕をふりかぶる！

！

これで俺の勝利は決定した。

「なつ！？」

来栖が驚嘆の声を上げる。

なぜなら、俺が整える」とのできないはずの体勢を整えていたからだ。

来栖は典型的な真っ直ぐで正々堂々勝負する男だ。俺に対しても警告はしたし、筋肉を何らかの作用により増幅させるという

秘策を最後まで取つておく点。この一点からだいたいの人格を割り出せる。こういう人間はたいてい最後の一撃、というものを持った。盛大に終わらせようとする傾向がある。それは今まで経験してきたケンカで分かつたものだ。

ならその場面を誘導させてしまえば良い。拳をわざと受け、わざとよろけたように見せる。そうすれば来栖は必殺の拳を出してくるはずだ。一種賭けではあつたがこれしかギリギリの活路が見出せなかつたのだ。

「ギリギリの活路は見出した！ これで終わりだ！」

俺は来るすの懐に潜り込み、左拳を全力で彼の顔に打ち込む――！

「ツー？ がつ……」

そして、来栖は壁に激突し、そのまま氣絶した。それと同じようなタイミングで俺の右目が能力稼働時間の限界に達し、元に戻った。全身に押し寄せる倦怠感と、右腕の打撲、義眼の能力を使ったことによるフィードバックの頭痛。それらのせいで俺の意識は朦朧としていた。

「はあつ……はあつ……！」

一刻も早くここから出ないと、起きた来栖に半殺しにされてしまふ。俺はふらふらとした足取りでそこから立ち去つたのだった。

ここはどこだ。今までどこを歩いたのか、どのくらい歩いたのかさえ分からぬ。ただただ、来栖から離れるよう、俺は何も考えずに歩いた。気付けば、空はオレンジ色になつていた。

全身を襲う疲労が限界に達し、俺はその場で壁を背もたれにして、へたりこんだ。だんだん思考能力が回復してきたので、周囲を見回す。見たことがあるところだが、寮からは相当離れているところだ。バスで帰つたほうがいいかもしない。

「……はあ」

肺の中の全ての空気を搾り出したように大きくため息をした。昨日の夜の銃弾といい、来栖といい、あまりにも俺の周りで異変が起きすぎている。原因は……。

（そんなことどうでもいいや……とにかく帰つたら、凜に詫び入れて、飯食つて、すぐ寝よつ……。それにしても久しぶりに本氣で身体動かしたな……）

ここからバス停はすぐ近くにあるよつだ。駅に行つてそこから帰るとするか。

「つてあれ？ 右目が……」

右目が見えていない。携帯のカメラ機能で自分の顔を見てみても、あまり異常は見られない。

「使いすぎたか……今度から少し抑えるか」

打撲の痛みは消えてきたが、頭痛がひどい。まるで頭をハンマーで小突かれているかのような感覚。右目のことはひとまず置といて、帰ろう……。

向いている。シャノンに対しても抱いたのだろうか。それとも何かに思いを馳せているのか。俺には全くわからなかつた。

「おーい。りーん。帰つてこーい」

「うわつぶー？ 何かしら天真？ 別にお嫁さんのことを考えてたわけじや……」

「お嫁さん？ お前の将来の夢なのか？」

「そつ、そんなわけ……」

凜は顔を俯かせる。

「俺はお前の夢を笑つたりはしねえよ」

「……ありがとひ。でも話すのは今度ね」

凜は満面とも言える笑みを俺へと向けた。俺はその顔につい、ドキッとしてしまー、

「ちよつ、ちよつと水飲んでくる」

そこまで俺は動搖していたのか、くるつと方向転換しようとした瞬間、足をもつれさせてそのまま前のめりに倒れてしまー。凜を押し倒すような形を取つてしまい、鼻息がかかる距離まで顔を近づけた体勢になつてしまつた。はつきり言つて非常に不味い状況だつた。あらゐる意味において。

しかしながらお互い離れることが出来ず、そのままの状態が続いていたときだつた。

「兄さん兄さん、遊びに……兄さん？ 凜さん？ 何してるのかな？」

紅音が登場。これはどうすればいい……！ 頭が沸騰しそうにまで熱くなつて、上手く回転できない。そして彼女はなんだかジトツとした目つきで俺を見ていひ。

「ふじゅんじせーーーーーーーはダメなんだつて、リッちゃんが言つてたよ？ でも今兄さんたちは……あわわわわー！」

「『』誤解だ！ これには深あああいワケがあつてだな……」

「兄さん冒ドラに出てる、浮氣したことを取り繕うダンナさんみたいな言い方になつてるよ~」

「……ん？ テンシン、薄つすらだけドリンと組み敷いていたような気がするの。あたしの気のせい？ 幻覚かな」

シャノンさん、紅音と同じように俺のことをジト田で見ないでください。怖いです。

ついでにシャノンさんも起きたようです。凜は……いない！？ 一体どこに消えたんだ。シャノンと紅音は俺に注目しつぱなしで凜のことを見ていなかつただろう。おそらくこの部屋のどこかに隠れていることは間違いないのだが、それよりもこの窮地をどう切り抜けるかが問題だ。

「兄さん、これは問題だよ？ 凜さんに手を出すって……分かってたけど！ こんな時間にやらなくとも良いじゃん！」

「テンシン、リンを傷つけるのはいけないと思つ」

「二人とも、落ち着け。深呼吸だ。深呼吸をするんだ。お前たちは今、冷静な状況判断が出来ていらないんだ！ 落ち着けば俺の話が分かるはず！」

その後、シャノンの俺を見る田が若干鋭くなつたのと、紅音公認の変態になつたのだった。

その後は何ら変哲もなく終わり、シャノンはまた可愛い寝顔でソファに横たわつている。今俺は外に出て、いつもの田課をしようと思つた。右田は食事をしているときに回復した のだが、

「……ん？ あれ？」

切り替わらない。連続十五分が限界なんじやなくて、一日十五分が限界ということなのかもしれない、と思い俺は部屋へと早足で戻つた。

玄関に置いてあるシャノンのスーツケースの下に普通の封筒が落ちていた。拾つて差出人や宛先を見てみると、

「なんだ、これ？」

なかつた。ただの入れ物かもしれない。俺は、つい、興味本位でその封筒の中身を覗いてしまつた。そこには、

『D·D·Project

Homicide arms report No.21』

と書かれていた。他にも数枚の紙がある。俺は携帯でその英語の意味を翻訳して 後悔した。

『D·D計画、殺人兵器21番の報告書』

頭のページ以外は全部日本語で書かれていた。

『検体番号21番の報告書』

1. 基本的人体の問題 基本的構造には問題見られず。身体能力は現状、レベル3。改善の余地有。

2. 投薬上の問題 日常生活においては投薬の必然性は見られず

俺はそこで読むのをやめた。意味が分からなかつた。そして、本能的に恐怖を感じた。殺人兵器？ D·D計画？ 一体何がなんだか分からなかつた。

銃による狙撃、来栖の師匠についての質問、この報告書。最近起こつたこれらは、果たしてつながりを持っているのだろうか？

D · D P r o j e c t (前書き)

続きです。もつすべールだと思こまや.....。

話は一番最初に戻るのだが、とにかく今すゞく惑つて いるのだ。

いろんなことに頭を巡らせつゝ、いつものように教室の扉をぐぐる。しかしながら今日の教室はやけに騒がしい。とくに男子が。

「なあ、サイカ。この騒ぎは一体

「おうおう天真くんじゃないか……」の前の話はあとであるとして

一体なんだ!? なぜ、お前の、席に、リリスちゃんが座っている

!?

「は?

そう、群がりの中心は俺の席だったのだ。そこには何事もないようリリスがぴんと背筋を伸ばして座つていた。

「おい、リリス。ちょっと来い

「……こんな群衆の前で平然とわたしを連れ去つてあんなことをやるんことをやるのとするなんて、流石紅音さん公認の変態さんですね」

「紅音H……まあいい。それはそつとこんな朝早くから何の用だ?」教室の外へと一旦出る。クラスメイトの視線が刺さつて痛いのはこの際、気にしないほうが良いだろつ。

「……手袋、使われましたか? 使われたのでしたら是非感想を聞かせて欲しいのですが」

この子、さつきとは比べ物にならないほど目が輝いています。やはり興味がある分野になると人は誰しも気分が高揚するということ

なのか。

「あれがあつたおかげで助かった。あれ、お前の言つとおりホントに筋力が上がつたよ」

「実験成功ですねつ!」

リリスってこんなに分かりやすく喜ぶ娘だったのか。なんだか意外な一面を見た気がする。

「じゃあ、実験台になつた報酬として一つ聞きたい。人造人間は作れるのか？」

無駄でも良かった。だが、聞いてみないことには始まらない。昨日の報告書。それだけが気になつていて。俺が尋ねると、リリスはいつものような無機質な表情に戻り、

「そちらの方面はよく分かりませんが……その研究をやつている機関がいくつあると聞いたことがあります。しかし、人造人間と言つても言い方にもります。遺伝子を改造する方法、人工的に作った子宫内で育てる方法、ウワサだけでも様々な種類があるんです」

「そうか……ありがと、助かった」

「……ど、どういたしまして。というよりなぜ唐突にそんなことを聞いたのですか？」

「いや、特にはなんでもないんだ」

これは俺の問題。他人を巻き込む理由は何もない。そう思い、俺は教室へと戻った。

俺は授業中、あの報告書のことばかりを考えていた。核心に触れたいという好奇心、核心に触れてはいけないという本能から来る恐怖心。この二つが俺の中で混ざり合つてワケが分からなくなつた。

（師匠を捕まえれば……でもこの町にはいつまでいるかも分からな
い……探すだけ探してみるか）

「おい、天真、天真！」

「……ん？ 悪い考え方してた。なんだ？」

サイカが小声で話しかけてくる。教師に見つからずに、会話をするなんて俺たちにとっては造作も無いことだ。

「リリスちゃんとは付き合つているのか？ 明らかに仲良さそうだったじやん！ それにあんま仲良くしてるとファンクラブのやつらに反感買つぞ」

「俺とリリスは付き合つてなんかない。なに？ アイツのファンクラブなんてあつたのか」

「当然！ 一年生の美少女ランキングで紅音ちゃんと同格なんだよ。すごいだろ」

「そんなにアイツ人気あるのか……でも友達見かけないけど」

「リリスちゃんは影から見守って楽しむタイプだろ常考」

「マズい。サイカの美少女演説のスイッチが入つてしまつたようだ。こうなつたからには止める手立ては無い。大人しく聞くとしよう。『良いか！ 美少女というものは出会わなければまずフラグは立たん！ そして、美少女との出会いのあとはふれあいが大切なんだよお！』

「リンクス、授業の邪魔をするというなら出て行つてもらうぞ」

「先生！ 僕は今大事な話をしているんです！ あなたもまだ結婚していないでしょ！？ この話は聞いていて損は無いはずっ！」

クラスの連中の大半はまたか、という感じでみんな笑っていた。教師（独身）も呆れかえつた表情でサイカを見ていた。なんとも平和な光景である。

「出て行け」

「まだだ！ まだ……ってうわあ先生やめ うわあああああ……」

その後、サイカはキレた教師に職員室に連れて行かれたのだとう。

今日の授業もいつもと変わらず、終わりを迎える。今日も天気は一日中晴れ渡つていた。僕は教室を出る前に凜に声をかけた。

「凜、今日は一緒に帰れない。気が向いたらでいいんだけど、シャノンの相手をしてやつてくれる嬉しい。あいつも寂しがつてただろうし」

「わかった。わたしはこのあと予定無いし、あなたの部屋行くわ。鍵は？」

「シャノンに預けた。もし、居なかつたら僕にメールよろしく」

「うん、わかった」

「夜までには戻る。お前はできるだけシャノンと一緒に頼む」

俺はそう言い残して教室を後にした。

そう、俺は心なしかシャノンが関わっているという可能性を考えていた。俺はそれをその可能性を拒んでいた。あの子に、あのあどけない寝顔を見せるような子があんな物騒なモノに関わってほしくないからだ。

あの報告書が入った封筒は学生カバンに入っている。あの書類にはとにかく怖くてあまり覗きたくない。しかし、まずは師匠を探して話を聞かなければ始まらない。今、俺は三日前に師匠に会ったアーケード街のあたりを歩いていた。

「……いない、か」

無意識のうちに俺は早歩きで師匠を探していた。心の奥底では恐怖を感じて焦っているかも知れない。仕方ないことであろう。何せ、自分の命が一度も脅かされたのだから。

「うにゃ？ 黒木くん、こんなところで何してんの？」

「沙雪さん？ どうしたんです？」

沙雪さんが目の前でおぼつかない足取りを取りながら歩いていた。「いやあ……わたしも、神社からの帰りで、買い物して行こうと思つたんだけど……スーパーってどーー？」

「このまま真っ直ぐで、一つ目の信号を……ってあまり頭に入つて無さうなので案内しますよ」

「そうやってわたしを裏通りへ連れて行つて、人には言えない既成事実を作る気だねっ！？」

「俺は変態じやない！ しかもなぜそんな発想になるんですか！ ああ……くそ、占いで俺は今日何位でしたっけ……今日は見れなかつたんですよ」

沙雪さんは懐から何かのメモ帳を取り出し、

「君はかに座だつたね。今日は確か11位で『不運な出会い』があるかも。今日は大人しくしたほうが吉。ラッキーカラーは白、何も考えない時間があると心にゆとりが出来ます』だつて」

占いとは正反対のことをしてゐるな、今の俺。

「あなたが占つたんですから、だつて、つておかしいでしょ……」

「あ、そうだねっ！ まあそんなことばぢうでもよくスルーして、スーパー行こりよー。こつなつたらせんと買い物物に付き合つても

らうよー」

「どんな理由ーー？」

「とにかく早く行こりよー！」

俺の腕を引っ張つてただつ子のようにせがむ沙雪さん。あなた大人でしょー。

「分かりましたから……腕引っ張んないでください腕掴まないでください胴体掴まないでください」

「三連撃だ！」

騒々しくも俺は沙雪さんをスーパーまで案内することにした。師匠を探しながらでも、沙雪さんは連れて行けるからな。

俺は善意で沙雪さんに付き合つてやつたが 後悔した。

「あわわわ……『めんなさー』……」

上の棚の物を取り出せつとしたが、沙雪さんが他の棚に並んでいる物を床にぶちまけて店員に謝つてゐるのだ。これは一度目ではない。三度目である。

他人のふりをしたいのだがそれを一回やつたら沙雪さんが涙目でやめてよう、と懇願してきたのでそういうワケにもいかない状況なのだ。

「はあ……なんでわたしこうなるのかな……」

「それが沙雪さんの短所で、長所もあるんですよ、多分」

「ありがとう、黒木くん……君みたいなのが弟に居たら良いなあ

「俺、姉はあんまり欲しくないですけど」

「むー、失礼だなっ。わたしだつて君の教育を指導してあげることぐらいい朝飯前だよー？」

「沙雪さん……寝不足じゃない、ですよね？」

「寝言は寝て言え、と言いたいんだねっ！？ ひどいな、わたしに対して刺々しいよ」

「そんなこと無いと思いますよ？ というより、買い物は済んだんですか。こんなことやつてると陽が暮れちまいます……」

彼女の買い物かごには棚の物を倒しながらも苦惱して手に入れた生活雑貨が諸々入っている。この人、レジまで災厄を持つしていくつもりではないだろうかと心の底から心配した。

だが、その心配は消え去り、沙雪さんは会計を済ませたようだ、

「ありがとねっ、付き合つてもらつたりして」

「俺も暇でしたから。沙雪わん、師匠を 雨宮師匠を見かけましたか？」

「うーん、わたしも探してるんだけどね……見つからないよ」

「そうですか……携帯の番号交換しません？ 探してる人は一致してるし、必要以外のときに連絡取つたりしませんから」

「君が女たらしと呼ばれる理由が分かつた気がするよつ、まあ携帯の番号なら良いけど」

沙雪さんと携帯の番号を交換した。これで検索効率が上がる」とは間違いないだろう。

彼女とはここで別れることがなつた駅までたどり着けるか心配だつたが、どうやら自宅は徒歩で帰るらしく問題は無いそうだ。少しは沙雪さんを信じてやろう。

今日は陽も暮れてきたので引き上げたほうが良さそうだ。このまま捜して見つかるという確証も無いし、何よりもおやうくい部屋に居るであろう、凜をいつまでも放つておくワケにはいかない。

帰り道に何ら特異なところは無い。昨日のような来栖みたいな身体つきの人はいないし、怪しげな裏通りもなるべく通らないで帰りたい。

「ただいま……」

部屋に入ると凜とシャノンが寝ていた。シャノンを抱くよつて凜が寝っていて、その様子はさながら親子に見える。

「疲れて寝ちまつたか……飯でも、作ってやるか」

凜の好きな和風料理でいいだろ。シャノンはハンバーグが良いと暴れるかもしないが。

「……ん？ て、て、ててて、天真つ！？」

「噛みすぎだ……今、起きたか？ 今から飯作ることなんだけど、お前も食つてけよ。シャノンのことのお礼だ」

「そつ、それは良いけど……！ 帰つてきたなり歸つてよね……恥ずかしいじゃない……ブツブツ」

「いやあ、二人ともあまりにも気持ち良さそうに寝てから起こすのも野暮かなつて……。貴重な寝顔も見れたし」

「はわつう！？ ちょっと洗面所借りるわねつ！」

女の子は寝顔を見られたくないのか。あどけなさが滲み出て可憐いとは思うのだが。まあ今度からは気をつけよ。

それと、凜が三十分くらい洗面所にこもつていたのだ。流石に長いなと思つて洗面所の扉の前で、

『今は入らないでっ！ あ、あと五分もしたら落ち着くからつ！』
とのことだつた。乙女心は男には分からぬのだと感じた瞬間だつた。

ちょうどシャノンが起きるころには夕飯が出来上がつていた。

「シャノン、今日は凜とどんなことしてたんだ？ それと時間通りに帰れなくて、ゴメンンな」

「今日は……リンに少女マンガつていつのを読ませてもらつた。あれはなかなか面白かったよ」

「え、そんなの読んだのか……年頃の女の子だもんな。良かつたな

シャノン」

「うん」

朝の刺々しさがウソのようだ。くそつ、いつのこと朝が来なければいい。そうすれば、精神的に痛めつけられることも無いのに。

「そうだ、シャノンちゃんつてお箸持てる？ 外国の子だから持てるとは思わないんだけど……」

「ハシの持ち方はイサオに教わったから大丈夫だよ、リン」
彼女は凜の前で箸が持てることを披露した。

「ずいぶんしっかりしてるので、兩富さん。シャノンちゃんもちやんとしてるし」

「いや、シャノンはたまにとんでもない」と言つんだよな……しか
も元凶は師匠と紅音なんだ」

「テンシン。やっぱりアカネの言つてたテンシンの趣味嗜好はウソ
なの？」

「ああ、ウソだ。あいつの言つことは簡単に信じちゃいけない絶対
人には隠したいことが一つや一つはあるつてもんだ。れっき凜が
洗面所にこもつていたのも然り、俺の理想郷のこと然り。

シャノンは上手にご飯を口に運んでいる。

「シャノンちゃんのほうが礼儀作法が出来たりしてね」

「それはないな。もしそれが現実になつたら俺は礼儀作法の道を極
めてやるぜ」

「ふふふ、天真もまだまだ子どもじゃない」

「う、うるせえよ……」

「こんな　こんな、一年から見たらちっぽけに過ぎない一日が今
は大切に思えたのだった。」

凜も程よい時間で帰つた。シャノンはよほど凜になついてこるら
しく、リン、次はいつ来るの？　と言つてきただまどだつた。

シャノンは今、風呂に入つてゐる。そして俺は今　あの報告書
を手に取つていた。

『D・D Project』

「一体なんなんだ。プロジェクトというのだから何かの計画である
ことは間違いない。それも殺人に関する何か。
(シャノンが寝付いてからこれを読むとしよう。これは俺の問題だ。
誰も巻き込みはしない)

封筒を机の中にしまう。俺の部屋は洗面所とトイレが同じところにある。そして、バスルームはその隣である。洗面所で顔を洗おうと出て行くと、

「シャノンっ！？」

バスタオル姿のシャノンが出てきたところだつた。白い肌にはまだ水滴がついていて、バスタオルも体にぴったりくつついている。それがまだ未成熟ではあるが女性特有のラインを醸し出していて扇情的に見える。

「わ、悪い！ わざとじやなくてだな！ これはそのアクシデントだ！ アクシデント！」

手をアタフタさせていると　俺は一体どうやつたのか分からないが　指の先にバスタオルが引っかかり、ぱさり。

「え

「～～！」

バスタオルが外れてコンマ数秒と経たぬうちにシャノンはとんでもない力で俺の顎を思いつきアッパー・カットした。そのおかげでシャノンの裸は見えなかつたものの、あまりにも威力が強くて気絶してしまつた。

頭がくらくらする。顎つてしつかり守らないといけない部分だつたんだな。今回は学習になつた。

「痛つた……しゃ、シャノン……」

まるで汚物を見るかのような目で俺を見ていた。昨日よりいつそう増した無言の圧力がかかつていて、そして彼女の視線は絶対零度に限りなく近い温度で俺を見ていた。すでに服は着ているようだ。

「テンシン……」

「申し訳ないッス！ ごめんなさい！ まことに申し訳ござつません！」

その場で土下座に方向転換。地に頭をこすり付けるような感じだ。

サイカ、今お前の土下座してるときの気持ちが痛いほどに分かる。

「へんたい……ふんだ」

その後三十分俺はシャノンに謝り続けてやつと田線を合わせてもうるるようになつたのだった。

そして、俺は少しばかりひりひりと痛む顎をさすりながら報告書に向き合つていた。シャノンは怒り疲れたのか気持ち良さそうに寝ている。

「D・Dプロジェクトは『研究者』によつて研究、実用化へ向けて進行する計画である……次もまだあるな」

今のところちゃんと封筒の中の紙の順番を並び替えて、その順序通りに読んでいる。読んでいるときは恐怖感が身体をおおいつ。

おそらく今俺が読んでいるのは『D・D計画』の概要についてだろ。恐ろしく細かく書いてある。封筒の中の紙は概要、内容、結論の紙に分けられるようだつた。

「この計画の構想は2002年には既に完成していたが、多大なる費用と人材が必要とされたため計画の実行が遅れた。計画の発案者は雨宮功である、だと……！？」

同姓同名か？ それとも。

概要の紙はここで途切れていった。他の紙も目を通してみたが他には目ぼしいものは見つからなかつた。特に後半のなんかは何を書いてあるのかさっぱりだつた。

ただ、確定したことが一つある。これは表向きの科学ではないということ。俺みたいな一介の高校生が目に入れてはいけないモノなのだ。

「くそッ……！ 師匠は何か知つてゐるのか……それさえも分からぬいじやないかッ……！」

捨てるか……こんなものは捨てたほうがマシだ。捨てると人目に触れる可能性がある。これは俺の問題。他人を巻き込む理由は何もない。

だから、明日焼き払つてしまおう。そう思つて俺は床に入った。

「ふあ……最近眠りが浅いのかな……清々しくねえな」

今日は食パンで良いか。俺も連日精神的に疲れてるから一日ぐら
いサボつてもいいだろつ。といつか料理でサボるのは一年ぶりだつ
たりする。

「シャノン、起きろー」

「あたしに命令すんな……んむむ……」

朝モードのスイッチが入ったようだ。俺の精神的体力よ、シャノ
ンの口撃から耐えるのだ。

「朝飯、食べるぞ」

「はんぱーぐ……」

ソファからむくじと起き上がり眠たそうな顔をこする。

「朝からそんなもの食えるかっての。今日はパンだ」

「むう……眠いよ」

今日はなんだか大人しい……？ よし、このまま行けば俺は無傷
で学校に登校できる。

「俺もうそろそろ学校に行くぞー」

「やだ」

「え？」

「……あたしもガツコウいく。行きたい」

「あのな、お前は正式なこここの住人でもないんだし、居候の身なん
だからそんなことはできないんだぞ？ 入学届もとつてきてないの
に」

「にゅうがく……どだけ？ あるかもしね」

シャノンは眠たそうな顔をしながらスーツケースを漁りに行つた
ようだ。さて、俺は朝飯食う前に着替えを済ませるか。

俺が着替えを済ませた頃にシャノンが、

「テンシン。にゅうがくどだけってこれ？」

「……なんで入つてんだ。まあ師匠の送りつけてきたスーツケース

だからもう驚く氣力も起きないが

「じゃあこれでガツコウ行けるの！？」

「たぶんな。シャノン、お前、制服入ってないかステッケースの中見てみろ。凜が着てるよつなやつだ」

「あつた」

「はやツ！」

まあ師匠のことだからおそらく入学手続きもすんなりと進むだろう。一体どの範囲まで手回ししてんんだか……。

「シャノン、パン食つて学校行くぞ！」

「うんっ！」

その時俺は初めてシャノンの笑顔を見た。

早めに家を出て、シャノンと学校に行く。事務室に入ると、表情穏やかなお姉さんが、

「シャノン＝フォン＝フォスターさん？　はい、今日からここにの学校の生徒さんですよー」

予想していたが、ここまでは思わなかつた。早すぎだろ？、普通、一般人ならそう思うはずだ。思わなかつたらそいつは異常か、師匠と同じような手を考えた人間かのどちらかだ。

「クラスは黒木くんのクラスね。あ、でもまだ行つてはダメよ、フォスターさん。色々聞かなきゃいけないことがあるから

「わかつた」

「じゃ、シャノン。俺は先に行つて待つてるからな

「うんー！」

今はこの時を大切にしよう。唯一、心の中の不安を消し去つてくれるこの時を。

「よつ、サイカ。エサは……飯は食つたか？」

「俺は動物じやねえよ！？　あ、そうそう、天真聞いたか？　転校生の話。とんでもない美少女が下の学年に今日から来るらしいぜ」

「へえ……」

「なんだよ、無関心だな。そうだよな！　お前は常に周りに美少女

が居るもんな！」

「勘違いをするな、低脳サルが」「ヒドイ言われようだ……つーかお前今日『』機嫌な。何かあつたのか？」

「いや、別に何も。いつもどおりわ」「変なやつ」

そうするとタイミングよく、教師がホームルームを始めた。凜もちゃんと来ているな。ちょっとドレッキリさせてやろうと思つてあって知らせなかつたのだ。

「えー今日は授業の前にみんなに嬉しいお知らせだ。フォスター入れ」

とことこと歩いてくる。金髪に宝石のサファイアのような碧眼。

高校一年生とは思ひがたい身長だ。

「シャノン＝フォン＝フォスターです。今日からよろしくお願ひします」

おお、なんという素晴らしい棒読み。どうせあの事務のお姉さんにぶつきらぼうすぎて即興で練習して覚えさせたのだらう。あとで礼を言つておくか。

「じゃあ、フォスターは天音の隣の席だ」

とててててと凜の元へと走つて行くシャノン。凜も驚いている。そして、俺の横で、

「なんだ……!? あの金髪ストレートの口リ美少女は！ 天真？ お前知り合いだよな」

「断定かい……つてお前少しだけシャノンのこと見たことあるよな」「ああ、あのウソつかれたとき見たあの女の子か」

「そ、その女の子だ」

教師は何かを忘れたらしく、一時退室したようだ。シャノンは凜に抱きついている。あれで授業受けるのか。そして、クラスの男子の半数の目線がシャノンに、残りは、俺に。

「お前ら……ちょっと待て。誤解をしているー 待ておい教師が帰

つてくる可能性を考えないのかクソ活路が見えねえええええ！」
教室に俺の叫び声がこだました。來るのはある程度の日常で良い。

激しいのはとても疲れるんだ。今の俺の状況のようにな。

今日一日の授業は転校生も入つてクラスの雰囲気が高揚していたためか、みんな周りがあまり見えていなかつた。見てているのはシャノンだけである。それも授業中まで凜の膝に乗つている、だ。しかし、サイカいわく、

「ゆ、百合属性！？ あれは美少女ランギングに大きく変動をもたらすぞ……」

らしい。美少女ランギングか。その投票のときは俺も一票誰かに入れるとするかな。

そして、生徒たちの待ち待つた休み時間。シャノンと凜は学食のようだ。サイカも消えてるし、今日は一人で食べようかと思つたとき、

「兄さん兄さん！ シャノンちゃんがこの学校に入ったって本当！？ 入つたんなら会いたいな会いたいな！」

「紅音さん、先輩方の視線が集まつてますよ。あのシスコンめ、つて」

リリスと紅音が昼飯を持ち寄つて教室に入つてきた。

「基本的に俺のせいなんですね……んで紅音はシャノンに会いに来たのか。それは残念だつたな、今シャノンは凜と一緒に学食に行つてるよ」

「えええええー！ でも帰つてくるよねー！ そのときに会つたらお持ち帰りしてもいいかな！？」

「ダメに決まつてんだろ、アホかお前は」

「黒木さんアホか、と言つた瞬間、男性陣の目線が厳しくなりました。あの変態め、つて」

「それはお前の思つてることだろ！？」

「……おおつと少々、余計な一言でしたね。申し訳ありません、事実を突きつけて」

「紅音よ、お前はここにこのペースについていけるのか？」
リリスのおエースについていけるやつなんてそういう西ないのだから。

「うん」

「類は友を呼ぶ、か……」

変人の天才は変人の天才と仲良くなるのだな、学習したよ。

「りつちゃんつてば辛口コメントだねー。さすがだよつ」

「たまにしか登校して来ないのですからこのくらいやつておかないとストレスが溜まつてしましますからね。まあ紅音さんは溜まりそうもありませんが」

「ノーテンキつて言いたいんだね！？ 失礼だなあ……あたしだつてあんなことやこんなことで疲れてるんだよ？」

「その言こと回しはやめる……変な勘違いをするから」

「黒木さん変態ですね」

「しょうがないだろ、思春期なんだから。

「そなの？ ジャあ、具体的に言つとね、棒を入れたり、出したりするの」

「ぶぱつ」

「な、何を言つてるんだい？ 紅音さんや、冗談はおよしなされ、
と言いたかつたが声が出なかつた。

「掃除機つて疲れるよね……」

「掃除機かよ！？」

「……黒木さん、なんだと思ったのですか？ 棒を入れたり、出したりで一体何を連想なされたのですか？」

「にやり。してやつたりと言つ顔だ。

「別に何も……」

「俺は落ち着きを取り戻す。危ない危ない。もう少しで変態に変態を重ねるところだつた。

「あ、そういうえばね、この前迷子になつちやつたんだよー……ちよつと怖かった」

やつぱり沙雪さんと紅音つて似てるなあ、と俺は心の中で思った。

言動までそつくりとは驚いたものだ。話かたとかも似ている。

「紅音さん、伝えておきたいことが。黒木さんの趣味については

「兄さんつて妹系、つていうのが好きなんじょ。でもあたしには
いつも冷たいんだよ！ 矛盾してるよね」

「紅音さん、それはですね モゴモゴ」

俺はとつさにリリスの口を塞いだ。だから簡単に人の趣味とかを
暴露するんじゃない。恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ。
「リリス、それ以上しゃべらないでくれ……」それ以上クラスメイト
の目線が厳しくなつたら辛いんだ」

「……しようがないですね。許して差し上げましょ！」

後輩に頭を下げる俺つて一体……？ そうして時間は過ぎていっ
た。

その後、一週間は何も俺の周りで変わつたことは起きなかつた。
機能していなかつた右目の能力も回復したし、来栖との闘いで負つ
た傷も癒えた。幸い、周りのやつらにほ傷のことをとやかく言われ
なかつた。

変化があつたのは休日のことだつた。シャノンは凜やその周りの
友達にこの町を案内してもらつてはいるから部屋には居ない。彼女と
の生活にも慣れてきたつてもんだ。

その時、俺のケータイの着信音が響いた。電話だ。

「はい、もしもし？」

『あ、黒木くん！？ 今暇！？』

沙雪さんの透き通つた声だ。しかし、その美しい声にも若干の焦
燥が見られるような気がした。

「俺は暇ですけど……どうかしたんですか？ 相当焦つてゐみたい
ですけど」

『雨宮博士、見つけたのつ！ 場所はメールで伝えるけど、今行け

る？わたし、この後大事な講演会があつてちょっと追えそうないの。だから彼を捕まえたら中松が捜してた、って伝えてね！ よろしくっ！』

「あ、いやその……」

ブツツ。一方的にしゃべつて一方的に電話を切るとはなんとも沙雪さんらしい。今度会つたらいたずらしてやろう。電話を切つてからほとんど間髪なく、メールが送られてきた。

師匠の目撃場所は部屋から結構近い。赤レンガ倉庫のずいぶん先のほうだな。走つていこう。師匠に会つて聞きたいことは山ほどあるのだから。

「たしか、この辺だな……」

赤レンガはレストランなどがあり、休日は観光客などで混雑するのだ。しかし、そのわりに人が少なく というより他に人がいないに近いかかもしれない 送られてきた地図を拡大するとここあたりで師匠を見たらしいのだが……。

「どこだ？ つたく、臭いし、師匠は手間かけさせるし……」

人気が少ないから見つかりやすいとは思うのだが そう考えて

倉庫と倉庫の間を曲がった瞬間、吐きそうになつた。

人の、死体があつた。仰向けに倒れ、赤黒い血がその人の体からあふれ出ていて、未だアスファルトに赤いシミを広げ続けている。お腹辺りには野球ボールほどの大きさの穴があつて、そこから血が滲み出る。腕は無く、引きちぎられたような跡があり、白い骨と非常に細い肉の線 筋肉だ が何本も何本も見えている。その傷口が凄惨さを物語つていた 。

俺の心拍数が一瞬で跳ね上がる。

そして、俺は、気付いてしまつた。その死体が師匠のものであることに。身体つきや、服が同じだつたのだ。

「そん……な……師匠が……死んだ……のか……！？」

「そうだ。雨宮は俺が殺したんだよ」

声のするほうを見ると、来栖がいた。ただ、彼の体は人間のもの

ではないように見えた。片目は炎のよう赤く光り、腕はまるで千年前から生えているような木の幹のように太い。肩幅は前回会った時の二倍くらいになつていて、足も腕と同じくらい太い。

「なん……で……どうしてッ……なんでお前が……ここにいるんだよッ……！」

「理由かあ……お前と雨宮を殺す、それだけだ」

俺は右目に意識を集中させる。

「意味わからんねえよ！ それになんだ！？ そのお前の身体は！ 一体何したつていうんだッ……」

「お前はこれから死ぬンだカンなあ……話してやろう」「お前は

明らかに前とは違う。来栖の身体もそうだが、雰囲気が違う。前は俺に対して敵意を持たず、ケンカを楽しんでいたようにも思えた。しかし、今は何か狂気的なモノに取り憑かれているような

「お前は眞実に近づきすぎた」

右目はしつかり機能している。数日前みたいな不具合もない。死に一步近づいたせいか、頭が上手く回り始める感触がした。

「眞実？ あのD・D計画というやつか……？」

「そうだ。プロジェクトとは一般人には触れちゃなれねえシロモノなわけなんだよ……それをお前は見ちまつたンだ」

「はッ……あれは全部本物だつたつてワケか……あの報告書は全部焼き払つたぞ」

三日前に公園で焚き火して、テストと一緒に燃やしたのだ。俺は偽りの余裕を見せながら、黒い手袋をポケットから出して両手にはめる。

「正解だな。そんなお前に問題だ。ロボット兵器より強い兵器つて何か分かるか？」

「核兵器か……？」

「あつてる事はあつてるんだが……そんなモンじゃねえ……正解はなあ……人間だよ、人間」

来栖はニヤリと顔が引き裂かれたような笑いを浮かべ、

「人間は考えることが出来る。ロボットは限界がある。コストも開発費も開発に時間もかかる。でも人間は違えんだ。普段は脳の半分以下の機能しか使ってねえんだ」

「いちいち遠まわしだな……そういうのは嫌いなんだ、俺」「人間の脳を最大に近い、出力を出して、人体改造やつたらどうなると思う？ それは一種の兵器になるんだぜ」

「人間兵器、とでも？」

「頭は良いんだな、黒木。俺もその一例、実験動物だ。薬品ヅケにされて、頭をバツクリ開かれてよお、変なものの脳みその中へ埋められて……。そのせいでこんな身体になつたつてワケだ」

あのD・D計画の紙に、『Homicide arms』って書いてあつたな。殺人兵器。人間が兵器と化すというワケか。

「あはははは……」

現実味がなき過ぎる現実でつい笑いがこぼれてしまった。おかしそぎるからな。

「狂つちまつたか？ 寅土には良い土産だろ？ …… それじゃ死んでくれ」

殺人的ともいえる圧倒的なスピード。一秒も経たないうちに懐に入られた。弾丸のごとき掌底が叩き込まれる。

「がつ、……ああああああああああああああああああ！」

五、六メートルほど吹き飛ばされた。一瞬呼吸が出来なかつた。肺の中の空氣を強制的に吐き出させられ、身体が酸素を欲しがつてあえいでいた。

（死ぬ……！ 絶対に、必ず、百パー死ぬ……！ くつそ！ 大通りに逃げて人目の多いところにツ……！）

「赤レンガには人は来ねえ。機械から脳に干渉する音波を出してんだ。お前は脳に変な電気信号送つてつから影響がないんだと」

「はあつ……はあつ……！」

「走れるのかあ、流石だな……けど簡単には殺さねえ！ 僕を敗者にさせたお前に地獄を味わわせてやる！」

「ば、バケモノが……！」

来栖は俺を苦しめるためにわざと遅く走っている。こいつ、執念深いタイプだつたか……！ 予測が外れた！

（チツ……今日は戦術が通用するような相手じゃない！ 次元が違います！ 今にもぶつ倒れそうだっていうのにツ……）

喰らつたのはたつた一撃なのだ。そこらのボクサーなんかでもまともに受けたら一発ノックアウトだろつ。

近くにあつた工事で使うであろう、一メートル弱の鉄骨を見つけた。それを手に取り横に薙ぐ。いくら力が強いとはいえ、肉体が鋼のように硬くなつたわけではあるまい。もともとは、人間なんだ！

「うつ、オおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

リリスによると、この手袋にも欠点はあるらしい。試作品のため壊れる可能性があること、出力できる運動量に限界があること。重さ一百キロの物が限界だという。それ以上は手袋が過負荷に耐えられなくなり、壊れてしまうといつ。

俺が横に薙いだ鉄骨は見事に来栖の身体に直撃し、鈍い音を響かせた。

「このまま潰れろオオおおおおおおおおおおおおおお！」

横に薙ぎ続ける。もう少しで彼の体が倉庫に激突しようかというとき、鉄骨の勢いが急に止まつた。まるで高速で走っていた車が急ブレーキをかけてしまつたかのようだ。

「俺は兵器なんだよ。こんなチャチなもんじゃ殺せねえっての。せめて銃一発くらいだつたら死ねるかもな」

彼は片手で止めていた。そしてそれを針金のように造作も無く曲げたのだ。

「……あ……」

俺の驚愕は声にならなかつた。俺の手元を鉄骨が離れ、アスファルトにズドン！ という轟音を立てた。しかし、この鉄骨だつて軽く百キロは超えているはずだ。それを結構な勢いで振り回したのだ。

ダンプが突っ込んだくらいの運動量はあるはずだ。

「もう遊びはおしまいだ。死ね」

大砲の弾のように俺のもとへと迫る来栖。俺の右目でも彼の体がかすれて見える。初撃は右のストレート右に大きく体を傾けてかわし、来栖の腕をへし折るためそこにチョップを加えるがあえなく回避された。

死の恐怖との闘い。俺にとつて来栖は今、死へと誘う死神と化している。一、三回でもあの攻撃を喰らえば即人肉ミンチ決定だ。切り抜けられない。

レ抜けられなし

「この今までの威勢はどうしたアー!?」

恐怖で足がすくみ、上手く身動きが取れなくてぎこちのない動きになつてゐる。暴力の嵐というよりは凶器の嵐と表現したほうが適切だ。頭を通過する高速の拳は耳に空を切る音を聞かせるほどに狂氣的な暴力だつた。

「だあッ！」

コンマ数秒のスキを見切り、来栖の手から逃れるべく足を潰しにいつたが、ホルスターに当たつただけで身体的ダメージは与えられなかつた。そして、そこから首への一撃へと、繋げる！

「だあつ！」

首へはヒットした。これで少しばかり倒れるはず

「けほつ……やつてくれんじゃねえか……やつぱお前、面白いわ」まるで効いていなかつた。いや、まるで、ではなく効いていな

のだろう

「スキだらけだせ！？」

ゴムのようにしなる蹴りが死角から放たれたが、ギリギリのタイミングで右手のガードが間に合つた。その代償に、右手の手袋が破

れて機能しなくなつた。

無駄な抵抗でも、バックスステップをして距離をとる。こんな距離、一秒足らずで縮められてしまうだろう。

「眞実に、近づいた……とか言つてたけど、その眞実つてお前のことなつかー？」

「違うな」

「じゃあなんだ!? 何が『眞実』なんだ!」

「死ぬやつに教えてももう得はねえんだよ！」

来栖は近くにあつた石ころをサッカーキックで蹴ると、亞音速で俺の右肩に突き刺さつた。

「があああああああああああああああつ！？」

「フン……もつと苦しめ」

俺はその場に倒れる。

もう、立つ氣力も起きない。見る氣力も起きない。聞く氣力も起きない。息をする氣力だつて失せてきた。肩から血がだらしなくこぼれていぐ。

「もう終わりでいいよな？」

「がつ……あがつ……」

「脳をぶちまけて死ね！」

来栖の足が俺の頭を踏み潰し、中身をぶちまけ なかつた。俺は聞こえなかつた。見えなかつた。分からなかつた。何が起こつたのか。

ダンツ！ ダンツ！ ダンツ！

「お前……キサマ……！」

恐る恐る顔を上げてみると、そこにいたのは銃を軍人のような綺麗なフォームで持つている、シャノンだつた。

「クソ……が……！ こんなところで……！」

来栖が大量の血を吐き出し、後ろに倒れた。俺は今の力で精一杯の力を振り絞つて、よろよろと立ち上がつた。

まず見えたのは来栖の死体。腹、左胸、肩、頭。そこに五ミリく

らこの小さな穴が開いていた。

「シャ、ノン？」

彼女の片手には来栖のホルスターに入っていた自動式拳銃が握られ、そのまま立ち尽くし、小さな、可愛らしい口から一言も発しようとせず、俺に田線をあわせることも無い。俺は危ない足取りで彼女のあとへと近づき、

「シャノン……危なかつたる？」

俺はそう囁いて、シャノンの頭を撫でた。感触なんか分からなかつたけど、温かかった。

「お前がどうしてここに来たかなんてどうでもいい。お前が無事であれば、それでいい。お前は女の子なんだ……」

「違うつ……あたしは……」

「違わない。お前はシャノン＝フォン＝フォスターだ。それ以下でも以上でもない」

ボロボロの体で、シャノンに血を付着させながらも、俺は続けた。「だから、もうこんなことには関わるな……」これは俺の問題だ。お前を巻き込む理由は何もない。だから、だから……－

「……何？」

「お前は俺が責任をもつて守つてみせる。師匠からのお願い事だからな……だから、もう泣いていいんだ……」

シャノンの顔は見えなかつたが、鼻息と息遣いが荒かつた。年端も行かぬたつた一人の少女が人を一人殺めたのだから、怖くて当然だ。

「うつ……わああああああああああああ！」

「帰つたら、みんなとハンバーグ食おつな……」

シャノンは子どものように泣き出し、俺はそれをなだめながら、彼女が泣きやんだころにむは意識を失っていた。

o

.....

卷之三

() いいのはどうだ……？ 俺は一体……

雨宮が倒されたときにシャノンがあの場にいて、それからの記憶

「うう？」田代は鼻をへこむ薬品の匂いにおどろく病院だ。

「俺……」「……」

「肩に小石が入っていたから治しておいたよ。雨宮のお弟子さん」

死者の湯和そにかな顔をした圍籠た
六
而江二阿ハ 痛ツ

「しみじみへりへり痛むだらうな。雨宮つゝては今度話をしみじみな

いか。それと絶対安静だよ？」

「西畠は三歳で死んだ。もううござら

と咳いて病室から出て行つたのだが

あの時の死体あれはまさしく師匠のも

あの時の死体あればまさしく師匠のものだ。死人は生き返るたりはしない。生きているなんて有り得ないのだ、アニメやマンガの世界じゃないのだから。

D・D計画の概要を知つたら殺されるとか来栖が言つていたような気がする。それにD・D計画に関して大事なことに気付いた気がするのだが……。しかし、あの時の記憶が曖昧で、ほとんど覚えていない。恐怖と殴られたせいか、上手く回つていたと思っていた脳があまり機能していなかつたようだ。

「頭が……痛い……」

能力使用によるフイードバックがまだ続いている。」の「」の
フイードバックの頭痛の時間が長くなつていつているような気がす
る。気のせいだと良いのだが。
「あれからどうぐらい経つた……？」

首を回すと、ベッドの横に俺の携帯がご丁寧にも置いてあつた。それを見ると、俺が倒れてから一日が経つていた。こりや、マズいな。凜に涙目で怒られて、紅音に耳元でピーピー言われるに違ない。

「俺がそいつ考えると、コソコソ。

「あ……」

「よひ。元気だつたか？」

病室に入ってきたのはシャノンだつた。一日前より顔がやつれて、疲れているように見える。つややかな金髪は今はぼさぼさで、目の中にはくまがあつた。彼女のその顔を垣間見て俺は、情けなくなつてしまつた。居候に心配かけせるような家主、ホントに情けない。「俺がいない間、飯食つたか？ 風呂もちゃんと入つたか？ 学校には遅刻してないよな？」

まるで俺が親じやないか。世話焼きもほびほびしないとな、と内心自分に対して呆れてしまつ。

「……はんぱーぐ、食べてないよ……学校には行けなかつた」

「どうして？」

「一日間、ここに来てたから……心配した……」

なんでそんな俺のことなんか気にしなくても良いだひつ、といつ思いを俺は口に出さなかつた。

「ごめんな。帰つたら、ハンバーグ作つてやるから……でも、なんでそんな俺のこと……」

「分かんない……分からなによつ！ なんだか、胸が苦しくてつ……！」

「それ以上言わせるのは、野暮というものだ。天真」

聞き覚えのある声が俺の名を呼んだ。死んだはずの人間が、師匠が、病室のドアに背を預けて、五体満足で立つていた。

「なん、で……」

「シャノン、このメモに書いてあるものをスーパーで買ってきてくれないか。ハンバーグの材料だ」

おそらく、彼女に聞かれてはマズい内容があるのだろう。彼女は師匠の気持ちを推し量つたように、

「う、うん……分かつた」

シャノンはすたすたという足取りで、出て行つた。俺は全ての考えを吹き飛ばされたような、そんな気分だった。

「なぜ、生きている？ という顔をしているな。答えてやろう。あれは義体、偽の人間の身体だ。俺は医者だからな、随分作るのに時間はかかつたが、ああいうのはできる」

「……聞きたいことが山ほど」

「D・D計画」

「あれは一体なんなんですか……！？ 殺人兵器だの、真実だの、『研究者』だの！ 意味が分からない！」

「良いか。これからお前に告げることは全て事実だ」

彼は俺の横に座り、

「D・D計画は人間を改造することから始まり、最終的には人間を、人間を殺すための人間を作り出すことが目的だ。よつは、人造人間製造計画だ」

「それはアンタが計画したのか……？」

「その通りだ。それとお前にも薄々分かつてきてるのであろう？」

「……」

「そうだ、思い出した。あの時、俺が気付いたことは……」

「そして、D・D計画で生み出されたのが、シャノンだ。D・D計画のレポートは俺が抜き忘れていた。そして、お前が狙われた理由はあのレポートを読んだことと、シャノンに近づいていたからだ。計画がバレてしまうことを『研究者』の連中は危惧していた」

俺は気付いたときには頭が沸騰しそうになつて、師匠の胸ぐらにに掴みかかつていた。

「さつきから黙つて聞いていれば！ なんだよ、アンタはシャノンが人間じやないとでも言つのかよ！？」

「似て非なる者、と言つた所か」

「シャノンは、この世でたった一人の女の子だろうが！ それをアンタは否定するのかよッ！」

「レポートにも書いてあつたろ？ あれは検体番号十一番だから、シャノンという名の個体は今までに十一体作られてきた」
彼の声はどこまでもどこまでも無感情で、まるで冬の海のように冷たかった。顔は生気が抜けたようだった。いつもの無表情とは違う、無表情だった。

「ふざけんな！ しかもそれはアンタらの問題だろ！ なんでシャノンが巻き込まれなきゃいけないんだよ！？」

「さっきも言つただろ？ 同じことを言わせるな……彼女はおそらく人類で始めての人造人間だ。しかも人を殺すためのな。殺しに関しては機械よりも上だから、戦争してゐる国が欲しがる。もつ少しすれば量産もできるようになる」

それで銃が使えたのか。しかし、だとしたらなぜ、普段はあんなに温厚なのだろうか。考えたくもないが、殺すことに特化しているのなら感情を持たないようにならせるべきだ。もし、万が一にも殺すことになると躊躇いを覚えてしまつては使い物にならないからだ。

「アンタ、そのロ・ロ計画とやらをやつてる『研究者』を抜けたとか言つてたけど……」

「あの男がそう言つたのか……ああ、俺はシャノンを連れてあそこから脱走した。おかげで今は逃亡生活を送るハメになつてしまつた」
これで分かつた。この男はどこまでも表情に出ない男だ。

「師匠、計画を立案したことを後悔してゐるんだな？」

「……アホ弟子が。誰がそんなことを言つた」

「シャノンに感情を植え付けたのはアンタなんだろ？ 世の中の常識も、箸の使い方を教えたのもアンタなんだろ？」

彼は俺から目を逸らした。計画の立案者なら、一番彼女のことをよく知つてゐるはずだ。そして、彼女を連れて逃げてゐる中で、色々なことを教えたのだろう。シャノンからはイサオから教えてもらつた、ということが度々あつた。この人は、シャノンにとつて父の

ような存在なのだろうか。

「なら、アンタはD・D計画なんていうアホらしこじとをやめようとしたつてことになる。その『研究者』つていつところは未だにそれをやつてるのか?」

「ああ。残った連中はみんなおかしくなり始めてる。人間を作る、などという行為は同じ人間には大きすぎたのだ」

「こまま計画が続けば、ホントの、シャノンの顔をした殺人兵器が生まれるつてことなんですか?」

「そうだな……」

ヒートアップした頭が冷えてきた。めちゃくちゃになりかけていた頭で状況を頭の中で整理していく。

「どうすれば……どうすれば、彼女を救えるんですか……?」

「お前一人が動いたところで、何も変わらん」

「やつてみなきや分からない! どうすれば計画を壊せるんだ!」

「面倒な弟子を持ったものだな……『研究者』のリーダーが全てを指示しているはずだ。そいつ以外は下働きに近いくらいで、計画の詳細を知らん。リーダーを潰して、やつらのアジトを焼き払つてしまえばなんとかなるのだが……」

「難しいんですねか……?」

「当然だ。バレてはいけないことだからな。警戒も並大抵ではあるまい……それでどうするつもりだ?」

「そのリーダーぶつ倒して計画も潰す」

「無理だな。組織というものは一枚岩ではない」

「リーダーを殺しても……俺は計画を潰してみせる」

「それはエゴだ。人殺しを正当化させようとしている」

「エゴでも構わねえ! ホントはアンタら大人の問題なんだ。シャノンが巻き込まれて良いわけがないんだ」

「俺はいつでも自分のために動いてる、独善者なんだ。」

「『都合主義も良いところだな、弟子よ……まあその覚悟には応じてやるうではないか』

師匠は一呼吸置いて、

「しかし、なぜそんなに守りたがる？　自らの命を危険にさらしてまですることか」

「俺がやりたいからです。同情しているだけなのかもしれない……だとしても俺は自分のやりたいことをやります。それに俺はシャノンの保護者みたいなもんですから、守るのは保護者の役目でしょう？」

「フン、」と師匠は鼻で笑つたが、それは嘲笑ではないだろ？

「それと、携帯の電話番号をください。いつでも連絡が取れるように」

「良いだろ？」

師匠の電話番号を交換すると、彼はおもむろに立ち上がり、

「一曰帰る。ではな」

「あ、師匠、もう一つ」

「なんだ」

「」の右田の義眼に関する資料を置いていってください。資料がなければ師匠の口からこれについて説明してください。分かつてないことが多いので」

彼は何も言わずに、懐からA4サイズの紙束を無造作に俺の横に置いて、病室から立ち去つた。

すれ違ひざまに、図つたようなタイミングで医師が入つてきた。
「雨宮は私の後輩なんだ。で、君の退院時期だけ……元気そうだったね。様子見て、明日退院で良いかな？」

「はい、ありがとうございます」

どうやら、早めに元の場所に帰れそうだ。でも、本当に帰るのはまだまだ先だ。シャノンの問題を解決しないといけないのだから。今日は安静に、との医者からの忠告なので動きたくても動けない身体をもてあましていた俺は師匠の置いていった資料に目を通すことにしたのだった。

「分かりにくい……」

専門用語が入りすぎていって、よく分からん。分かる」と要約すると、こいつのことになる。

「Jの義眼は、通常モードでの使用は何も問題にはならない。しかし、動体視力を上げるモードを使い続けると義眼自体の機能が停止する恐れがある。さらに一五分以上連續で使用した場合には脳に多大な損傷をもたらす可能性もある。なお、これは試作機のため、問題の前例が無く何が起こるかは一切不明である。

「うわあ……」

「Jの義眼の能力を好き勝手使いすぎたのか……？ 脳に損傷つて……。しかし、ポジティブにこれを捉えれば、まだまだ未知の可能性があるということにもなるのだが。

（どちらにしろ、なるべく使わないようにしていろってワケか……。大きい力には同等のリスクが付くんだな）

そうこうしているうちに外の景色は黒くなっていた。久しぶりの飯だ。病院食だが、腹が減っているから何でも美味しく感じるはず

「まずつ……」

明日は豪華な夕食にしようと決め込んで俺は床についた。

習慣とこいつものは良いのか恐ろしいのか分からぬ。いつものような時間で起きたのだが、着るべき制服が無かつたので少々、焦つてしまつたのだ。なんだか清々しくない朝だ。

昼ごろに全ての処理が終わり、病院を抜けることが出来た。寮に帰つたときは、いや、それはそのときに考えよう。凜の鬼のような恐ろしい形相が目に浮かぶ。

「ただいまー」

ギイ、重苦しい音を立てながら玄関を開く。一日前とほとんど部屋の状態は変わつておらず、汚かつたので掃除をすることにした。

小一時間掃除すると、あらかた片付いた。もういいかな、と思つて腰を下ろしたとき、玄関の扉が開く音がした。

「今日はちやんと学校行ったみたいだな

「テンシン……ちやんと戻ってきたんだ……みんな心配してたんだよ? リンだつて紅音だつて……!」

「お詫びと言っちゃなんだけど、今日は夕食に呑みほつ。サイカとかもひ」

「……分かった」

シャノンはなんだかむすつとしていて、でも、とても満足げな顔をしながらうなずいた。

「んじや、軽く買い物でも」

「軽く、ですって?」

「後ろから殺氣。活路は……見えない。

「おかえりなさい……あなたはまた、面倒なことに首を突っ込んだみたいね……!」

「ま、まあ、待て凜。これには事情があるんだ……しゃ、シャノンも見てることだし、R-18指定を受けるような暴力的なことはやめたほうが……」

「関係ないわーっ!」

活路を見出せず、一方的にせりあると思つたら、拳は飛んでこなかつた。

「つて思つたけど、もう良いわ。呆れちゃつた。バカは死んでも治らないつて言つし、ホントこつものことだもんね……じゃ、一つ約束して。それで許したげる」

「何だ?」

「必ず、この部屋に戻つてくれる」と。それだけ

「……分かったよ」

分からぬところも、優しい幼馴染である。でも、そこが凜の良いところもあるんだけどな。

「それと、凜。今日パーティーをやる予定なんだけど、来るか?」「良いけど……ここで?」

俺の部屋をなめ回すように見てから、冷たい目線で言い放つた。

「そ、掃除はしたんだぞ！ 料理に問題はないから。それに、大事なのは心なんだぞ！」

「……まあ良いけど。もう少ししゃっかり掃除しなさこよ。なんなら手伝つてあげても、良いけど？」

「凜よ、なぜそこでいつもの癖が出て、もじもじするんだ。そうしてくれると助かるな。あ、でも女の子には色々なやらなきやいけないことがあるんだろ？ 家に戻つてろよ。良いパーティーにすっからさ！」

「うーん……分かつたわ。期待してる……はあ」

「どうした、凜。ため息なんてついて」

「な、なんでもないわ！ ジャあねつ」

「お、おつ」

なんか拳動不審な感じの凜だった。どうしてだろ？ と思いつつ、パーティーに呼ぶメンバーにメールを出したのだった。

シャノンの要望から、ハンバーグパーティーなる変哲なモノをやることになった俺は下準備中であつた。この肉のカタマリを何個こねたんだ、俺……。そして、そのシャノンはとこうと、

「すう……」

気持ち良さそうにお昼寝中だった。それにしてもよく寝るなあ、シャノンのやつ。この頃寝不足だつたのかもしれないから、しょうがないが。俺のせいでもあるんだし。

「さて、これくらいで良いか……」

「…………わたしとしてはもう少し増やして欲しいところですが」

この怪しい登場の仕方はリリスしかいないだろ？ だつて俺、ちやんとドアロックしたぜ？

「お前は普通にドア本を押して入ることが出来ないのか。お前、通報されてもおかしくないぜ」

「……変態さんが何を言つのですか。黒木さんは変態なんですから通報されてもおかしくないですよ」

「そつくりそのまま返された！ 賴むから大人しくしてくれ……」

もう少しで皆来るはずだから」

下準備はこれで終了だ。あとはみんなが来てからハンバーグを焼けば終わりだ（サイドメニューは近くのスーパーのできているモノを買ってある）。

「兄さん兄さん、采女さん、が、采女さん、おはようおはよう

「はい、来て下されありがとうございました。シャノンは寝てる持ち帰りは出来ません」

義妹の雪崩のような質問攻めの処理には慣れているので処理は冷静に出来た。そして続いて、

!

殺すその野郎

「いやいやアリガトネ、こんな会二ンのよ二なバー テイーに呼んで
もらつちゃつて！ 気分ウハウハだぜ」

リ・ス

「わたし」と言わなくてよお！」

シャノンの顔を覗き

「……ああ、あの時の変態さんですね、そうですか一人はそんな関

「俺は変態じゃないよ、リリスさん？」

卷之二

「一体なんだ……俺とサイカの会話を見て面白いとでも思ったのか。
あれからリリスがニヤニヤしているように見えるのは気のせいだろ
うか……。」

「あなたが黒木紅音さんだね？」

出た、サイカの超紳士モードもとい、下心丸出しモード。人間とは怖いものだ、人格の豹変ができるのだから。

「うんそうだよ」

「天真にはいつも世話になつてゐるよ。あなたから見た天真はどうかな？」

「うーん、変態さんで、よく怪我する人」

「そりなんだ、じゃあ」

「オラ、テメエ兄がいる前で妹口説いてんじゃねえぞ」

「ほら、天真。後ろに天音さんが立つてゐるじゃないか。女性の前でのルールをわきまえたらどうなんだい？」

サイカにアイアンクローフを決めてゐるのに、彼は作り笑顔を崩していられない。なんてやつだ。

「おう、凜。お前で最後だ」

「あら、みんな早いのね。シャノンちゃん、寝起き？」

「テンシン、早くハンバーグ作りなさいよ、ド変態」

「ひい！ 寝起きシャノン！ 分かつた今作るから！」

「十秒以内ね」

「無理ですよ！？ シャノンさん料理したことねえだろ！」

「文句ある？ 口動かすより、手動かしなさいよ」

サイカと凜は啞然とし、リリスは彼女に興味津々なようで面白そうに見つめて、紅音は笑顔を崩していない。それはそうだろう、いつもの大らかで元気な大人しいシャノンとは様変わりしてゐるのだから。

「リンッ」

凜の胸へとダイブするシャノン。

「シャノンちゃん元気だつた？ まあ今日学校で会つたときよりは元気みたいね」

「うん」

おかしい、接する態度が変わつてゐるのは俺だけだつたりするのか。かなしい運命だな……そう思いつつ、俺はハンバーグを焼くのだった。

みんな少しづつではあるが、食べ物を持ってきてもらつたので、意外と満腹状態である。そして俺が苦労して作ったハンバーグ軍団のおよそ半数をシャノン一人で壊滅させたのだ。おやひしゃ。

「ふいー……食つた食つた

「紅音、お前はオヤジか

「そんなことないよー？」あ、そうだ兄さん、今日泊まつて行つても良い？」

「別に良いけど……はあ、俺の寝床は一体どこく……」

「廊下？」

笑いながらとんでもない」とを言つ妹だ。兄にたまには感謝の気持ちを見せてくれたつて……

「それか、一緒に寝る？」

「ば、バカか！？ お前ー！？」

「冗談だよ、冗談」

結構マジで焦つたぞ、今の思春期の男子には心臓に悪い冗談である。おそらく俺は今、顔真っ赤だらうな……自分でも分かるほどに体が熱い。

「でも泊まらせてもらつのはホントだよつ。パジャマも持つてきてるし」

「分かつたよ、好きにしろ」

「やつたー！ シャノンちゃん、一緒に寝よつ

「うううー……」

シャノンは困り果て、紅音はシャノンの頬に頬ずりをしていた。

片思いもいいところである。

「……では、兄妹水入らずなようなのでわたしたちは帰るとしますよ。ハンバーグ美味しかつたですよ」

「そう言つてくれるとありがたいな。それトリリス、あの黒い手袋の代えつて無いか？ 壊れちゃつてさ……無いと困るんだよな」

「それなら、これを」

彼女のポケットからあの最強の手袋が出てきた。四次元ポケット

が、リリスのポケットって。

「ありがと」

「どういたしまして」

「これで少しは自分の身を守れる。あの時はシャノンに救われたようなものだからな。自分の身は自分で守らないといけない。それは俺の問題なんだからな。誰も巻き込む必要は無い。」

「天真、ハンバーグ、中々美味かつたぜ。仕事にも……じゃない、勉強にも精が出そうだ」

「サイカが勉強なんかするわけないだろ」

「ちくしょう！」

凜は至つて冷静なような顔で、

「あんた、紅音ちゃんにセクハラするんじゃないわよ？」

「……」「したら……」「……」

「したら？」

「ぶツ殺す」

あれ？ 凜つて女の子だよね。すげく女の子が使っちゃいけないような言葉を吐いたような気がするのは俺だけかな。サイカは至つて冷静そうにしてるけど、あいつ、汗が噴出している。凜の死刑宣告は彼をも震え上がらせるほど威力があつたらしい。

「んじやなー」

「おやすみ、天真」

「さよなら、黒木さん」

「ああ、皿洗い……面倒だな……。食洗機に入れておこう。通販でつい勢いで買った無用の長物だと思つたがこんなときに役に立つとは、びっくりだ。」

「ふう……」

「すいぶん詰めてしまつたが、まあ大丈夫だろ。」

「兄さん、シャノンちゃんと一緒にお風呂入つてくるね」

「あいよー」

「行こう、シャノンちゃん！ 背中流してあげるよ。それが日本

の文化だからね、覚えておくんだよ？」

紅音は日本を勘違いしてゐる。彼女に日本は一体どうこいつ国だと思われているのだろうか。少し興味が湧いた。

「ふう……これで終わりか……」

食洗機のおかげで俺の労働量が三分の一くらいに減つたのだ。やはり文明の利器は使ってこそ実力を發揮するつてもんだ。食洗機、万歳。そんなこんなで休みついでに俺は少したそがれているのだが……

「シャノンちゃん、髪の毛綺麗だねー！　お手入れどうやつてしてるの？　答えてよー……えいっ

「つきやあ！　な、何を……」

「良い声を上げれるじやないかお嬢ちゃんぐひひひ……えいっえいっ」

「ふわつ！　ホントにやめつ……きやあ！」

バスルームの扉越しに聞こえる女の子の戯れでいる声に耳を傾けてしまつていて。それと紅音にあのセリフを覚えさせた奇人天才少女、出て来い。まあ予想ではあるのだが。

「どうか、これは拷問ですか？」

思春期真つ盛りの男子にこんな生殺しの刑ははつきり言つてきつすぎる。しかし、俺は決して変態ではない。そもそも思春期の男子は変態で結び付けることが間違つてゐるのだ。それに該当する人物は俺の頭の中では金髪のイケメン野郎しか浮かび上がってこない。

「そうだ……俺は変態じやない」

ふははは、女の子の戯れでいる声ごときで惑わされる俺ではない。何せ、俺は変態ではないのだからな。あ、今変態つて思つたやつが変態だからな。

つて俺は誰に語りかけてるんだ。といつか俺この十分くらいで何回変態つて思つたんだ？　こんなことしてると俺変態になっちゃいそうだ。今は変態ではないが。

「シャノンの好みのモノってなんだろ……休みの日に一緒に探してやろうかな……」

迷惑をかけたのは事実なのだから、ハンバーグ以外にもう一つ何かしてやらないとダメな気がする。よつはお詫びの品といつプレゼントだ。

「はあ……気が重い……」

未だにドア越しからキャッキャウフフな声が聞こえているがこの際、耳を傾けないことにした。明日から学校に行つていらしげので、その準備をすることにした。

前のように、バスタオル姿の彼女たちを見な「うにする」とを意識しながら部屋に入った。

「まあ、いつもの連中にはアイサツしてんだからいつものように登校すれば良いだけか……おおつと肩にはかけられないんだな。ちょっと違和感あるし……」

右肩には未だに包帯が巻かれてある。下手なことをするとまた傷口が開きますよ、ということなのだろう。銃弾に匹敵する速度で小石がめり込んだのだからしようがない。しばらくは大人しくしよう。

「兄さん、わたしたちお風呂上がったよ」

花柄の子どもっぽいパジャマを着て紅音がひょっこりと顔を出してきた。ホントに風呂上り直後らしく、顔が紅潮している。パジャマの少し小さいのか肌の露出が多い。

「何見つめてるの？ ここのパジャマはシャノンちゃんが貸してくれたの。少し小さめだけど、腹に背は変えられない、だっけ？」

「そこを変えてどうするんだ！？ お前……背に腹は変えられない、の間違いだ。常識だろ……お前、本当に博士号持つてるのか？」

「当然だよっ！ わたしの先生はりっちゃんなんだから！」

まさに予想通りであった。これだからあの掴めない天才少女は困るのだ。こちらも一応天才の部類に入る類まれなる才能の持ち主であるが。

「そのエセ個人教師からはすぐに離れる。どんな知識を与えられて

いるのか分かつたもんじゃないからな

「ええええええ……」

「文句言わない。つーか俺風呂入るから邪魔だ」

「人がせっかく呼びに来てあげたのに……兄さんのバカ！」
「いつからバカといわれたら、心が折れてしまつてもおかしくはないだろ。俺はそんなバカじやないのだ。しかし、今は紅音の捨てセリフかと思ったのだが、中々この部屋から出て行こうとしたしない。なぜだろ。」

「なんだ、紅音。まだ何か用があるのか？」

「い、いや別になんでも……」

「そつか。じゃさつさと寝るよ」

俺なんとなくが頭をわしゃわしゃしてやると、

「うん！」

と、元気よく返事をした。まるでホントに犬のようだ。しつぽがあつたら、こいつは二十四時間しつぽを振り続けているに違いないと思つたのだつた。

ああ、肩に湯をかけないよつとするのめんどくせえ……でもまあ、やらなきややらないで痛い目を見るので仕方なくやつてているのだが。そして、俺はシャワーと激しく格闘し できるだけ肩にかけないようにシャワーを浴びただけなのだが たつた今バスルームから出て着替えたところだ。久しぶりにこの寮で身体洗つた気がするな。朝ではないが、なんだか清々しい。

リビングでテレビを見ていたシャノン、

「シャノン、次の休みの日一緒に出かけないか？ なんか好きなもの買つてやるからさ」

「……そ、そこまで言つのならついて行く

「そつか」

シャノンの口調がなんだかおぼつかない気がした。まあ、気にす

ることはない。そう思い、俺は自分の部屋に戻つた。

今までの疲れがどつと出たのか、睡魔がいつも以上に激しく襲つ

てきてい、俺はそのままベッドに倒れこんでしまった。

HITな解答（前書き）

次で終わりです。

「……せん……きて!」
誰かに起こされてるのか。まあそんなことは万が一にあり得はないのでこれは夢だろ。だったらもう少し楽しませてもらおつではないか。

「ねえ! ねえってば! 朝ごはん!」

お腹の辺りに柔らかく、そして少し温かい軽いものが置かれた。夢にしてはすいぶんリアルだな……。

「おーい! 聞こえてるのー? じうなつたら……」
おお。

「つづやー!」

「ーーーン。頭の中除夜の鐘が鳴らされているような感覚だ。そして、鈍い痛み。もしかして夢じやなかつたりするのか。

「痛てつ! ? あ、紅音! ? なぜここに! ? といつかまづは俺の上から降りろ!」

馬乗りという状態になつていた。これはアレだな、シャノンが来て変態扱いされるパターンだな。しかし、それは予想に過ぎなかつたのか、扉が動くことはなかつたので安堵した。

「で、お前はなぜ俺の上から立ち退こうとしないのか。このままだと遅刻してしまうんですがあと俺は一応まだケガ人なんだが」「なかなか起きなかつたから罰ゲーム

「降りろ」

「いやだ」

「降りろ」

「いやだつ

「降りろつたら降りろ!」

「いやだつたらいやだ!」

不毛だ。俺たちはいい年にしてなんてくだらないことで争つてい

るのか、と俺は心の中で大きなため息をついた。ともかく寝起きのシャノンが来るという危機は一応去ったので少しさは気が軽いのだが、「テンシン……あともう少しでガツコウ行く時間……朝」はんつてまた?「

慢心をしてはいけないという事が改めて分かつた瞬間である。油断した瞬間に図つたかのようなタイミングで出てきた寝起きシャノン。これはイヤな予感……

「テンシン? ええと……アンタ……あ、朝までアカネと……?」

罵倒されるかと思ったが、なんだかシャノンらしくないな。顔真っ赤にしてるし。これはこれで調子が狂うかもしない。付け足しておくと俺は決してMでも変態でもない。

「何を勘違いしてるんだ。なんだ、熱もあるのか?」

「そんなワケない! ただ目の前で不純異性交遊が繰り広げられていたから……」

「そんなのやつてないからな? といつか紅音、お前いい加減降りろ。苦しくなつてきた」

シャノンは少し焦った様子で俺の部屋の扉をバタンと閉めて、出て行つてしまつた。ホント、どうしたのだろうか。いつもの寝起きらしくない。毎日彼女の寝起きで精神的ダメージを毎朝受けたのがウソのようだ。

「じょうがないなあ……朝、ほんまどうするの?」

ようやく分かつてくれたようで彼女は俺のお腹の上から降りてくれた。俺は制服を出しつつ、

「コンビニでパンでも買って来い。でもまあ、どうせ金よこせって言つてくるんだろ? これやるからシャノンと一緒になんか買って学校行け」

「兄さんなんか冷たいー」

紅音はむすつとしたようで頬をざぶぐりを頬張つたリストのようこぶらませている。

「良いか。ここは一応男子寮なんだ。男子寮から女の子が出てきた

ら色々面倒なことになるだらうが」「良いじゃん別に」

「お前はもう少し兄を大切にしような……」「

はあい、と彼女は軽く受け流すと、話を切り替えた。

「そういえば、シャノンちゃんつてさ、なんだか会つたときより女の子っぽくなつてきてるよね……ほらさ、会つたばつかの時はちよつととんがつてたじゃない?」

「ん……まあそうだな。ただ寝起きはすこいぞ……」

「まったく……兄さんはそのことばかりしか言わないんだから。シャノンちゃんの他の所も見てあげるんだよ?」

「お前は親かつての。分かつたよ、今度からはそうする。だから、もう学校行け。そうしねえと遅刻するぞ。お前もお前でシャノンを困らせるなよ」「

「分かつた!」

紅音はひまわりが咲いたのよつた笑顔を俺に向か、扉を閉じた。少し紅音も成長したのかなと思いつつ、時計を見ると、ホームルーム開始まであと五分。世界最速をたたき出す勢いで俺は身支度を始めた。

俺は寮の部屋の鍵を閉めつつ、最近のことを思い返す。確かに来栖にこの肩の傷をつけられたときに俺はシャノンに対しても何か重要なことをいつた気がするのだが、どうも思い出せないのだ。

(俺、なんて言つたんだろ……シャノンに聞いてみるか……)

傷口が開かないギリギリの速度で走つて門に入る。息を切らしながら腕時計を見ると、ホームルーム開始まで残り一分というところでゴールした。しかし、まだ空席がある。今日は休みが多いのか?

「ぜえ……ぜえ……」

「お、天真。おはよ……つて、どうしたんだ、そんな息切らして」「

「ぜえ……そういうお前はなぜそんなに余裕ぶつこいてんだ……もうすぐホームルームだろ……」

「ホームルーム開始五分前だからな、まだまだ余裕だぜ」

「は？ 一分前じゃなくて？」

「もしかして時計がずれていてそれで来ちゃつたりした感じですか

ー？ 黒木クン？」

俺の腕時計は八時三十分を指している。一方、学校の壁掛け式の時計は八時二十五分を指していた。要するに、俺は完璧に勘違いをしていたということらしい。

俺は窓側の席へ行き、机に突つ伏した。

「チクショウ……無駄骨かよ……」

「まあ、そう落ち込むなつて。紅音ちゃんと一緒に一夜過ごせただけでも良いだろ？」

「うるせえ、変態……今日は今日で調子狂つたぜ……」

「キサマ、一体何があつたって言うんだ！？ このリア充め！」

サイカが叫んだところで教師が入ってきたため、この話は一旦切ることにした。

（この腕時計誰がずらしたんだろう……）

「こう事は俺の部屋の時計もずれていたのか。なんていやらしいことをするやつなんだ、やつた奴は。

シャノンは凜としゃべっているし、俺は今とかくやる」とはないので、寝ることにした。

休み時間にはクラスメイトから定番のじうじして入院したの、みたいな質問が俺に向かつて一日中飛んできたので懇切丁寧に答えてやると、ふーん、と言つて去つて行つたのだった。いや、事実をそのまま話したわけじゃない。

バイトの作業中に釘が肩に入った、と言つておいたのだ。来栖のことは話してもいいのだが、どうせ信じる奴はないだろ？ し、何よりも俺が痛い子として見られるような気がするのでやめておいた。まあ、言つてしまえば特に変わったことはない、だ。授業して、居眠りこいて、教師にぶつ叩かれて、何ら変わりない。それこそ、来栖との戦いがウソだつたよつても感じ取れるぐらい平和な俺の日常を過ごしていた。

そんなこんなでいつの間にか週末になつていた。

「シャノン、どこに行きたいとこあるか？ 今日はお前に対するお詫びでもあるから、ワガママなら聞いてやるよ」

今日の彼女の服装は白いワンピースである。ワンピース以外持つていなかとかとこつシッ ロリせりの際控えることにした。前の水色のより涼しそうで、夏が近づいていることを示しているようだ。

「……遊園地つていうところに行きたい……」

この言いようは遊園地には未だに言つたことがないという事が、箱入り娘だつたりするのか。

「オーケー。お安い御用だぜ。こんなこともあるうかと今日は少し貯金を崩したんだ！ ジゃあ行くか！」

「うん！」

海沿いのほうの遊園地、『横浜コスモワールド』が有名なのでそこに連れて行くことにした。シャノンにはこの時を楽しんでもらいたかったから。

「で、なんでお前がいる？」

「いやーなんでって言われてもちょっとバイトをしてるだけなんだけど……そんな見つめるなよ」

「睨んでるだけだバカ野郎」

金髪イケメン野郎がなぜか遊園地で風船配りをしていた。こりしていると、なんか近くから目線を感じるぞ。くそ、これだからイケメンは……。

「あー、そうだ。天音さんと紅音ひやんも見かけたぞ。あえて声はかけなかつたけど」

「見つかつたらめんじゃくそくな一人だな……周りに気をつけて歩かないと……」

「別に警戒する必要はないんじやない？」

シャノンは凜になつていているから、逆に会いたいぐらいなのだろ

う。

「見つかつたら見つかつたで面倒なんだ。まあ、シャノンが気にする必要はねえや」

「一ついいか

サイカの口調が変わる。そして神妙な面持ちで俺を見つめ、「なんだ」

「お前、まさかシャノンちゃんとデートだつたりしたりするのか?」「まさか。俺はそんなつもりじゃない」

「そういうイベントに限つて女の子のほうは、『これつてデートつて思つていいんだよね? 良いよね?』みたいな気持ちになつていいのが定石なのだ!」

「はいはい熱弁本当にありがとうございました。それと、お前、妄想と現実にいい加減境目をつける。じゃあな」

俺は後ろでなにやら喚いているサイカに別れを告げると、俺たちは面白そうなアトラクションがないか受付で貰つたマップを頼り園内を歩いた。

それで、最初が、

「きやあああああああ……」

ざぶーん。

こここの遊園地のシンボルにして最大の絶叫アトラクション『ザ・スプラッシュ』に乗りたいとシャノンが言つたのだ。名の通り、このジェットコースターのレールの最後には池があり、車両がその中に突っ込むと、盛大に水しぶきが上がるというコンセプトの上で作られているらしい。

というか最初から本番行きますか。

「うわあああ……」

「うわあ……」

田を輝かせているシャノンと氣だるそうにため息をついている俺であった。ジェットコースターが苦手というわけでもない。ただ、このあととてもイヤ予感がするのだ。しかも大抵こういう予感がし

たときにはそれが当たるという謎のジンクスがあるのでつと怖い。

「行こつ！」

「分かったよ！だから走るなつて。転ぶぞ…」

シャノンのあとをついていき、アトラクションの列に並ぶのだった。

最初に『ザ・スプラッシュ』の列に並んでから、三十分後だ。

「ああ、楽しかった！もう一回！」

あの『ザ・スプラッシュ』を乗り終え、出口に出て。ワンデーパスというのを買っていて全てのアトラクションが乗り放題なのであるのだから、出し惜しみをする必要は全く持つてないのだが、「いい加減にしろ、次で十四回目だぞ？流石に頭がくらくらしてきたるんだ……他のアトラクションも行かないか？」

「こじが良いのつ！」

シャノンの髪の毛はこのアトラクションの水しづきの影響でシャワーを浴びたあとのようにずぶ濡れだった。

「分かった。こじでいいから、一回休憩しよう。それじゃないと吐いちまいそうだ……シャノンはよく大丈夫だな……」

「テンシンつて虚弱」

なんとでも罵ればいいさ。はははは、と心の中で高笑いしたとき、

「あら、天真？来てたんだ。シャノンちゃんも一緒にみたいね」

「兄さんとシャノンちゃんがデートしてるー！」

アレだ、これはさつさと話を切り上げて退散したほうが良さそうだ。ああ、俺って今日ついてないな……占いが見たい。今日の運勢はなんだつたのだろうか。しかし、俺がいつも見ている占いはここ一週間やっていない。沙雪さん、一体どこで何をしているのだろうか。

「天真たちもこのアトラクションに乗るの？ どうせなら一緒に乗りましたよ！ 良いわ、これ名案じやない！」

「あたし、これ乗りたい！」

「じゃあ、わたしシャノンちゃんと一緒に乗るーー。」

「じゃ、じゃあ、わたしは天真のとなりになるつてことで良いくの……？」

「そしていつものクセである手にじりを始めた。どんどん話が俺を

介さずに入っている。

「話を勝手に進めるな。誰も乗るとは言つてな……」

「さ、行きましょ」

妙に上機嫌な凜に首根っこをつかまれてやや引きずられるような状態で列に並ばされるハメになってしまった。もう抵抗する気力すら起きなかつたよ。ああ、まさか遊園地がこんなにつらことは思わなかつた……。

結局、追加で一回乗せられた。

流石にもう限界になつてきただので今はみんなで休憩中である。俺はテーブルに突つ伏し、

「若いな……シャノンは……」

そんなことをぼやいた。

「天真だつてまだ十分若いでしょうがつ。何おじこさんじみた」と言つてんの」

「そや。テンシンの気持ちの問題。あたしは至つて普通の……」

そう言つた瞬間、彼女の顔が少し曇つた。なぜだろ？ とても悲しげに見える。

「ううん。なんでもない。気にしないで……だからもう一回乗らつ

！」

「まだ乗るのか！？ 流石に他のアトラクションに行いつ……もつ限界だ……そうだな、観覧車なんかどうだ？」

「カンランシャ？ あの大きな円のこと？」

「そうだ。あれに乗らう

シャノンは少し考えているようだ。というか十六回も乗つてあきないほうがおかしい。それに凜たちは一回で十分だとい痛げな顔をしている。

「わかった。カンランシャに行く」

「おう！ じゃあ、そうとなれば行くぞ！」

「兄さん、何でそんな嬉しそうなの……？」

凜と紅音は訝しげな目で俺を見てきているがそんなことは気にしない。ついに水浴びジェットコースター地獄から解放されるのだから！

俺は歩きながら思う。今の俺の状態は両手に花なのか、ど。一人は妹であるし、一人は幼馴染であるし、一人は預かり少女であるし、なんだか不思議な境遇だな、と考える。

「四名様ですか？」

「はい」

愛想の良いおつちやんが観覧車の扉を開いて俺たちを乗せてくれた。観覧車は俺たちを上へ上へともつて行く。

横浜を高いところから一望できる。右を向けば横浜の町、左を向けば海が見える。俺は純粹にこの景色を美しいと思った。シャノンはそれを子どものように見つめている。

「天真、何笑つてるの？」

「いや、なんでも……」

六月は日が暮れるのが遅いな。こうしているといつまでも遊んでいたくなる。こうこうことを考へるつてことは俺も人のことは言えないぐらい子どもだな。

「わたしたち、この遊園地の後行くところがあるから、これ降りたら帰るわね」

「おう。シャノン俺たちはこのあとどうするよ？」

「つーん……あとで言つ」

シャノンもシャノンなりにリクエストがあるようで助かる。俺はあんまり女の子を引っ張つていけるほど気配りが出来ないから、本

当に助かる。

観覧車は一番上まで行くと降下を始める。景色を見ているところにか地上に着いていた。

「じゃ、わたしたちはこれで

「じゃあね、兄さん」

「おひ

彼女達が遊園地に出て行った後、シャノンは考へついたよつで、「ハンバーグ食べたい」

「またか……まあワガママ聞くつて言つたんだ。連れて行つてやるよ」
彼女はとても満足そうな顔をしている。シャノンのいつも顔を見ているだけでも結構幸せかもしない。ハンバーグを食べに行くため、俺たちは遊園地を出る。

「らんらんらん……」

シャノンが鼻歌を歌つている。そこまでハンバーグが好きなのか。それで、タクシーなどというセレブが使うよつな乗り物には乗れないのでは歩きで行くことにした。ただ、イヤな予感がした。さつき感じたモノよりももつと悪質で、もつと気持ちの悪いモノ。

ふつと気が付いて横を見ると、さつきまで俺の横を歩いていた少女の姿は既に無く、後ろを見た瞬間には俺は、白いしめつたハンカチで、口をふさがれて、意識を失つていた。

あれ、ここどこだ？ 俺は一体何をしていたんだっけ……。ああそうだ、シャノンと遊園地に行つて、ハンバーグ食べに行こうとしてたんだっけ……。意識が朦朧としながらも、覚醒を始める、寝起きのような感覚。

手が動かない。足も、目も右田が暗くて見えない。田もほとんど見えていない。

「うあ……」

「うう」とする田で天井を見た限り、車の中のようだ。移動しているのも分かる。

「意識を回復したようです」

「もう一回眠らせるか？」

片方の声はすごく、親しくて聞き馴染んだ声だった。もう片方は師匠のような渋い声だ。この車にいる人間なのか？ で、これって拉致だつたりするのか。

「その必要はありません。なぜなら」

「聞き馴染んだ声が言った。

「アンタはここで死ぬからだ」

「バン！ バン！」と乾いた甲高い音が一回鳴り響いた。直後、喉がはち切れんばかりの絶叫がした。まさか今の音って……銃声か？ 最近聞いたことのある銃声に非常に似てたというか、そのままだつた。

「天真、しつかりしろよ、今降ろしてやるからな！」
車はゆっくりと減速し、やがて動きを止めた。

「世話焼きもほどほどにしうつての。後々処理が面倒じゃないか……まあ無事なんだし、いつか」「だ……れだ……」

脳内と耳だけ働いて、見たものの処理が出来ていない。こいつ、誰だつて……

「どんだけ強いクスリで眠らせたんだ、このおっさん」「もしかして……サイカか……？」

金髪のイケメン。その顔がはつきりとしてくる。彼が俺の身体の拘束を解いてくれたようで、手も足も自由になつた。助手席にもたれるようにして座つて、死んだ中年の男は、俺たちを観覧車に乗せてくれたあの人だつた。

「一体、俺は何を……」

「身体が楽になつてきた。」

「良いが、耳の穴かっぽじつてよく聞けよ。俺は『研究者』の下働きのようなモンでな、お前のある場所まで運ぶように頼まれてきたんだ」

「何言つてんだお前……？」

「んで、俺がたまたま居合させたから助けたワケなんだが……アンダスタン?」

「いや、急にそんなこと言われても頭の処理が追いつかねえっての。しかもお前、なんでこんな危ない仕事してんだ? それに俺はどうやってここに運び込まれた? しかもこの車はなんだ?」

頭の処理がホントに追いついていない。サイカが俺を助けてくれたのまでは、理解が出来た。しかし、なぜ彼がこんな裏社会みたいなところに首を突っ込んでおかつ、なんであんなにも簡単に銃が使えるんだ。

「俺は自分で食つていけるように万屋 要は何でも屋だ。それをやつてる。それで高額報酬の仕事が流れてきたもんだからつい、ね。寮を出て行つたのも何でも屋をやる」とになったのが原因だ

「そういえば、シャノンは……?」

「……おそれく、再調整つてのを受けてるはずだ。詳しくはよく知らないけど、相当ヤバいことだらうな」

「連れて行け」

自分でびつくりするぐらい、低い声で俺は言った。

「どこに?」

「その『研究者』の所に」

「料金高いよ?」

「構わねえ」

「あいよ

サイカがなぜこの歳で運転が出来るのかはあえて突っ込まないでおくことにしよう。そんなことよりもシャノンが心配なのだから。

その『研究者』たちがいる場所は赤レンガ倉庫の地下にあるのだ
といふ。サイカ自身確認はしていないが、そこが指定された場所ら
しい。

「サイカ、そういえばお前なんで赤レンガに近づけるんだ？ 变な
電波が流れて近寄れないとか聞いたけど……」

「ああ、それなら」

彼は胸のポケットのあたりからトランシーバーのようなものを取
り出した。

「これがその変な電波つてのを妨害してくれるらしいんだ。『研究
者』の連中からの支給品だ。それにしても……皮肉なモンだよな、
仕事相手を裏切るんだぜ？ 仕事が減らなきやいいけどな……」

彼はトランシーバー型の電波妨害機をしまつて、今度は物騒なに
おいのする黒い塊を取り出した。

「これくらいは持つておけよ。もしものときだ」

拳銃を渡された。ずつしりと重く、モデルガンとは全く違う。サ
イカからおおまかなレクチャーを受け、俺はそれをポケットに深く
ねじ込んだ。

「もしもの時が来ないことを切に願うよ

「そうだな、こんなものはできるだけ使いたくない。人は殺したく
はない」

偽善かもしれない。独善かもしれない。だとしても俺はシャノン
を、たつた一人の人間を助けてあげたかつた。

「じゃあ、俺は警備を手薄にさせる。天真はシャノンちゃんを救つ
てくれ。俺はあんまあの子と面識ないからな……お前が助けに
行つたほうが良い

「陽動つてことか？」

「まあな……大丈夫、死にやしないさ」

「お互に死なないように気をつけようぜ」

「オーケー。じゃあ、行つて來い、主人公」

サイカは車から勢いよく飛び出し、俺の前から立ち去った。来栖のようないい加減にしろよ……！」

来栖に殺されかけたとき、彼は赤レンガ周辺には特殊な電波が使われているとか言つたが、その中心地が赤レンガ自体だとは思わなかつた。俺はてつくり来栖が何らかの機材で電波を撒いているのかと勘違いしていたようだ。

静かだ。水を打つたように静かだ。俺の足音以外には何も聞こえない。普段は人々の喧騒であふれかえつているここも今となつては違つて見えた。

「誘われてんのか……」

さつきから上手く行き過ぎてる。サイカが陽動してくれているとはいえ、一度は殺されかけ、『D・D計画』を知つてゐる人間だ。こんなに狙われていないのはおかしい。

物音一つ立てていない赤レンガに入る。しばらく進むと、いかにも怪しいエレベーターがあつた。それはどこかの工場にでもありそうな一人乗りのエレベーターというか、リフトだ。

「乗るつきやない……」

それに乗ると、ひとりでに下がつていつた。ゆっくりと下がつてゆく。時間をもつたいぶつてゐるようにも感じられた。焦りが募る。しかし焦ろうにも下が見えないのだから飛び降りられないのだ。だから、余計に焦るが募るのだ。

（もつと速く動かないのかよッ……！？ しかも再調整つてなんだよ……！ いい加減にしろよ……！）

ゴトーン、と揺れてやつとリフトが止まる。先に見えたものは、無数のカプセルと気持ち悪い色の液体。いかにも生体研究所という雰囲気の場所だ。その液体の中には人間の脳だけ切り出したものや、動物などが入つてゐる。そこにいるだけで寒気を感じるほどに不気味。リフトから降りて第一歩を踏み出した。そこで周囲を見回すと、

「なんだよ……これ……」

声に出てしまつほど驚愕だった。ダストシユート、だつたのだろうか。そこからは腹を空かした子どもがたらすよだれのように血がだらだらと溢れ出てきていた。もう少し奥に進む。人の気配は感じ取れない。ただそこにあるのは不気味さだけ。

「あ……があつ……タスケテ、シニタクナイ……！」

俺は急に足をつかれた。そこには右足の無い、白衣を赤色に染めた男が俺の足を神に祈るように、掴んでいた。男の顔はひどくやつれ、生気がどんな精神疾患を持った人より、生気がなかつた。そして手はまるでがい骨の様に細かつた。俺は恐怖で声を上げることすらままならなかつた。

「いやだ……！ イ……ヤダ……。死にたくナ……イ」

男の手から力が抜ける。彼は死を拒みながら死んでいった。最後までもがきながら、苦しそうにして。そうして、俺は人の死を始めて目の当たりにした。

「あ……あつ……」

俺の喉から漏れた声だつた。俺は男に手を合わせることすら出来ず、前へと進んだ。いや、それを余儀なくされた。あんな絶望しか見えていなさそうな顔つきを持った人は初めてだつたのだ。

こんな生々しいところにもう居たくなどなかつた。世の中の全ての悪、全ての死、全ての絶望、生きることがイヤになるほどの光景だ。師匠がおかしくなりつつある、と言つたのはこここの設備や身体などではなく、人間の精神だつた。たつた今、分かつた気がする。絶望だつた。

「黒木くん……」

体が震えた。ここにいる者は全員イカれているやつばかりのよくな気がするからだ。しかし、俺が感じたのは恐怖ではなく、憤りと絶望だつた。

「沙雪さん……？ ビウしてこんなところ……」

「お話してあげよつか？」

田の前に沙雪さんが白衣姿で立つていた。彼女から発せられる、

前にも一度だけ感じたことのある圧倒的な気迫、圧倒的な恐怖。それらが今の沙雪さんから感じられた。

「I.Iの名前は知ってるよね？ つていうかレポート見たんだよね

……分かるはずだよ？」

「……『研究者』だろ？」

「大正解ー！ そしてこここの研究者……ようはわたしの同胞だね。で、わたしがこここのリーダーってワケ。研究者も結構いたんだけどさあ、全員精神疾患で壊れちゃった」

壊れた。まさにさつき見たような男が何人も何人もいたっていうのか。

「改造した来栖がいるところにおびき寄せたのもわたし。よくもまあ、まんまと騙してくれたよねえ……大助かりだけど、来栖を殺したね……？」

まあ、いいけどさ、と彼女は付けたし、話を続ける。

「いやいや、まさか兩宮のヤツ、わたしのレポートと未調整の十二号を持って行くなんてねー……予想もしなかったよ。しかも十一号のヤツ、わたしのこと嫌つてたんだよね……どうしてだと思つ？」

十一号。おそらくシャノンのことだろう。シャノンが沙雪さんに苦手意識を持っていたのは本能的だつたのだろう。今の口調からするとシャノンの扱いは決して良くなかったはずだ。

「それで、その師匠は……？」

俺が問うと、彼女は口が裂けたように笑みを浮かべた。彼女の心の奥にある嗜虐心が見えるような笑顔だつた。

「アハハハハハハハ、さあ？ どうかな！？」

「シャノンは……？」

「調整中だよ」

「調整つてなんだよ！ さつきから人を道具みたいに使いやがつて

！」

血が頭に上る。拳銃の撃鉄を起こされたように、俺の中で感情のスイッチが入つた。

「レポートと来栖に聞いたでしょ？ アレは元々殺戮兵器なんだよ。ああいういカプセルの中で記憶を植えつけたり、身体能力を高めたりしなきゃいけないんだ、何度もテストした上でね」

彼女はいかにも楽しそうに続ける。

「それを雨宮がちょうど十一号が不安定な時期にカプセルを壊して持つていつたんだ！ わたしの所持物なのにね」

「それで、再調整つてのをやってシャノンを殺戮人造人間に戻そうつてのか……！？」

「うん、そうだよ。ああ、それと君の脳を銃弾でぶちまけようとしたのはわたしだよ。スナイパーライフル使ったせいで右肩をすこしが我しちゃつたんだよね……」

彼女に罪悪感の欠片も無かつた。それがさも当然のことのように、何の躊躇も無く答えたのだ。やはりここの人間は壊れている。おかしくなつていてる。

「それで、あのがただの殺人形に戻れば、感情も無くなる、今までの記憶も無くなる。わたしのいう事だけを聞く人形になるの。アレにとつてそれが幸せなんじゃないの？」

俺は意識しないうちに右田のモードを変え、両手には黒い手袋をはめていた。

「ふざけんな！ アンタら大人の問題にシャノンを巻き込んでんじやねえ！」

「これはアレの問題もあるんだけどな」

「アンタがここリーダーなんだろ？ 他に人はもういないんだろ？ アンタを殺してここを壊せば、シャノンは何もされずに済むはずだ！」

「できるものなら、だけどね」

「活路を見つけてやる！ アンタを殺してでも……！」

「それともう少し良いことを教えてあげようかな？」

沙雪さんは後ろにあつた機械で作つた巨大な腕を自分の腕にはめた。それは大きなスキであり、先攻を決めるチャンスだった。俺は

すかさず、彼女の顔面にストレーントを叩き込む。

しかし、それはその巨大な腕によってふさがれた。鉄骨をも持ち上げられるほどの力で殴ったのだ。鉄の塊ごとき潰れてもおかしくは無いはずなのだが……。

「ツ！？」

「まあ焦らずに聞いてよ……君の義妹さん、紅音ちゃんだけ？あの子の首に巻いてあるチョーカーにはちょっとした爆弾が仕掛けたあるんだ」

「ガセで精神的に搖さぶるつもりか？」

「ガセと見せかけて実はガセじゃないんだよね、この情報。まあ爆破範囲は狭いから彼女の首が飛ぶくらいの爆弾だけど。どうする？」
「このまま大人しく殺されてくれるかな？」

「つるさいんだよ！」

もう一度、力いつぱい巨大な機械の腕を殴る。ギイン！ という音だけがして、機械の腕にはへこみ一つ、傷一つもついてはいなかつた。紅音の首に巻いていたチョーカー。それが爆弾になつている？ ふざけやがつて。

「戦いながら、もう少し雑談でもしようか。黒木くん？」

「紅音の爆弾の起爆条件は？」

「わたしが持つていてるこのスイッチを押すこと」

白衣の内側に、飛行機の操縦桿のような形にボタンをつけたような形のものがあつた。

どうすればいい……どうすれば、シャノンと紅音、二人とも助けられるんだ。 目の前の相手を「ロシテしまえば問題ない。

「まあ、話は変わるけど……あの人造人間は今まで十一体作られてきたんだ。でもどれも失敗した……動かない物、身体の一部が機能してない物、目から腕が生えた物……いっぱいあつたけどやつと成功したんだ。いい加減良いでしょ？」

「物じやねえって言つてんだろ！ アイツはシャノン＝フォン＝フォスターっていう世界でたつた一人の女の子だ！」

「失敗作は十一体いるけど？ ああ、それとここの人間達が壊れた理由を教えてあげるね……」

彼女はまるで怪談を語るかのように話していた。

「関東地方の行方不明の事件っていうのはよくわたしたち『研究者』が関わっているんだ。人間のサンプルを取るためにね」

「サンプル……？」

「生きた人間で実験する。一番重要だったのは感情を持たせないと、だつたからね。雨宮も賛同したんだ。麻酔も打たずに、脳を開いてみたり、腕を切り離してみたり……そんなことをやらせていたらどんどん壊れていったんだよ」

「なんなんだよ！ いい加減にしやがれ、このつ……！」

競馬の馬のように飛んでいるに近い走りで距離を詰める。今度は最初からあの機械の腕に当てる！

「その手袋、面白そうだね。どうやって作ってるんだろう？ わたしも科学者だから気になるんだよねえ……」

ギン！ と金属が奏でる高い音が気味悪い空間に響いた。へこみもしなければ、傷もつかない。どうなっているんだ？

「これはかわせるかなあ？」

突如、機械の腕から光が瞬いた。俺は本能的にその光線を横に転がって避ける。そしてその光線が当たったところは、溶けていた。

「ビーム兵器だよ？ アニメみたいでしょ。これ、何でも溶かすんだ。このアーム名づけてビームガン・アーム！ かつこいいよね？」

「はあっ……はあっ……」

「それにしても今のビームをかわすとはね……来栖の言つたとおり、生きることに關しては才能があるみたいだね。どちらにしろ殺すけど」

「どうすればあの機械の腕を壊せる？ 何か活路はあるはずだ。この世に完全なものなど存在しないはずだ。必ず物には一長一短がある。ダイヤモンド然り、化石燃料然り。

「さて……これ以上奥へは進ませないよ？ 再調整中なんだから。

あと少しで完成なんだからさ！」

次に取り出したのは巨大な剣だった。左手からは刃渡りが長い、巨大な両刃剣が握られ、右手にはビームを備えている。近づけば、斬られ、遠ざけば、溶かされる。

すかさずビームが飛ぶ。それを再び横に転がり回避。光の速さよりは若干遅いようだ。

「そらそら！ いつまでかわせるかな！？」

次々と床が溶けてゆく。溶かされた床はどろつとした液体になつていて、水蒸気を上げている。あれがもしも俺の体に当たつたとするとならば 考えるまでもない結果になる。

「しまつ……」

回避したものの、次の行動に入るまでのタイムラグが大きかつた。顔面にビームの発射口が見えて。

今、この瞬間に俺は死の恐怖を知つたのだ。光線を吐き出す銃口を今、向けられている。このままでは ！

そして、俺はたつた一つのギリギリの活路を見出した。

「うおおおおおおおおおおおおおお！」

ポケットから拳銃を抜き、普通では考えられない速度でハンマーを起こす。これも手袋のおかげだ。そして、その拳銃をビームガン・アームの銃口に突きつけ、引き金を引いた。

バン！ 銃声が響き、そして同時にアームから火が吹き、壊れた。「ぐわああああああつ！？」

俺はこう考えたのだ。外側から破壊できないなら内側から破壊してしまえば良い。外側の装甲がどうなつてているのかは知らないが、この手袋の拳を受け止めたほどなのだから銃弾など跳ね返るに決まつてているのだ。

「あつ……ぐがつ……」

沙雪さんの右手にはアームの破片が数十も突き刺さり、流血していた。右手は赤いペンキを腕につけたように真っ赤に染まり、痛々しさを物語っている。今なら口口せる。ヤレ。

「さつきからつるせいんだ！ 僕はアンタを殺したりなんかしないツ！」

「だまれっ！ わたしの……右腕を失くしても、あの十一郎には触らせない……！」

「なんでだよ！？ なんでそつまでしてシャノンに固執するんだ！ 恨みもあるのか！？」

「わたしにはこれしかないんだ！ 巫女としての役目を真面目に果たす気になれなかつた……。興味が湧かなかつたし、第一わたしはあの神社が嫌いなの……！ それで、他に何のとりえもないわたしが唯一、思春期を投げ捨てでも、没頭した研究課題なんだよ！？ 君に何が分かるつていうんだ！」

「だからってなんで、そんな人を道具みたいに扱うんだ！ それになんでシャノンが殺人マシーンになつちまうんだ！？」

「分からなイツ……分からなイ、分からなイ、分からなイ、分からなイ、その問題には答えられないよ……」

「彼女が何の理由で道を踏み外したのか分からなイ。ただ、分かることはここの人間は壊れているという事だけだ。『研究者』たちのリーダーでさえも壊れてしまうほどの狂気で汚染されている場所。こんなところは

「こんな問題でもなんでもない……！」

「だから、もう近づいてくるなああああああああああああああああああああ！」

ホントの彼女はどうちなのだろうか。あの俺に見せていた、少しどジなところなのだろうか。それともこつちの研究者としての彼女なのだろうか。どちらにしても、まずはここから助けないと始まらない。殺しは救いになどならない。

ビュン！ と沙雪さんの左手の斬撃が俺の髪を一、三本持つて行く。機械といえども、中々に速く正確な攻撃ではあるが まだ遅い。しかし、下手に攻めに出ると、攻撃範囲が大きい剣に腕ごと斬られてしまうから、防戦一方になつていてる。

「君に何が分かる！ 君につ！ 何がつ！ 分かるつ！？」

俺にかわされた剣は「ことじ」とく、実験用であろうカプセルを粉碎していく。それくらいに彼女は壮絶な痛みと狂気に当てられて混乱している。

「あれは！ 私の、人生の、結晶だ！」
「関係あるか！ それはエゴだ！」

關係あるが、それは――た

せりしても避けきれず、右手でガードすると手袋が負荷に耐えられず内側からはじけた。少し手がひりひりとする。それでもつ後は無くなってしまった。

卷之三

高速で追ったアーヴの肘うちを喰らってしまい、俺の身体が力尽きる。セルに当たり、数十ものガラスの破片が背中に突き刺さる。

意識が飛びかかるが、何とかこらえた。剣の攻撃が迫るか、頭を少し動かしてかわした。剣をかわすと、続けてまた肘うちが迫り、手袋をしていないほうの手でガードした。

一ツ！？

骨は折れてはいないうだつたが、想像を絶する痛みが全身を駆け巡つた。よろけてしまい、追撃を受ける。俺は本能的に右手で剣をガードした。それに連なつて左手の手袋もはじける。

たつた一秒にも満たないスキを突いて、彼女のアームの腕部分を掴み、動きを停止させる。壊すことは出来なくても動きをとめることがくらいならできるようだ。左腕がいつ折れたつておかしくはないぐらいの負荷がかかっていた。

「アーニング」

「アンタはD・D計画のことを後悔してんのか?」

彼女は最後の手段として、白衣の内側にある紅音

チを取り出そうとしているのだが、

「してない、よ……」

俺はぎりぎりとアームを持ち上げていく。自分自身、どうやって生身でこの力を發揮しているのか分からぬ。

「アンタのその才能はちゃんと使えば役に立つはずなんだ。だから……上に上がって罪を償つてこい……」

俺は空いている右手のほうで彼女のみぞおちに拳を叩き込んだ。

「うつ……この偽善者……」

彼女は倒れ込み、アームからも力が抜ける。そして俺は沙雪さんを引きずるようにしてリフトの中へ収容した。ついでに白衣の中についたスイッチも俺がとつておいた。

「偽善者だろうがなんだろうが、構わない。なぜなら俺はエゴイストだからな」

この人は他人をたくさんサンプルにしてきたことだろう。俺の手で殺すのではなく、彼女自身の力で活路を見出だしてもらわなければ償いにはならない。

ようは生き地獄を味わつてもうう、といふことだ。

殺人を正当化するわけじゃない。誰かに救つてもううのか、法廷で裁かれるのか、行方をくらませるのか。どれをやるのか分かったもんじやないが、それも彼女が決めることだ。

エゴの押し付けかもしれない。それだったとしても沙雪さんには反省して欲しいのだ。俺は彼女のこと信じていないし、許しちゃいない。矛盾しているかもしれないが、そうなのだ。

あんなバカげた計画を作ったのだから。

「そんじゃ……もう一人助けに行きましょか……」

シャノンを助けてあけなければならぬ。彼女は自分が作られた存在だと。人造人間であると、分かっているはずだ。記憶を操作できるなら、それを消したい。

俺は携帯を取り出す。地下深くではあるが、どんな機械を使っているのか分からぬ。アンテナはしっかりと三つ立っていた。俺は玉碎覚悟で電話を掛けた。

通話相手は二コール目で出た。

「師匠?」

『天真……どこからかけている?』

変なところで鋭い人だな。やっぱり師匠には一生勝てそうにもない。

「師匠は大丈夫ですか? 僕は……言わずとも分かるでしょ?」

『俺は大事ない。それで、用件はなんだ?』

俺は研究所の中をゆっくりと歩く。研究所の中は沙雪さんが暴れて壊したせいでめちゃくちゃになっていた。カプセルは割れ、危ない色をした液体は床にぶちまけられ、コードは切れて火花を散らしていた。

そして、一番奥に、唯一壊れていないカプセルがあつた。透明な液体の中にヘッドギアをしたシャノンがいた。そしてその横にはグラフや%で記された何らかの数値が映し出されているモニターが二、三台あるだけだ。そのモニターには残り十分と書いてあつた。「今、シャノンが再調整つてのを受けてます。それを止めるにはどうしたら良いですか?」

『まったくこのバカ弟子が……どこにいる?』

「赤レンガ倉庫です」

『赤レンガ倉庫……? どこだ、そこは? 新しく出来た開発地か? 研究所の位置は……どこだ……?』

やはりだ。俺みたいな特殊なやつじやないと、一般人にはここが認識できないようだ。来栖の言つていたことは師匠にも通ずるらしい。

「とにかく。今シャノンの頭にヘッドギアが被せてあるんです。それと変な数とグラフが表示されるモニターとキーボードがあるんですよ。どうしたら良いですか?」

『……分かった。そのヘッドギアはおそらく壊せないようにできているはずだ。だから別の手段を使う。ただ、お前だけでやるのはほぼ無理に近い。誰か助手を連れて来い』

『時間がないんだ! お願いします、早く!』

「分かつた……バカ弟子が。良いか、今からやるぞ。たいていはタ
イピングだ、お前パソコンは出来たか？」

「人並みには」

「タイピングか。キーの位置を正確に把握し、大体の位置を覚えて
いないと早打ちは出来ない。だから俺は、右目に意識を集中させて、
一度もやったことのないことを試みた。」

「視覚の拡張。できた。一八〇度全て見渡せている。成功だ。まあ、
成功したのは奇跡だろう。いくら、可能性を持つている目だからと
いつて一発でこの芸当を可能にしたのは数々の偶然が重なったから
だろう。」

（神様つて本当にいるかもしないな……信じたくなつた）

『グラフの横に何かを書き込める場所があるはずだ。そこをクリッ
クしな』

すると、大量のテキストが画面に表示された。

『それに表示されたのはいわばシャノンの脳内の情報だ。そのヘッ
ドギアは今それを書き換えているはずだ。今までの記憶を全てなく
すためにな。今から言う英文字を全て付け足せ。俺が研究所を抜け
た際に持ち出した脳内データだ。成功すれば、お前と出会う前の記
憶が戻る。自分が作られたものであることも忘れる。ただし、一つ
でも間違えれば……』

俺と出会う前の記憶……ほんの一週間くらいの出来事は全てなか
つたこと、になる。それは俺にとって悲しいことだ。しかし、自分
のエゴにも限度があるつてもんだ。だから俺は、

『間違えれば？』

冷静に答えた。自分を押し殺してまでも、彼女を救いたかつた。
理不尽な出来事に巻き込まれたシャノンを。

『彼女は彼女の全てを失い、一度としゃべれなくなり、一度と怒ら
なくなり、一度と泣かなくなり、一度と歩かなくなる……ただの人
の形をした人形になる。それでもお前はやるか？』

師匠は今までにないほど切羽詰つた声でたずねてくる。

『お前の手に一人の女の子が託されているんだ。人形になるくらいだつたら、まだ殺人マシーンの彼女を止めたほうがまだ楽かもしれない……それでもお前はやるか?』

俺の手は嫌な汗でぐつしょりと濡れていた。手だけではなく、全身からも嫌な汗が噴き出している。そして俺は師匠の問いに答える。「やつてみせる。元々彼女の問題じゃないんだ。巻き込む理由なんてなかつたのに」

ヒーローになりたいとか、カッコつけたいとか、そんな理由じゃない。ただ大人の問題にこんな可愛い女の子を巻き込むのは間違っているという当然のことを示すだけ。俺の行動を突き動かしている思いはただ、それだけなのだ。

「じゃあ、鑿匠……言つてください……。」

もう一つのモニターには、WARNING！と警告を表すウインドウが消えては現れ、現れては消え……というのを繰り返していた。

『そこから改行して・ad q m d・v g m d a.j g a d g・a g・
j/ a d j t o g P d.j P D A G.....』

あれ、少し頭がぼうつとしてきたな……。タイミングはできてい
るから大丈夫か……。残り時間を示すモニターには『あと三分』と

表示されている。

俺のタイピングのペースはあるのヘッドギアがシャノンの脳のデータを書き換える早さに追いついているのだろうか。

もし三分以内にシャノンの脳内データを全て書き換えられなかつたらどうなる？俺の書き換えデータが半分とヘッドギアの書き換えデータが半分、ということになるのか？

師匠に聞けばいいのだが、今はそれどころではない。

『天真、あともう少しだ
いるはずだ。あと二回分だ？』

「あと……一分ですね」

あれ、右目の視界が二三秒にも満たない瞬間に、たゞ一瞬だけ、

疲れたが愚痴つている暇はない。

そして、

『……で終わりだ。じつだできたか?』

た。

壮絶な、頭が今にも内側から膨張して張り裂けそうな痛みのする頭痛が俺に襲いかかったのだ。

か…… あああああああああああああああああああああああああああああああ

!

痛みのあまり思わず絶叫してしまつ。今までのどんなフィードバックよりも痛い。こんな痛みを味あわせ続けられていたら頭がおかしくなりそうだ。まだ能力は使いきっていなければはずなのに……。俺の視界の隅に残り三十秒という文字が見えた。絶望的。その言葉が相応しかつた。

どんな活路も見えやしない。あと、一十五秒。

覚えてる範囲だとたつたあと一十三文字だ。二十三個の記号をあのモニターに打ち込めば、シャノンは助かるはずなのに。右田のモードを通常モードにすれば少しは痛みが緩和するだろう。しかし、それをやつたらタイピングが間に合わない。

あと二十秒。

頭でも、手でも、目でも、神経でも、精神でもなんでも持つていつて良い！ お願いだから、俺の言う事を聞け、俺の身体！

あと十七秒。

「ちくしょうがあああああああああああああああああああああああああ！」

ああ！

指を動かす。あと十秒。あと十一文字。

「止まれエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！」

カタタタタタ…… 3、2、1、0。ビー！ と、いつあからさまに機械から出力しているようなノイズが部屋に響いた。

俺の身体はもう、何も、動かせない。指一本でさえも動かない。そして、目だけで打ち込んでいたモニターとは別のモニターを見ると、

『再調整再構成は共に原因不明のエラーにより実行を中止されました。検体を排出します（Hマークモード241）』

「はははつ……良かつた……」

カプセルからシャノンが出てきた。服までもが濡れていって、いつものように眠っていた。

（こいつはホントに寝てばっかだな…… 赤ん坊みたいだ。少しあは活動しきつての）

俺は横たわりながら、そんなつまらないことを思った。これであとはここを失くしてしまえば、シャノンが危険に晒されることはな

くなるのだ。

そして、俺は気が付く。右目が見えていない。一面の黒。何も見えない。何も、見えて、いない。

「あ……ああ……」

見えなくたつて構わない。シャノンが助かったのだから。しかし、弱り目に祟り目、泣きつ面に蜂とはよく言ったものだ。今、このカプセルより奥の部屋で、火が上がった。原因は不明だ。カプセルの水が床に浸水しているから、それが引火性であつた影響かもしれない。もしそうだったとするならば、ここも浸水をしいる。時期に火の手が回つて、俺たちまる」と焼死体になること間違い無しだ。

シャノンを抱えて運ぶほどの余力は残つていない。こうなつたら引きずつてでも、助け出してやる……！

ほほ、意識が朦朧とした状態でシャノンの首根っこを掴み、引きずりながら、あのリフトを目指す。シャノンは小柄だから沙雪さんがいてもギリギリあの中に入るだろ？

「はあ……はあ……」

俺の右目はどうなつてゐる？ 俺は今どう歩いてゐる？ 火はどちらくらいまで迫つてきている？ あとどれくらいでリフトに着く？ 死ぬのか？ どうすればいいんだろう？

様々な思ひが頭の中で交錯し、爆発しそうになる。ちゃんとリフトの方向へ向かつてゐるのかどうかさえ分からなくなつてゐる。この空間が真夏の昼間のように暑くなつてゐる。ああ、火がすぐそこまで來てるのかな……。そう思つてみると、沙雪さんが倒れて収納されているリフトの前に着いた。

投げるようにしてシャノンをそこに入れて、リフトのボタンを押す。すると、すぐさま上へと行つた。これで彼女達が火の海に飲まれる可能性は消えた。リフトの前に扉をしてワイヤーが切れてしまわないようにしたかったのだが。そもそもいかないようだ。

俺はその場に倒れた。頭痛という範疇を超えた痛みで、目さえも

動かせなかつた。そして、俺は火がこの床に溜まつた液体を便りにして迫る中、俺の意識はブツリと途切れた。

問題終了（前書き）

ここまで読んでくださり、誠にありがとうございます。

シャノン＝フォン＝フォスターは病院の一室で目を覚ました。なぜ自分がここにいるのか彼女には分からなかつた。シャノンは確か、雨富という男と行動を共にしていた、と彼女は記憶している。ただ、そこには妙な違和感があつた。

雨富に連れられて、『横浜』というところに来たのは六月の初頭だつたはずだ。しかし、横にあるデジタル式の時計の日付けを見るともう、六月の中旬であった。タイムリープしたわけでもなれば、丸々一週間眠り続けたわけでもない。

何か、違和感がある。とても切なくなるような、とても悲しいような。

「シャノン、元気になつたか？」

病室に入ってきたのは雨富だつた。

「うん。別に……。イサオ、あたしつてビのくらいい眠つていたの？」

「一日だ」

「本当なの？」

「ああ」

「あたしは六月の最初から今まで何をしていたの？」

「……」

彼は答えなかつた。苦虫を噛み潰したような表情だ。そして、しばらくの沈黙の後、

「お前は、夢を見ていたんだ」

「夢？」

「そうだ。その違和感はおそらく夢なんだろう」

「ふうん……そなんだ」

雨富はそのままシャノンに背を向け、病室から出て行つてしまつた。彼女も気分転換に、と思い、病室の扉から出た。医者からの許可は出でていなかつたのだが、身体を動かさないといつてもたつてもい

られなかつたのだ。

彼女のとなりの病室には『中松 沙雪 様』と書かれた病室らしかつた。そこには近寄らないで置いて、とシャノンは本能的に思ったのだった。

その病室を通り過ぎると、黒い短髪の少女とすれちがつた。

「……シャノンさんじやないです。無事で何よりです。早く彼のところへ行つて来て下さいね」

彼女はそう言い残すと、いつの間にかどこかに消えてしまった。（あたしの名前を知つてたみたいだけど……あの人は一体誰なんだろ……しかも誰かに早く会いに行けって……）

あの少女が違和感の正体なのだろうか。シャノンは雨宮の言つたことがいまいち信用できていなかつた。やはり、このモヤモヤしたこと違和感は夢などではない。

ただ、今通り過ぎた病室から女性の罵声が聞こえてきたのだ。
「なんでいつもいつもそつやつてケガを作つてくるのかしら！？
他人に迷惑がかかつてゐるじやない！ 何回経験すれば気が済むのかしら！？」

興味本位で、その病室の中をドアの隙間からそつと覗いた。中には、おそらく言葉をまくしたたている少女とベッドに座つてゐる人がいた。ベッドに座つてゐるほうの人の顔はちょうど死角に入つて見れなかつた。

「お咲びとしてハンバーグ作つてよ、ハンバーグ！」

とても、いい響きの言葉だ、とシャノンは思つた。ハンバーグつてどんな食べ物なのだろうか、おいしいのだろうか……シャノンの頭はそれでいっぱいになつた。

なぜかわからないが、シャノンがその言葉に反応したのかどうかは彼女自身分かつていなかつたが、その病室のドアに手をかけていたのだった。

黒木天真是その時、死の淵に立たれていたらしい。

らしいというのは、俺が研究所の中でシャノンたちを上に送つて倒れた後、あの研究所に火が回るほんの少し前にサイカが排気口から俺を拾い上げてくれたらしい。彼は逃げているうちに排気口にたどり着いたとか。サイカには命を救つてもらった借りができてしまつたようだ。

その後のことだが、俺の右目を見た目は至つて変わつていなかつた。気持ち悪い目になつていなくて良かった、と一安心したいところのだが未だに失明状態であるのだ。ようは、ただの義眼になつてしまつた、というわけだ。使いすぎによる問題なのだろう。少しは不便になるであろうが、慣れれば問題ない。

「いやあ……平和だ……」

赤レンガの地下はその後、爆発。資料から機械まで全てがなくなつてしまい、事件の解決は難航しているそうだ。じきに研究所にいなかつた『研究者』のメンバーが捕まるだろう。それで、そのリーダーの沙雪さんはとくと今はまだ病院で治療中だ。俺は彼女を許したわけじゃない。ただ、同等の代償は払つてもらつつもりだ。

事件の一抹はこんなところだ。俺、今までの出来事書籍化したら小説家になれるんじゃないか。左腕骨折してのけど。ベッドの横の机においてある携帯を見る。携帯はどうやらちゃんと機能するらしい。

「……黒木さん、お見舞いに来ましたよ」

「リリス……お前はドアをノックすることを知らんのか」

「何かやましいことでもしていたのですか？」つい、ムラムラしてしまつたとか

「しどらんわ！ しかも女の子がそういうこと言つちやダメ！」

彼女は少し、ハツとした表情になり、すぐにもとの表情に戻つた。

「まあ、変態が変態であることには変わりはありませんが……わたしの用件を言つていいですか？」

「なんだ？ また口クでもないことなんだろ……」

「約束は守つてもらいますよ？ あなたの目を研究するというお忘れになつていませんよね？」

「あ……」

完璧に忘れていた。しかも俺の今の義眼は機能していないのだ。それがバレたら代償としてどんな生体実験をさせられるか分かつたもんじやない。

「わ、忘れてるわけ無いじゃないかあはあははははははは……」

ジト目でリリスが俺を見つめる。はあ、どうして俺つてこう蔑まるハメになるのだろうか……。

「まあ、良いです。あなたが無事であればわたしはそれで」

「え……今なんて？」

すごくご褒美級の言葉を聴いた気がしたのだが。俺は難聴でもないし、空耳でもないと思うのだが。

「大事な実験動物に死なれては困りますからね」

「やつぱりこの人サイテーだ！ はあ、いい加減うつ病になつちまいそうだ……」

「用は済んだので帰ります。さようなら」

そう捨て台詞を吐くと本当に病室から出て行つたのだった。一体何がしたかったのだろう。迷宮入りになりそうなほどの謎だ。

そんな気を晴らすべく、晴れ渡つている青空を見上げようとしたとき、

「天真つ！」

「げつ、凜……」

「人を見た瞬間げ、とは何よ！ げ、つて！」

「ここは病院ですよ～ 静かにしましょ～、シー～」

俺が顔の前で人差し指を立てると、凜はゆでだこのように顔を真つ赤にし、

「人が心配してやつてるというのに！ それに……なんでいつもいつもそうやってケガを作つてくるのかしら！？ 他人に迷惑がかかる

つてゐるじゃない！ 何回経験すれば気が済むのかしらー？

「他人？」

「わたしよー わたしー！」

「なんで？」

「なんであつて……そんなことは良いのつ！」

彼女は今までに、俺にとつて恐怖の権化であった。この説教癖と世話焼きが彼女の特徴である。昔から面倒なのだ、これが。

「お咲びとしてハンバーグ作つてよ、ハンバーグ！」

「ええええ……」

ハンバーグといつとつ、シャノンを思い出してしまつ。彼女の部屋に見舞いに行こうかと思ったのだが、今のシャノンは俺の知つてるシャノンではない。俺に会つ前のシャノンなのだ。だから、見舞いには行かなかつた。

そう思つてはいるが、病室のドアがガラツと開いた。そこにいたのは、

「……あ」

彼女が気付いたように声を出した。純粋な金の輝きを放つ金髪、くりくりとしたサファイアを連想させる瞳、小柄な身体。

「シャノンちや……んんつ！？」

俺は立ち上がりて彼女の口を塞いだ。

「どうしたんだ？ こんなところに用か？」

「えと、うんと……」

凜がいつもするクセのようにモジモジして、彼女はぼそりと呟いた。

「ハンバーグ……」

「ふつ……」

彼女の記憶は変わつてしまつたのかもしれない。俺たちのことは何一つ覚えて何のかもしれない。でも、時間はまだある。やりなおす。

「じゃあ、今度俺の寮に来いよ。作つてやるから

彼女の目はもう、儚げではなく、元気な一人の少女の目つきになっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6777v/>

この問題、答えられますか？

2011年8月18日03時28分発行